ＩＳ（インフィニット・ストラトス）　未来（あす）を目指す超越者と純粋な存在

ナハト・リコリス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＩＳの話でこれで２作目になります。

今回の話は一応Ｒ系ではなくノーマルですので、間違えないで下さいね。

それとこの作品でのアンチ対象は篠ノ之姉妹・織斑姉弟とオリジナルのキャラになりますが、このキャラのこの扱いは嫌だ。こんな展開なのは嫌だ。

と言う方はバックしてください。

――

神に転生してＩＳの世界に来た『草薙和輝』。
だがしかし、その世界で白騎士事件で両親をなくした彼は真実を思い出し、同時に復讐を思い立つ。
そして彼は仲間と共にＩＳ学園に行く

これは作者が別のサイトで投稿してる東方Ｐｒｏｊｅｃｔの世界観をいれていますので、東方キャラがいますが、基本東方キャラはＩＳの世界には来ませんし、原作キャラの一部が不運になっていますが、主人公と一夏のハーレム要員ですので、ご安心ください。
ただし、主人公と一夏のハーレムの人数は１０人越えです。

一夏にはオリ主の弟がいる設定ですが、この弟に関してはオリジナルキャラのハーレム？扱いにする予定です。

目次

プロローグ ―――― 1
プロローグ2 ―――― 10
人物・世界観設定 ―――― 21
ＩＳ設定 ―――― 43
人物の能力・作中のオリジナル設定物の設定 ―――― 57
第1章　始まりの学園生活
第1話　ＩＳ学園の入学なんだが、嫌だなあ ―――― 64
第2話　再会した姉妹なのだが・・・ばれたら俺、死ぬな ―――― 77
第2．5話　刀奈の思い。和輝との出会い ―――― 90
第3話　和輝ＶＳレイナ　試合よりも、周りの人間がめんどい ―――― 102
第3．5話　和輝の心情と真耶の思い ―――― 122
第4話　秋斗のクラス代表決定と新たな波乱 ―――― 134
第5話　セカンド幼馴染の鈴登場。そしてクラス対抗戦へ ―――― 141
第5．5話　秋斗の思いと能力（ちから）、蘭の思いと迷い ―――― 151
第6話　弾の決意と、謎の予感

161
第７話　新たな敵の予感と、闇の策略 ―――――――――――――― 175
第８話　金と銀の転校生　新たなる面倒事の始まり ―――――――――――――― 184
第９話　シャルロットと簪からの苦情・特製ブラックリスト ―――――――――――――― 193
第１０話　ラウラの断罪・救いの無い意思 ―――――――――――――― 203
第１１話　全てが終わった後 ―――――――――――――― 210

プロローグ

インフィニットストラトス、通称『ＩＳ（アイエス）』は『白騎士事件』という事件があり、その事件での驚異的な事実の元、瞬く間に世界に浸透していったとんでもない性能を秘めた兵器の事だ。

製作者が言うにはＩＳは兵器等ではなく、宇宙開発を主としたパワードスーツなのだが、さまざまな国の思惑もあり、ＩＳと言えば兵器と言うのが世間一般の人が知っている事実でもあるのだ。

白騎士事件は内容を口や紙を使っていえば簡単で、世界中に存在している日本を射程距離内としているミサイル『２３４１発以上』が日本に向けて発射されたのが始まりである。

発射された理由に関しては事件後の調べでテロリストか何かが各国に存在する軍事基地のコンピュータに侵入し、ミサイルのシステムを奪って発射したとされている。

そして、その半数近くを『白騎士』と呼ばれるＩＳを纏い、顔を隠した謎の存在が撃墜したのだ。

しかもその当時は未だ架空の兵器としてされていた『荷電粒子砲』を使ってのミサイ

ルを攻撃し、ミサイルを撃墜したりもした。
それだけではなく、これだけの高い性能を見せた白騎士に対し、世界各国は『白騎士』を捕獲もしくは撃破しようと各国は大量の戦闘機や戦闘艦などの軍事兵器の大半を送り込んだのであるが、その全てが無力化し、そして白騎士は夕日の中に消えて行ったとされている。
そして、ＩＳが認められた驚異的事実でもあるのが、これだけとんでもない事件にも拘らず、『死者が皆無』という事実が存在しているのだ。

だがしかし、真実は違うのだ。

この日時にあった情報関係を少し周囲深く調べれば分かるのだが、白騎士事件があった日、日本中で『死亡事故』が多発しており、その日の事故で死んだ人や重軽傷者の数を合わせれば、何と『８０００人』近い人間がその日死んでいたり、大小の差は存在するが怪我を負っている人達がいる事実が存在している。
とは言っても、それらは全て地方新聞などで小さな記事として存在しているだけで、誰も気にも留めようとしない情報でもある。

だがしかし、この誰も気にとめようともしない記事の情報が『白騎士事件』における本当の真実なのだ。

白騎士が破壊したミサイルの破片等が日本の領土内に落ち、そしてそれが原因で車や家、ミサイルが発射されたと言う勧告を聞いて逃げていた人々の頭上に落ちたりし、破片が落ちた先での二次災害等による死傷者と、重軽傷者が存在していたのだ。

同時に、世界各国の戦闘機のパイロット達の一部は白騎士を捕獲・破壊するさいの戦闘が原因で脱出装置が故障し、死亡している。

それらの数も入れれば、この白騎士事件での死傷者と重軽傷者の数は『約1万人近い』程になるほどだ。

だがしかし、その人達の人生は生まれ故郷でもある日本や自分達の生まれた国の国家、そして各国政府の高官の一部により、ＩＳを造りだした人間の生まれ故郷であると言う事と、ＩＳの持っている高い性能と能力を有効活用していこうという思いで哀れにも利用されてしまい、真実は闇の中に葬り去られたのだ。

俺、草薙和輝は俺を産んでくれた両親をこの白騎士事件が原因で死んだ。

同時に当時８歳だった俺は両親の死を目の前で見てしまった事が原因でトラウマになり、眠ってもその死の場面を何度も思い出していた。

だが、政府高官の一部はＩＳの持っている性能や能力を使って日本が今後の世界の中心に立ちたいと思っている野心ある人間達が原因で白騎士事件での死者はいないと発表し、俺のような存在に対しては催眠療法を利用して記憶を封印しようとした。

だが、今度はその催眠療法が俺はそれが原因で両親の死を悪夢として何度も苦しむ羽目になり、俺は催眠療法をされて僅か１年で封印されていた記憶を取り戻し、そして独自に白騎士事件の調査をした。

だがしかし、この時にはＩＳの生みの親である『篠ノ之束』が世界中から指名手配にされていたのだが、元々彼女に関しては友人等が少ない事が原因で俺は簡単に白騎士事件の真相を知る事ができた。

とは言っても、実際は本人達に聞いたのではないが、調べた情報等を総合した結果でしかないのだが。

答えは簡単で、白騎士事件はＩＳの生みの親である篠ノ之束による自作自演だと。

そう思うと俺は怒りを隠せなかった。

俺は実は転生者で、俺を転生させてくれた神がこの世界が漫画等の世界の一つで、『こんな感じの世界』と言う風に教えてもらったが、元々この世界の情報を持っていない俺に取って、最初から言ってどうでも良かった。

確かに転生の特典で能力等を貰ったが、元々原作の世界を知らない俺に取って貰った特典に関しては、物凄いぐらい卑怯であると言えるのだが、今の俺の生活ではそこまでいい物であるとは思ってもいなかった。

ただ白騎士事件が起きるまでは転生者であるという事実を秘密にしたまま生きている俺に取って、今の家族と『一緒にいる時間』は大切だった。

将来は貰った特典で少しでも今の俺を育ててくれた両親を安心させ、そしてこんな秘密を持っているが、使わないで一生を送るほうが良いだろうと、そう思ってもいたのだから。

だからこそ、そんな家族としての一番『大切な時間』を篠ノ之束と言う自己中心的な存在によって奪われたのは我慢なら無かった。

俺は神から貰った特典を利用してこの世界でＩＳに使えそうな物を幾つか造り出し、同時に神から貰った俺のＩＳでもある『ガンダムアメイジングエクシア』の対とも言え

る存在である『ガンダムエクシアダークマター』も造りだした。
同時に俺はそれなりにＩＳ方面で使えるような物品を作り出した後、白騎士事件後に日本政府が俺の両親が死んだ事を隠した際に渡してきた大金だったが、造りだした物品が原因で全介護状態で何度も介護方面のサービスを利用したため、貰った金に関しては大部分使っていった。
それでも介護等の保険や両親が死んだ際に出た保険金等で残った金を利用して株などで大金を稼いでいった。

その後家の近所にあった工場を買い取って『テスラ・ライヒ』と言う名前に変え、その後ＩＳ関係と同時に俺や俺以外にも白騎士事件の被害者は存在しているのだが、その大半は白騎士事件での出来事を納得し、ただの事故として思っているため、俺は少しでも命を救うための可能性を上げる為に、救急と救命方面関係の仕事が出来るようにもしておいた。
まぁ造りだした反動で俺は本当の記憶を取り戻した後に何度も病院や介護士の人達に全介護による生活を送る事になったが、それでも俺の怒りと憎しみの負の連鎖は止まらなかった。
まぁそのせいで色々と困ったとも言えるが、それでも俺はそんなのは関係ないといえ

るほど何度もやっていた。

篠ノ之束をこの手で捕まえ、人としての『当たり前とも言える感情や思い』すらないこんな存在に、俺は容赦する気など一切無かった。

そう思い、何度も俺の覚えている限りの機体に必要な素材やシステムを造りだして行った。

『サイコフレーム』・『オリジナルのＧＮドライブ』・『ＴＬＩＮＫシステム』等など、俺が覚えている限りの存在で、それらで使用していた機体で量産期関係の一部を世に出したりして会社を大きくしていった。

何しろ俺が造りだした素材やシステムは存在していなくても、機体性能が高いと言う事で世の中には大反響を受け、あと少しで第２回モンド・グロッソが開始すると言われている時には世界でもそれなりに有名な会社になっていた。

一応参戦したのは第２世代開発機体では一番遅い存在になったものの、それまではフランスのデュノア社が製造した『ラファール・リヴァイブ』が良い機体といわれていたが、テスラ・ライヒが開発した『ビルドシュバイン』の方が性能が良いと言う事で世界で有名な会社になった。

さらに俺は神から貰ったＩＳである『ガンダムアメイジングエクシア』の機体性能等を調べる為に、プライベートの場所であると同時に、俺がＩＳと言う存在に慣れるための特殊特訓場として無人島を幾つも買い取り、貰った機体の性能を調べていった。

同時にオリジナルのＧＮドライブである為ＧＮドライブの粒子が外に漏れないように改良を施し、

ＧＮドライブの秘密が篠ノ之束にばれないようにした。

何しろばれた場合、篠ノ之束はオリジナルではないがＧＮドライブを完成され、さらにそれを利用して白騎士事件の時以上の事件を起こすのも俺には目に見えていたからでもある。

そしてこの時の俺は『実戦訓練』が必要だと思っていたが、その時にはＩＳが『女性のみしか使えない』という理由で男女平等と言う時代から、『女尊男卑』へと変わっていっている時代で、法律は女性に対しては有利とも言えるような感じにちゃくちゃくと法律は制定されていっていた。

中には悪法とも呼べるようなものも出そうであったが、それは阻止されていた。

そのため男が強くなると言うのは出来ないような状況下になってきており、俺も少しは途方にくれていた。

だがしかし、俺は運が良いのか悪いのか未だに分からないのだが、俺は『幻想郷』としう
『人々から忘れ去られた人や物の行き着く場所』という不思議な場所に来てしまったのだ。

プロローグ２

俺は中学最後の夏休みに『幻想郷』と呼ばれる場所に幻想入りしてしまい、そこにいる博麗神社の巫女である『博麗霊夢』に会い、そしてそこで良いのか悪いのかは分からないが、俺は人間から『半人半鬼』という種族が変わってしまい、そしてさらに種族が変わったと同時に俺は霊夢と紅魔館の面々、そして紅魔館に来ていたアリスと関係をもってしまった。

それとは少し話は違うのだが、ＩＳの世界ではできない戦闘訓練をする事が出来た。ただ時間の流れが違うらしく、俺は色々あってすぐには帰れなかったので幻想郷で約２ヶ月間ほどいたのだが、帰った時には夏休みは終わっている上に、授業が始まって１ヶ月ほど立っていることが分かり、流石の俺も唖然としてしまったほどで、その後霊夢と紫さんと話して何とか時間系に関しては大丈夫なようにしてもらった。

それとだが、何故戦闘訓練ができたのかと言うと、幻想郷には遊戯ではあるのだが『弾幕ごっこ』というものが存在し、それと同時に俺がいるＩＳ世界の住人で、今は少し違うのだがＩＳが出た後に世間から否定され、余りにも理不尽とも言える勝手な理由で仕

事を解雇させられたり、周囲の女性達からのいじめにより男性は肩身の狭い思いをしていき、その結果自殺する人も多くなっていた。

そういった自殺者の一部はこの幻想郷に幻想入りし、そして人里で暮らしているのだが、幻想入りした人の中には元々軍や町で武術や護身術を教えていたり、車などの製造に携わっていた技術者だったりと色々で、元の世界で男性だからと言う事で地獄のような日々を生きるよりも、この幻想郷で日々笑って最後の余生を暮らそうとしていた人達もいたが、俺はその人達と話し合いテスラ・ライヒに出向してもらった。当初は皆怒ったが、俺の持っている思いを話すと理解してくれた。

同時に紫さん達幻想郷の面々も俺達の世界の話を聞いて同情はしたものの、幻想郷の賢者である彼女達の一部はもう忘れられた存在でもあるため、この幻想郷から出て外で生活する事は難しいため、自分達でできる方面での支援はすると約束してくれた。

とは言ってもそれ以外の人間に関しては大丈夫なので、ＩＳの世界を利用して幻想郷に無いような物を送ったりする事で話し合いをつけたため、飲食物や布団などの一部の大きな物が前よりも充実していったのは余談である。

俺はこの話し合いでとんでもない事実を聞いた。それはＩＳの条約でもあるアラスカ条約が一切守られていないと言う事実を教えてもらったのだ。

流石のこれには俺以外の人達も驚いていたが、その情報を教えてくれたのは元戦場カメラマンや元軍人の人で、紛争地域ではテロリストなどが跋扈し、その結果ＩＳを使って早期に事態を終わらせると言う理由でＩＳの使用許可していると言ったのだ。

だがしかし、正確にはＩＳを使っての早期決着に関しては非人道的とも言える虐殺で、銃を持った子供の少年兵さえ死んだにも拘らず玩具にして遊んでいたと、カメラマンの方は言ってくれた。

流石の俺もそれには信じられないと思ったのだが、ちょうど数日したら少し長い休みになるので、同時に言われた事が真実なのか知るにはちょうど良いと思って、紛争地域に近い国に旅行で行き、その後エクシアの持っている光学迷彩機能とステルス機能を使って調べたら、話されていた事が事実で会った事が分かった。

俺は見えない場所で虐殺の非道さに少し前に喰った食事を胃液と一緒に流し、そして俺はその紛争に介入し、６人ほどいたＩＳを使っていた女性を全員無力化した。

その後紛争地域にいた存在達は彼女達に今まで相当煮え湯を飲まされていたのもあり、しかも最強であるＩＳはエネルギー切れで使用できない状態になり、俺がその場から姿を消して少し上空で監視していたら、彼女達は男達に連れられて行った。

俺は連れられた女性達のその後を見る気は無かった。

今の今までそんな事をしてきた挙句、自分達の力ではなくＩＳの力を使用しての虐殺

行為には俺も反吐が出ていたのもあり、彼女達が消えた後にＩＳに対して射撃を行い壊しておいた。
エネルギーが無くなったＩＳは俺の攻撃で見るも無残なガラクタに早代わりし、そして離脱した。
その後俺は開発しておいたエクシア２機を交互に使い分けながら紛争地域でのＩＳ舞台と戦闘して行った。
何しろＩＳ部隊の強さは確かに強いと言えるのだが、幻想郷の人間と比べれば弾幕ごっこと命のやり取りと言う違いはあるものの、ＩＳ部隊の強さは幻想郷の人間よりも飛行などの方面も弱い上にだ、元軍人の人から体術等を教えてもらっている俺からすれば余りにも酷いとしか言いようが無いほど相手が未熟だったのだ。
それでも部隊では結構強いと周りの人間が言っていたのだが、俺からすればあまりの弱さに弱い者虐めをしているようだった。
一応これでも幻想郷にいる元軍人の人に俺の持っているＩＳの性能は高いうえに、自分が知っている限りでも『ビーム兵器』の採用は無いと言われたので、新たに弾薬系武器方面を作製したうえ、リミッターを付けて運用しておいた。
だがしかし、それでも強いと個人的に思ったので２・３回こういった奴等と戦ってそれなりに苦戦する程度でのリミッターを付ける事が出来た。

まぁ幻想郷ではリミッター解除状態でも上位にはいる人間にはボコボコにされ、中位の人間と何とか渡り合える程度の性能だったのだが、それよりも弱いＩＳ部隊ってどうなんだろうと思ってしまったのも事実であるが。

そして月日が経ち、俺は霊夢に告白をしたのだが、霊夢は事情があるから無理と断られたのだが、俺もその事情を知ってからは霊夢の答えを待つといった後、武術等で基本とも言える『心・技・体』をきっちりと鍛えていき、俺はエクシアを使って何とか幻想郷の上位者達の領域に入る事ができた。

同時に人を殺したりもしたが、当初はその点で胃の内容物を吐いたりしたものの、俺が殺したのはＩＳを使って虐殺行為を平気でしている存在や、自分が女だと言う理由で不当な扱いをしている存在で、あらゆる情報収集・調査専門で作っておいた特殊な複数のスーパーコンピュータでもある『ヴェーダ』を使って事実関係を確認してからやったものの、それでも人を殺した事に変わりが無いのであれだが、それでも俺は自分の意思ですると決めていた。

その後自分の世界で第２回モンド・グロッソが行われる事になったので、決勝戦を見るために会場の場所まで行ったのだが、そこで俺は誘拐事件を目撃してしまい、そして

俺は誘拐事件に巻き込まれてしまった。
誘拐されたのは世間でブリュンヒルデと言われている『織斑千冬』の弟でもある『織斑秋斗』と言う少年らしいのだが、本人は違うと言った後、自分は『織斑一夏』と名乗ると誘拐犯は誘拐をした方に対してに怒っていた。
誘拐犯の言葉を聞くと、織斑一夏は確かに織斑千冬の弟らしく、そしてその秋斗と言われた少年の兄らしいのだが、『出来損ない』と聞こえたので、俺は理由を聞こうと思った言ったら、一夏本人が話してくれた。
この時になって俺は始めて彼の顔を見たのだが、その目は物凄いほど暗く、本当に目の前の存在は生きているのかと言いたいほどだった。
そしてその後、誘拐犯達が笑って俺達のいる場所に来ると、ＴＶを見せてくれた。
そこには自身の専用機であるＩＳ『暮桜』を纏って出場している織斑千冬の姿があった。
「お前の姉には弟を誘拐したと言って、返して欲しければ出場は辞退しろといったのだがな。まぁ姉を恨むんだな」
「あぁ、すまないが、ちょっといいか？」
俺がそう言うと誘拐犯のリーダーの男は俺のを胡散臭そうな顔で見ていたが、俺が織斑一夏の事情を聞きたいと言ったら、不思議そうにしていたが、俺が一緒に死ぬかもし

れない人間の事を知りたいと言ったら了承してくれた。
そして俺に織斑一夏の事を話してくれた。
一夏に関してはＴＶで出ている織斑千冬を見た後、顔を下に向けまるで人形のような感じになっていた。

誘拐犯が言うには織斑千冬には2人の弟がいて、一夏の弟である『織斑秋斗』は周りから『神童』とも言われているほどの存在で、成績優秀・頭脳明晰・体力方面もばっちりと、超人と言えるような存在らしく、俺としてはそんな人間いるのかと思ったほどだ。
そして一夏はその秋斗の兄らしいのだが、秋斗に比べて全てが劣っており、出来損ないと呼ばれていたらしいのだ。
そして誘拐犯達は俺との会話の事態は終わったとして俺達を殺そうとしたのだが、俺はすぐさまアメイジングエクシアを展開し、逆に誘拐犯達全員を使ってこの場にいた誘拐犯全員を殺した。
その後ＩＳを纏ったうえに顔を隠した女が現れたが、男の俺がＩＳを纏えたのを見てもいないし知らないらしく、俺は軽く相手をボコボコにし、ずっと沈黙したままでいた一夏を連れてこの場から逃げていった。
その後新聞で知ったのだが、ドイツ軍がこの場所に来たらしいのだが、その時には男

性の死体が複数存在しているだけだったらしい。

その後俺は一夏を幻想郷へと連れて行き、一夏にこれからどうするのかを聞いた。

一夏は死ぬと言ったのだが、俺はそれを良しとせず、守矢神社で預かってもらう事にした。

何故守矢神社なのかと言うと、俺が博麗神社にいた時に早苗が遊びに来たので、早苗に一夏を預かってもらう事にしたのが理由だ。

その後俺は一夏と話し合い、オリジナルのＧＮドライブの持っている『可能性』を一夏に言うと、一夏は出来たら良いなぁと言っていたので、俺はちょうどにとり達河童に預けてオーバーホールを頼んでいたエクシアダークマターを見せに行き、そのさい一夏が触れて装着してしまったので、俺はエクシアダークマターを一夏専用に変更しておいた。

そして一夏に俺の弟にならないかと誘い、そして俺が言った『可能性』を見ないかと言った。

その後一夏は幻想郷と元の世界で通っていた学校に別れを告げ、違う学校に転校し、名前も『草薙刹那』と言う名前で入学をし直した。

そして俺達は紛争地域でのＩＳによる戦闘に関わりもしたり、普通に旅行をしてイギ

リスの元名門である『オルコット家』のご令嬢とメイドと出会ったりしたり、フランスに行ったさいにはデュノア社で働かされていた悲しい生き方をしていた少女を救ったりした。

また誘拐されていた日本の暗部に属する姉妹を助けたり、俺と刹那の２人は色々と人助け？もしたりしていた。

最初の２人は一夏の恋人になったのだが、同時に幻想郷に遊びに行った際に魔理沙さんが持ってきたキノコが原因で一夏が暴走し、偶然遊びに来ていた文さんと椛さんも巻き込んで色々としてしまったらしい。

そのせいで文さんが幻想郷で出している新聞でとんでもない事を書かれたが、事実でもあるので何も言えなかった。

ちなみに姉妹に関しては俺の恋人になり、序に言って俺の方面の皆と結託してその姉妹とも俺は関係を結んでしまったので、俺としてはどうしようと思ったほどだ。

そして刹那を弟にして中学を卒業する時期になり、刹那は高校に行く準備をしていたのだが、刹那の元弟である『織斑秋斗』がそれまで世間では『女性のみ』にしか使えないとされた『ＩＳ』を動かした『男性操縦者』として名を轟かせ、その後学校や企業等でも同じような男性がいるかも知れないと言う事で全国家が調べる事になり、そして俺

と刹那はその事実を世間にばらし、そしてＩＳ学園に行く事になった。
　同時にその頃には俺と刹那が使っていたエクシアの２機が国際指名手配存在として認定されてもいたし、俺と刹那の思いを可能にする機体も前々から考えて造り出していたので、そちらに乗り換えておいた。
　エクシア２機に関してはもうこの時点で三次移行（サード・シフト）ととんでもない状態になっていたのでちょうど良かったと思いつつ、俺達は新しい剣を持ってＩＳ学園に向かった。
　俺は『スタービルドストライクガンダム』を、そして刹那は『ダブルオーガンダム』という剣を持っていき、俺達はこれから先の未来で俺達が思っている未来を掴み取りたいと思っている。
　俺は因果を変えてでも未来（あす）が笑っていられる事を願い、刹那はどんな存在とでも分かり合いたいという思いを胸に、俺達は自分達が思っている未来の先に周囲の人々から『化物』と呼ばれるのを覚悟の上でこの道を歩くことを決めた。
　刹那も自分が人間から純粋な存在になることに対して一応ちゃんと言っておいたが、刹那はそれを認めた。
　俺も刹那も大切な存在とも言える恋人達が俺達２人をこれから先もずっと支えている限り大丈夫だろうと思った。

だって、人は決して一人で生きていけないのだから。

人物・世界観設定

草薙　和輝（くさなぎ　かずき）
１９歳　男性
ＣＶ　三木　眞一郎（みき　しんいちろう）
専用ＩＳ　『ガンダムアメイジングエクシア』　→　『スタービルドストライクガンダム』
持っている能力　『念動力を操る程度の能力』と『作りたいと思う物を作り出す程度の能力』
種族　人間　→　半人半鬼

神に転生させられた存在で、スーパーロボット大戦ＯＧシリーズで存在する『念動力者』であり、同時に『アカシックレコード』に介入する事ができるほどの『サイコドライバー』になれる可能性をもつ存在でもある。
だがしかし本人はＩＳの事は一切知らず、神から『こんな世界』と言う感じでしか知らない。

インフィニット・ストラトスの世界に転生し、その後ＩＳが世に出る事になった『白騎士事件』が原因で自分の目の前で両親を亡くし、更に政府が白騎士事件で発生した死亡者や重軽傷者を『いない』という扱いで発表した。

その時には病院で入院していたが、自分の目の前での両親の死が原因で何度も魘されたり発狂していた為、催眠療法で記憶を一時的に消されていた。だが、今度は両親が死んだ姿を夢で何度も見ると言うトラウマ級の悪夢を何度も見ていた。

この封印も1年後には解除されてしまい、ＩＳに関しての情報を一人で密かに調査していた。

その後白騎士事件の白騎士候補に近づいて事件の真相を知るために第2回モンド・グロッソの会場に行こうとしたが、その際に織斑一夏誘拐事件を目撃して織斑一夏と一緒に誘拐され、その後誘拐犯から織斑千冬が救助に来ないという事態になり、一夏と一緒に殺されそうになったさいに神から貰っていたＩＳ『ガンダムアメイジングエクシア』を起動して一夏と一緒に脱出した。

この事件が原因で一夏を自分の『弟』として生きる事にし、織斑一夏から『草薙刹那』にした。

両親の死の理由を完全に思い出してからはＩＳを開発した『篠ノ之束』と白騎士であろう『織斑千冬』に復讐するため、神から貰った特典を利用して株などで大金を儲けた上に、家の近くに会った小さな町工場を買収して『テスラ・ライヒ』と言う会社を設立した。

原作開始時には世界で１０指に入るほどの大企業にまで発展させたほどで、一応そこの裏の会長でもある。

（これは年齢的な面もあることが原因で、表の会長はこの工場の元社長さんで、和輝達の方面には逆らえない）

ただし現在は裏の顔を隠してテスラ・ライヒのＩＳ部門の人間の一人として働いており、同時にＩＳ学園でも生徒としては年上なので、それなりに人に色々と教える方面をしていたりする。

ちなみに裏の顔を隠しているのは、テスラ・ライヒの社員でも不正等をしている可能性がある場合の処置の迅速化と、ＩＳを動かせる男性操縦者としての部分を上手く使えるようにするためであり、裏の顔を知っているのはごく一部だけにしている。

また会社を休んでいる時の大半は『社命』と言う扱いで色々な場所に行ってエクシアを使用しての行為をしていたりもした。

個人称は『俺』で、戦闘能力は結構高く、対人戦闘・ＩＳ戦闘でも結構な腕を持っている。

これは本人がＩＳでの戦闘を理由にさまざまな戦場に武力介入した為であり、いわば戦場で鍛えた実践的な戦闘力になる。

性格に関しては両親の死んだ理由を知っているため女尊男卑の思考を持つ女性は大嫌いで、中・高校でもその手の人間は相手がやってきたら何倍も利子を付けて報復するほどの存在でもある。

何故か幻想郷に幻想入りしてしまい、そこで出会った博麗霊夢に会い、その後いろいろあって告白している。

霊夢は理由があって断っているため、和輝も理由を聞いてからは待つと言っているほどで、結構良い関係でもある。

そのおかげか少しは性格がマシになっている上に、映姫からのありがたいお説教が原因でしないようにしている。

幻想郷に行ったさいにすぐさま帰る事が不可能だった為、霊夢が暇だと言う事で紅魔館へ行く事になったさいに同行し、そのさい紅魔館の主とその妹君であるレミリアとフランが原因で発生した特殊な病気にかかってしまい、本を借りようとしていた『アリス・

マーガトロイド』と一緒に発病し、そのさいに和輝がこの病気を治すための特効薬だった為、紅魔館の面々と霊夢とアリスと肉体的な関係を持っている。

この病気が原因で人間から鬼との半妖とも言える『半人半鬼』になった上に、身体能力と頭脳に関しては病気が発症して安定した後に調べたパチェリーやアリス曰く『限界が存在していないかもしれない』と言われており、色々と面倒事ももってしまった。

その後色々あって更識家の刀奈と簪の2人からも告白されているが、当初は断ったものの、幻想郷に遊びに行ったさいに問題の8人と話し合い、何故か全員が仲良くなった後に肉体関係までも連携によって結んでしまった。

更に面白そうと言う理由で参戦した八雲紫と西行寺幽々子、唆されて参戦させられた映姫もこれに参戦し、当初は余裕な感じだったのだが最終的には堕ちてしまい、現在は13名のハーレムになっているうえに、今の種族になったことで性欲に関しては余裕で全員を何度も相手になるほどになってしまっている。

また最初のISとして神から『ガンダムアメイジングエクシア』が送られていたが、現在エクシアは世界各国において『犯罪者扱い』の存在であるため封印し、現在は『スタービルドストライクガンダム』を使用している。

封印したアメイジングエクシアと一夏のエクシアダークマターの2機は幻想郷の紫

の手に預けており、何かの理由があって使用する場合は紫・映姫の２人の使用許可が無いと使用できないようになっている。

神から貰った特典

１・自分が造りたいと思う物が造り出す事ができる能力

２・スーパーロボット大戦ＯＧシリーズである『サイコドライバー』になれるかもしれない

３・金儲けがそれなりに上手くできる才能

の３つである。

これは１と２が強力である為にこれほどの制限が課せられたうえに、『サイコドライバー』になる可能性がある程度にしているのは、本人もアカシック・レコードへの干渉がどれほど恐ろしいか解っている為である。

草薙　刹那　（くさなぎ　せつな）【旧名　織斑　一夏】

１５歳　男性

専用ＩＳ『ガンダムエクシアダークマター』　→　『ダブルオーガンダム』

持っている能力　『???』

ご存知ＩＳの主人公だが、この世界では『織斑千冬に見捨てられ、名前を変えて主人公の弟として一緒にいる』設定です。

原作よりも戦闘能力は上で、対人・ＩＳの両面においてＩＳ学園生徒会長の『更識楯無（刀奈）』に余裕で勝てるほどの実力者であり、同時に和輝と切磋琢磨未だに腕を競い合っているほど。

実力を上げた方法は和輝と同じで戦場に行っていたためであり、２人で戦闘介入をしていたりもした。

実はこの世界の刹那には彼女が複数おり、しかも全員愛している上に、全員がそれに納得していると言うハーレム野郎でもあり、今でも色々と女性に対してフラグをたてている天然のたらしでもある。

現在は『ツインドライブシステム』を搭載した『ダブルオーガンダム』に登場しているが、原作同様に出力が安定しないため結構苦労している。

性格に関しては原作と違ってそれなりにガンダムＯＯセカンドステージの刹那のように『解りあいたい』という『対話』の気持ちを持っていると同時に、自分の大切な存

在に手を出す存在は絶対に何があっても許さないタイプ。
また人の気持ちを平気で踏みにじるような存在には女でも殺すと言うほど。
自分の弟である『織斑　秋斗　（おりむら　あきと）』と姉の織斑千冬、ＩＳの生みの親である篠ノ之束をこれでもかと言うくらい嫌っている。
また女尊男卑の思考の女性は大嫌いで、和輝同様の報復をしている。
これに関しては当初は対話等をしようと思ったが、この手には何を言っても無駄だと判断した為である。

『テスラ・ライヒ』の専用機持ちであるが、実際は裏の会長補佐に当たる人物になっている。
そのためそれなりに書類整理等はできる。
表の顔としてはテスラ・ライヒの一社員として働いているが、これは和輝同様の理由でやっているだけである。

和輝経由で幻想郷にも行っており、能力を持っていると言われているが、どんな能力を持っているのかは覚醒していないため不明である。
幻想郷では守矢神社で居候しているのだが、遊びに来た魔理沙がもって来たキノコが

原因で、守矢神社の三人と、偶然来ていた妖怪の文・椛と、一緒に居候している外の世界の恋人達と肉体関係を持ってしまっている。
序にこのキノコが原因なのか性欲に関しては何故か相当なものに変化してしまい、一部では和輝並と言われているほど。

織斑　秋斗（おりむら　あきと）
１５歳　男性
ＣＶ　中國　卓郎（なかくに　たくろう）
専用ＩＳ　白式

ＩＳの一夏の場所にいる一夏の弟で同時に転生者。
性格に関しては表と裏の顔を持っており、表では『神童』と謳われるほどの頭脳と身体能力を持っているが、裏では人を操って攻撃する等の非道を平気で行なえるほど。
分かり易く言えば『自分の手を決して汚さない犯罪者』みたいな存在。
ＩＳの原作に関しては出ているまでの小説内容とアニメ内容を全て覚えているため、一夏のヒロインメンバーを全員自分の物にしようと思っている。

ＩＳ操縦技術等は原作の一夏よりも強いがそれだけで、輝や現在の一夏からすれば超が付くほどの手加減で倒せるほど弱いうえに、口だけが達者な存在でしかない為、輝や一夏はほぼ無視している。

神から特典としてもらった相手を催眠状態にする『催眠眼』が小学校卒業と同時に開眼し、それを使って今まで色んな人を苦しめているが、本人は『それが何？』程度にしか思っていないほどの外道である。

レイナ・バーン

１５歳　女性

ＣＶ　生天目　仁美（なばため　ひとみ）

専用ＩＳ　ブルー・ティアーズ

今作品でのイギリスに存在する名門貴族の一つである『バーン』家のご令嬢。

容姿に関してはハイスクールＤ×Ｄに登場した堕天使の『レイナーレ』が『天野夕麻（あまの　ゆうま）』となっていた時の姿で、髪が黒髪ではなく、くすんだ色の金髪になっている。

性格に関しては外道の一言で、元々はイギリス政府がセシリアの持つ予定であったイギリスの専用機『ブルー・ティアーズ』を自分の物にするためだけにセシリアを陥れ、セ

シリアから代表候補生の資格のみならず、偽の情報をイギリス政府に流してオルコット家を潰し、さらにセシリアをこの世から消そうとしていた張本人。

ただし、表では人の良いような顔をして行動している。

ＩＳの世界にある女尊男卑の思想もあいまって、男性に関しては『自分にひれ伏すか、奴隷にように従うべき存在』としか見ておらず、両親がオルコット家に対して相当恨みを持っており、同時に彼女もセシリアを憎んでいた。

オルコット家を潰した後はその財産から所有権まで全てを自分の家のものにし、その後セシリアが優秀なメイドと一緒に再起を図ろうとするだろうと思い、ならず者を使って二度と表の世界に出られないようにしようとまでした。

ＩＳ学園で織斑秋斗と出会ったさいに当初は秋斗をバカにするような発言をしたが、実際はバーン家当主である父親から『ＩＳを初めて動かした男性操縦者の遺伝子』を得るように言われており、そのための目的として行動しているためで、秋斗に関しては恋愛感情はあまりいってない。

ＩＳの腕に関しては原作のセシリア以下で、ブルー・ティアーズで必要なＢＴ適正もセシリアの持つ『Ａ』と違い、レイナは『Ｂ―』で、ＩＳ適正は『Ｂ＋』でしかない。

現状で変更があるキャラクター設定

クリスティナ・グレイス【旧名　セシリア・オルコット】
専用ＩＳ『ケルディムガンダム』

元イギリスの貴族であったオルコット家のご令嬢でＩＳにおいてのヒロインの一人。原作とは違い少し髪や顔の綺麗さは失っているが、それ以外の美しさは変わってはいない。

今作では原作での彼女の専用機である『ブルー・ティアーズ』の受領をイギリス政府から貰う際にレイナの策略で受領が出来ず、更には偽の証拠によってオルコット家を潰され、幼馴染であり優秀なメイドでもある『チェルシー・ブランケット』以外の人間は彼女から去ってしまった。

その後オルコット家から出た彼女達をならず者達に誘拐して、２人は慰み者にされる寸前で、それを見ていた和輝と刹那の２人のおかげで救助され、セシリア達の事情を知った２人が名前と顔の感じを少し変えて『テスラ・ライヒ』で生活できるようにした。

テスラ・ライヒに入った際にセシリアは名前をクリスティナ・グレイスと変えてから

は親しい人には『クリス』の愛称で呼ぶようにしているが、それ以外では『グレイス』で呼ばして区別している。

チェルシーは名前を『フィン・グレーデン』と言う名前に変え、和輝の元でテスラ・ライヒの運営補佐をしている。

この作品ではダメな存在と思っていた父親の本当の顔も知っており、オルコット家の最高は望んではいないものの、セシリア・オルコットという『一人の女性としての幸せ』を両親に報告しようと思っている。

ちなみにセシリアは一夏の恋人の一人で肉体関係もちで、チェルシーは最近お見合いした人物と仲が良い。

シャルロット・プレスティ（旧名　シャルロット・デュノア）

原作ヒロインの一人だが、原作とは違いデュノア社の人間ではなくテスラ・ライヒの人間になっており、待遇はデュノア社に在籍していた時よりも結構良い。

プレスティは母親の性であるため、デュノアの人間とは一切合財手を切っている。

（正式には和輝が色々やって法律関係でもシャルロットに手を出せないようにした）

【ちなみに、プレスティはスパロボシリーズのチームＴＤのフィリオやスレイのです】

デュノア社と業務上の提携を結ぼうと計画した際に、シャルロットの事を案じている

一人の老年の人間から話を聞いて知った和輝が色々と策を考え、デュノア社のＩＳとの模擬戦を行い、その試合に勝った際の商品として自分の会社である『テスラ・ライヒ』に引き抜いた。

デュノア社に関してはこの時和輝が考えた策に対して父親の方は当初反対したが、勝手に同席していた夫人が原因で同意になり、その後模擬試合に負けて色々と夫人が文句を言ってきたが、この模擬戦にはフランス政府関係の人間が同席しており、その人間が言うにはシャルロットの事を話した人間がフランス政府の元高官で、しかもシャルロットの母親の知り合いだった事もあり、この模擬戦が原因でデュノア社に対してのフランス政府の信用は地に堕ちていった。

さらに業務提携の話も和輝が余りにも信用が置けない会社と言う事で業務提携そのものが消失し、さらにこの事実を企業・会社間のネットワークを使って全世界に公表したため、原作開始時のデュノア社はもはや倒産寸前の会社になっている。

ちなみにフランス政府も当初はラファールを開発した事に関してはデュノア社を認めていたが、今回の事を知ってからはＩＳ開発の予算カットを行い、同時にフランス政府の中でのＩＳ部門に関しての信用は無いに等しいほどになっているほどである。

ちなみにだが、その老人は原作開始時には死亡したが、この老人はシャルロットの母親の両親の親友で、シャルロットの母親の事も良く知っており、同時にデュノア社長達

が大切な親友の娘の忘れ形見に対しての処置に腹をたてていることが原因で、今回のことを起こした。
和輝と刹那とはその後出会い、刹那がシャルロットを恋人にした事に関しては認めているが、『泣かしたら地獄からでも生き返ってやる』と豪語したほど。
専用機は『ゲシュペンストＭＫ―Ⅱ・改』だが、シャルロット用に改良されている。
一夏の恋人の一人でクリス同様に肉体関係もちでもある。

篠ノ之箒
ＩＳの生みの親でもある篠ノ之束の妹で、一夏と秋斗のファースト幼馴染。
性格に関しては原作並だが、今作では秋斗が正しいという思いしかないため、ある種の自己中的な存在。
そのため友達は誰一人いないうえに、暴力事案が多い。
一夏に関しては『自分よりも弱かった人間』というイメージしかなく、現在の一夏である刹那にコテンパンにされても自身の性格等を直すのではなく牙をむくほうが多い。
木刀を何処からともなく出し、それによって手を出すと言う事で、ＩＳ学園でも面倒事存在として扱われ、剣道部の部長も頭が痛いと言えるほどの苦労させられている。

凰　鈴音（ファン　リンイン）
一夏と秋弘のセカンド幼馴染。
一夏が死んだと知って悲しんだが、秋斗のほうには行かなかった。
死んだはずの一夏と顔が似ているが草薙刹那のことを知るためにＩＳ学園に入学した。
専用機は原作と同じで、刹那の恋人候補でもあります。

更識楯無（刀奈）・簪
原作では不仲だったが、今作では仲が良い。
理由に関しては更識家から情報を仕入れようとした組織に２人が誘拐され、楯無が自分の身体を代償にしてでも妹の簪を助けようとしたためである。
ちなみにその組織は和輝と一夏が戦争を起こすかもと言う対象だったので組織を強襲し、和輝が二人を救ったため、２人は和輝が好きになり、その後色々あって和輝に告白をしたが、その時には和輝には博麗霊夢と言う告白した対象がいた上に、諸事情で肉体関係をもった存在が多数いたため保留に下のだが、２人が全員と話し合って事案解消したらという感じで、全員で結婚しようとしている。

ちなみにその後２人とも肉体関係をもっている。
刀奈に関しては専用機は原作と同じだが、簪に関しては和輝同様に念動力者の素質があり、専用機が『打鉄弐式』ではなく、テスラ・ライヒの開発した『アルブレード・カスタム』に変更されている。

篠ノ之束
ＩＳの生みの親であると同時に自分勝手なウサギ。
無人機の運用実験を紛争地域で使用していたが、全て和輝と一夏が使用していた２機のエクシアによって何度も破壊されたため、結構キレている。
また人の命に関しては『自分の知り合い以外どうでも良い』を地でいっているおり、現状の目的として２機のエクシアを完全に破壊する事が目的になっている。
自分が造ったＩＳを世界が認めなかった事が原因で白騎士事件を起こし、同時に白騎士事件において『死傷者・重軽傷者』がいた事は知っていたが、自分の関係者ではないと言う理由で、自分が犯した罪の意識がまったくと言っていいほど無い。

織斑千冬
織斑一夏と織斑秋斗の姉であり、モンド・グロッソ２連覇と言う偉業を成し遂げてい

る『ブリュンヒルデ』。一夏に関しては愚かな存在としか見ておらず、一夏に関しては家でもいない者として扱っていた。
それ以外は原作と変わらないある種の暴君。
白騎士事件では白騎士の操縦者であったが、白騎士事件で『死傷者・重軽傷者』がいる事を未だに知らない。
一応白騎士事件が起きた日に『死傷者・重軽傷者』がいた事は知ってはいるが、その真実に関しては知らない。

博麗霊夢
ご存知東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラクターで、私が別で書いている作品のキャラクター。
現在は『とある理由』で和輝への告白の返事待ってもらっているが、内心では『ＯＫ』サインを出している。
とある理由に関しては話を進めていく事で分かるようにしておきますが、刀奈と簪の２人が出した話し合いの元、和輝関係での決定には了承しているが、返事を待ってもらっている内容とのちょっとした狭間に揺れている。

世界観

この世界のＩＳだが、アラスカ条約で『軍事利用での禁止』等をしているが、実際は守られておらず、大小問わず紛争でＩＳが『紛争等の早期決着・終息』を理由に使用されており、これにはＩＳ委員会主体で世間には情報規制されているため、世間の人は紛争地域でのＩＳが使用されている事を知らない。

また戦場カメラマンなどでＩＳを使用している場面を撮ったとされる者は秘密裏に消されており、戦場カメラマンなども死にたくない為真実をばらさないようにされていた。

輝と一夏の使用するアメイジングエクシアとエクシアダークマターの両機は武力介入するさいにはＧＮ粒子が外に漏れないように細工されており、そのためこの２機に関しては世界でも大々的に報道されているが、ＧＮ粒子方面が漏れていないためＩＳ学園で一夏やクリスがダブルオーガンダムとケルディムガンダムを使用しても『姿の一部が似ている』だけですまされている。

また原作開始の１年前には『羽付き』という今までのＩＳの常識を打ち破る『可変式のＩＳ』がでており、これもエクシア達同様に国際指名手配されている。

デュノア社は原作と違って世界でも有数な会社ではなく、この作品では『どこの会社だっけ？』と言われるほどの会社になっている。

ラファールに関しても存在はするが、テスラ・ライヒが開発した『ビルトシュバイン』のほうが基本的な性能が良いため、ラファールに関しては現在は軍での採用は１機も無く、ＩＳ学園でも訓練・防衛用として存在しているが、ビルドシュバインと交換するべきと言う声が上がっているほどの不人気機体でもある。

またこの世界には一部の地域で重婚制度が法律で制定されている。

これはＩＳが出来た事で各国の新生児出産率が低迷の危機に瀕している為で、そのための処置として取られている。

また国によっては結婚できる年齢を下げてでも新生児を産んでくれるようにする事態にも発展している。

日本は重婚可能の法律が制定され、結婚できる年齢に関しては男性１８歳女性１６歳以上と、変化していないが新生児の出産率が悪い為に年齢の低下と、成人の年齢も２０歳以下にしようかと言う声も上がっている。

同時にバイクや車などを乗る為の年齢は下がっており、１５歳以上の人間ならば車（大型車を除く）もバイク（全種類）も乗れるようになっており、１８歳以上なら特殊車

両（トラックやダンプカーなど）や牽引免許、２種運転免許の習得も可能になっている。
ちなみに和輝と刹那は車とバイクの運転もできる為、色々と移動手段を持っている。

和輝達がいるテスラ・ライヒに関してはＩＳ開発以外にも車やバイクなどの車両関係や、救急・救命関係の特殊装備・車両の開発、一般家庭で使用するような家電製品などの開発もしており、同時に特殊災害救命用のパワードスーツを開発している最中でもある。

これはＩＳを使用しようにも、政府や警察や救急方面の上の人間が特殊事態に関しての承認が遅く、そのため何度もその点が報道されているのも原因で、和輝達が勝手に製作をしている。

当初は政府等の圧力もあったのだが、マスコミにリークしたらマスコミはこれを大々的に取り上げ、結果的に政府の圧力を消している。

また従業員の大半は幻想郷に幻想入りした人間が多く、テスラ・ライヒは女尊男卑の世界の中で男女平等を掲げているため、一部の女性団体等からは否定されているが、業績がいい為それ以上は何も言えなくなっている。

また和輝が自身にかけられた封印を無理矢理壊したため、アカシックレコードに和輝のもっていた『負の思い』が原因で、この世界にとんでもない存在が介入して来るなど

と転生させた神から言われている為、和輝も自分が原因で来ている可能性がある存在に対して物凄く警戒している。

ＩＳ設定

スタービルドストライクガンダム
世代　第３．５世代（実際は番外世代）
搭乗者　草薙　和輝
特殊システム　ＴＬＩＮＫシステム・ＲＧシステム
単一能力　ＲＧシステム

ガンダムビルドファイターズに登場した『スタービルドストライクガンダム』そのままＩＳにした感じで、待機状態はアブゾーブシールドの模様が入った白と青を基調としたブレスレットで和輝の左腕に存在している。

ＩＳの世代が第３．５世代扱いであるが実際は番外世代で、これは第４世代の正式採用機体である『紅椿』よりも性能は上なうえに、二次移行した軍用ＩＳの福音でも余裕で勝てるほどの圧倒的な性能とエネルギー保有量を保持しているのだが、余りにも性能が高すぎると面倒毎が多いため、多数のリミッターを使用し、ＩＳバトル用に性能を大幅に落としているためである。

原作のようにエネルギー系（刀奈の清き熱情（クリア・パッション）等は無理）攻撃をシールドを介して本体に吸収する『アブソーブシステム』と、吸収したエネルギーを全面開放する『ディスチャージシステム』、エネルギーを機体の内部パーツに浸透させ、機体性能を極限まで強化する『ＲＧシステム（ラジアル・ゼネラル・パーパス・システム）』を持っているのだが、ＩＳとしての性能上実際は全ては無理だったのだが、ＴＩＬＩＮＫシステムと、和輝が考えて製作した『ＴＩＬＩＮＫフレーム』が原因で全てが出来るようにしてあるのだが、長時間戦闘には向かず、途中でオーバーヒートしてしまい、こうなると一旦フレームも含めた全てのパーツをオーバーホールしないと使えない機体になっている。

ＴＩＬＩＮＫフレームに関しては別で記載するが、そのためこの機体は特殊試作機としての面もある。

ビルドストライクガンダム・フルパッケージに存在する武装と背部に装備する『ビルドブースター』と、スタービルドストライクガンダムの武装と『ユニバースブースター』の二機が拡張領域内に存在しており、ＲＧシステムを封印して使用する場合はビルドストライク・フルパッケージ状態で戦闘を行なうように調整されているため、ビルドスト

ライクガンダムバージョンの運用も可能にしている。
ストライクガンダム系で採用されている『ストライカーシステム』も使用できるようになっており、基本のエール・ソード・ランチャーの三つが別に存在しているが、本人はあまり使用していない。
またこの三つを装備した『パーフェクトストライクガンダム』の状態にも移行できるようになっている。
これ等に関してはＩＳ学園にＩＳの容量が不足していると言う事を報告して専用スペースを設けてもらい、そのスペースのコンテナ内に
安置されており、現在ＩＳ学園にある訓練用及び教師専用ＩＳに対しても使用できるように改良中でもある。
その場合は『スタービルドストライクガンダム・アナザースタイル』として存在する事になっているが、ビルドストライクとスタービルドストライク両面の武装を使用する事は単一能力でもあるＲＧシステムの関係上できない。
ただし、この機体は和輝が『ＩＳ学園在学中の間の使用』を前提として開発しており、本人の力量もあいまってＩＳ学園でも上位に入るほどの機体になっている。

ダブルオーガンダム
世代　第３．５世代（番外世代）
搭乗者　草薙　刹那
特殊システム　オリジナルのＧＮドライブ使用のツインドライブシステム
単一能力　トランザムシステム

機動戦士ガンダムＯＯで主人公である『刹那・Ｆ・セイエイ』が使用していた機体『ダブルオーガンダム』をそのままＩＳにした感じで、輝と同様に全身装甲型の機体になっている。
待機状態は青と白を基調とし、中心部にソレスタルビーングのエンブレムが描かれたになっているブレスレットで、一夏の左腕に存在する。
一夏のは正式なエクシアダークマターの後継機とも言える機体で、一夏自身が望んでいた『解り合える』と言う事を聞いた輝が一夏に『人で無くなる覚悟』を聞いたう上で、一夏の望みを叶えるために製造した機体。
ＩＳの世代が第３．５世代扱いであるが実際は番外世代で、これは第４世代の正式採用機体である『紅椿』よりも性能は上なうえに、二次移行した軍用ＩＳの福音でも余裕で勝てるほどの圧倒的な性能と、オリジナルのＧＮドライブの恩恵による無限とも言え

るエネルギー保有量を保持しているのだが、余りにも性能が高すぎると面倒毎が多いため、多数のリミッターを使用し、ＩＳバトル用に性能を大幅に落としているためである。

機体の武装や感じに関しては原作のダブルオーと同じで、ＧＮドライブはエクシア２機の物ではなく、和輝が能力でツインドライブができるようにした新しい物であるが、元々ツインドライブに関するデータすらないあまりない状態で作り出したため、出力安定がしないのはこれが原因でもある。

当初はエクシア２機のが上手くツインドライブ運用ができたので、そのさいの運用データを利用して新型のＧＮドライブを作り出したが、現状では単一能力であるトランザムを使用すると、トランザム終了と同時にオーバーヒートして機体が動けないと言う欠点を持っている。

原点同様にオーライザーが来るまではそれなりにダメな機体と言える。

また基礎フレームには『サイコフレーム』を採用しており、これは刹那の願いを十二分に可能にすると思って和輝が採用した。

オーライザーと合体した『ダブルオーライザー』の状態での『トランザムバースト』の性能を原点の物よりも数段上の性能にできると和輝は予想している。

ケルディムガンダム
世代　第３世代
搭乗者　クリスティナ・グレイス
特殊システム　ＧＮドライブ・サポートＡＩ『ハロ』
単一能力　トランザムシステム

一夏のダブルオー同様に輝が開発した機体で全身装甲型の機体。機体の感じは機動戦士ガンダムＯＯに出たケルディムガンダム。
ＧＮドライブを使っているため一夏のダブルオー同様に無限大のエネルギーがあるが、ＩＳバトル用に調整されている。武装に関しては元にした機体と変化は無い。
ＧＮドライブはエクシア達のを使用したわけではなく、ダブルオーと同時期に和輝が作り出した新型である。
ＩＳの世代が第３世代扱いであるが実際は番外世代で、これは第４世代の正式採用機体である『紅椿』よりも性能は上なうえに、二次移行した軍用ＩＳの福音でも余裕で勝てるほどの圧倒的な性能と、オリジナルのＧＮドライブの恩恵による無限とも言えるエネルギー保有量を保持しているのだが、余りにも性能が高すぎると面倒毎が多いため、

多数のリミッターを使用し、ＩＳバトル用に性能を大幅に落としているためである。

サポートＩＳの『ハロ』は、ケルディムに装備されているＧＮシールドビットの操作補助を行なう為に付けられた装備で、これはＩＳとは別に装備してあるため、ケルディムの負担にならないようにしている。

ハロに関してはクリスティナの右腕に緑色のハロの絵がかかれた白のリングになっており、ケルディムの待機状態は緑色の六角形の形をした薄い板のような物に、円形のターゲットマーカーが描かれているペンダントになって首からかけられている。

ゲシュペンストＭＫ―Ⅱ・改　シャルロットカスタム
世代　第３世代
搭乗者　シャルロット・プレスティ
特殊システム　ユニット換装
単一能力　???

見た目は第２次スーパーロボット大戦ＯＧで出た『量産型ゲシュペンストＭＫ―Ⅱ・

改』で、シャルロットが現在使用しているＩＳでもあり、シャルロット用に後付け装備用の拡張領域を原型機の２倍にカスタマイズしている。
待機状態は原作でシャルが持っていたラファールの待機状態と同じ色のペンダントになっている。
装備・設定に関しては元ネタと同様にしています。

アルブレード・カスタム
世代　第３世代型ＩＳ
操縦者　更識　簪
特殊システム　ＴＩＬＩＮＫシステム・ジャケットアーマー・ユニット換装
単一能力　トライアルシステム

第３次スーパーロボット大戦αと第２次ＯＧで登場している機体で、更識簪のこの世界での専用機で、ＩＳでは珍しい全身装甲（フルスキン）型の機体になっている。
待機状態は水色の大きめな指輪で、簪の右の中指に存在している。
武装に関しては第３次αのを基準とし、オリジナルの専用ユニットを採用してい

る。

この機体は次世代型訓練用量産機の試作品としての扱いになっている。

オリジナルではＴ－ＬＩＮＫシステムは取り付けられていないが、こちらは取り付けられているため機体性能は高い。

これは操縦者である簪が念動力を保持していることが原因で取り付けられている。

ただし、量産が正式に決まった場合はＴ－ＬＩＮＫシステムは排除される予定である。

単一能力のトライアルシステムは仮面ライダーＷの仮面ライダーアクセルのトライアルのように最大１０秒間の間だけ超高速移動ができる使用だが、一度最大まで使用するとシールドエネルギー値が満タンであっても１５０代にまで減少するほどエネルギー消費が大きいため、現在は少しでもエネルギーの消費を抑えるべく改良中である。

背部のユニットを変更する事であらゆる状態に対処できる機体になっているが、現状ではノーマルタイプとスカイタイプの二つが完成している。

その他のユニットも現在開発中で、そのデータを反映させて次世代訓練用量産機として準備をしている。

ノーマルタイプ
元にしているアルブレード・カスタムのまま。
武装面等での変更はしていない。

スカイタイプ
移動と運動性能を高める大型のウイングスラスターが装備されている状態。
（ガンダムビルドファイターズに出たガンダムフェニーチェリナーシアのウイングを装備している）
ブレード・トンファーの装備を廃止し、装備しているウイングの対照が持つ特殊バスターライフルを装備している。
だがしかし、機体の移動と運動性能が高くなった為に悪ければ機体に振り回されれる程の品物になっている。

ビルドシュバイン
世代　２．５世代

テスラ・ライヒが第２回モンド・グロッソ後に世に出した存在。
現在ではラファールを凌いで軍では正式採用されている機体。
武装はＯＧシリーズのを基本としているが、ラファールよりも基本的な性能が高いと評価され、この世界の軍でも多く利用されている。
逆にラファールは当初は人気があったが、現在はそこまで人気は無い。

ガンダムアメイジングエクシア・ガンダムエクシアダークマター

和輝と刹那の２人が今持っている機体に乗り換えるまでに使用していた機体で、見た目はガンダムビルドファイターズに登場した２機で、アメイジングエクシアには目の部分にバインザーが施されている以外は変化は無く、同時にＩＳでも珍しい全身装甲（フルスキン）型である。
待機状態は２機の背部にある『トランザムブースター』の形をしたペンダントの形をしており、アメイジングエクシアは青と白を基調とし、ダークマターは赤と黒を基調としている。

アメイジングエクシアは和輝が神からもらった物で、アメイジングエクシアの性能をそのままダークマターも継承しているため、世代で言えば第４世代を超えており、完全に言って番外世代と言える機体になっている。

本人もそれほどまでの性能とは当初は知らなかったため、無数のリミッターを設置して性能を第２・５世代クラスまで落としてある。

実際はこの２機が世界中に存在する『ＩＳ』で初になる可能性がある『三次移行（サード・シフト）』を果たしている機体のため、和輝達が現状使用しているＩＳよりも性能面では大幅な開きがある。

現在は幻想郷の『八雲紫』と、白玉楼の『西行寺幽々子』、永遠亭の『八意永琳』、幻想郷の閻魔様である『四季映姫・ヤマザナドゥ』の４人の使用許可認定が無ければ基本は使用禁止にされているうえに、映姫さんの元で厳重に管理・封印されている。

もしも何かの理由でこの２機を使用する場合は紫さんのすきま経由で和輝と刹那の二人の手に渡されて使用できる算段になっているが、２機の使用に関する許可は永琳さんで、機体にかかっているリミッターの全解除承認許可を持っているのは映姫さんだけである。

和輝達の専用機にも同様のリミッター処置をしており、これはＩＳ世界に対して強大な力は面倒事を引き起こす以外何も無いので、そのため和輝達も紫達も納得している。

ＩＳの世界では『謎のＩＳ』として取り上げられており、同時に『紛争に介入して戦争の長期化を狙っている』という『紛争地域でのＩＳ使用』を隠すために国家ＩＳ委員会の情報操作により、アメイジングエクシアのほうは『蒼天の騎士（そうてんのきし）』、エクシアダークマターは『黒衣の騎士（こくいのきし）』と言う名前で『国際指名手配存在』として認定されている。

ただし、和輝が戦闘映像をライブ映像にして世界中に配信しているため、映像を見た一部の人間は委員会の情報を信じていない。

また本来はＧＮドライブから出るＧＮ粒子の放出があるのだが、機体を改良してＧＮ粒子が外に出ないように改良されている為、国家ＩＳ委員会や篠ノ之束の目からＧＮドライブの持っている真実を隠している。

刹那が使用したエクシアダークマターはＧＮドライブから全て和輝が作り出した品物であったが、刹那がダブルオーに乗ると言う事でツインドライブシステムを知るために実験したさいには何とかツインドライブができたので、そのデータを元に新型のＧＮドライブを完成させている。

現状ＩＳ世界で出ている第３世代でもこの２機を止める事ができない位の運動性能

とは持っているが、和輝が最初から相当高い性能を持っていたので２機に関してはリミッターを使って本来の性能から何倍も落とした状態での使用であったが、リミッターを全て解除して運用すれば第４世代の思想を正式採用した『赤椿』すら平気で倒せるほどだが、篠ノ之束に余りこの２機のデータを取らせるのは危険と判断した和輝が紫達に頼んで封印処置をする事にした。

リミッター全解除状態での運用なら１０体を超えるゴーレムⅢを現状の２人はトランザムを使用しなくても余裕で倒せるほどの性能を持っている。

人物の能力・作中のオリジナル設定物の設定

人物の所持している能力設定

念動力を操る程度の能力
所持者　草薙和輝・更識簪
スーパーロボット大戦ＯＧシリーズと同じで超能力関係の一つでもある念動力関係の能力。
主人公の和輝は最高位の存在でもある『サイコドライバー』に至る可能性を持っている。
簪に関しては現在は未定である。

作りたいと思う物を作り出す程度の能力
所持者　草薙和輝
『オリジナルのＧＮドライブ』・『サイコフレーム』・『Ｔ－ＬＩＮＫシステム』・『ＩＳコア』と言った特殊系存在などを本人が造ろうと思った時に何故か作れると言うある意味

チート的なもの。
ただし、作った物によるが、完成した後は最大でも約3ヶ月くらいは全介助が必要なくらい身体を上手く動かす事が出来ないため、本人も多用は出来ない。
（特殊系や内容が強力な物はそれだけだが、それ以外の素材ならここまではならない）
ただし、製造できるのは『無機物関係』のみ限定で、特殊な病気の特効薬になるような薬や包帯と言った『有機物関係』は製造できない。
これは元々和輝が創造したいと思ったのが特殊系存在系だったのもあり、その結果によるものである。

オリジナル設定
半人半鬼（はんじんはんき）

和輝の今の種族で、半分人間で、半分鬼のような強固な肉体を保持しているが、基本ちょっと強い人間のような存在。
序に言って性欲がとんでもなく強化されており、和輝の現在のハーレムメンバー全員が満足してしまうほどになっているのだが、終わった後に未だにご立派な状態で存在し

ている。

　これは和輝が幻想入りをして霊夢が紅魔館に遊びに行く事になったさい、この時レミリアとフランが吸血鬼でも発症が稀な上に、パチュリーの図書館でも片手で数えるほどの本にしか載っていない特殊な病気にかかっており、パチュリーは幻想郷全体にこのウイルスが蔓延するのを防ぐ為に紅魔館内で封印していたのだが、その時にはパチュリー達紅魔館にいた全員が空気感染しており、和輝は封印されていた高濃度の病気のウイルスが存在する空気を吸ったため、だんだんと和輝の肉体が細胞レベルで変化していった。

　ちなみに、この時には霊夢は自身の勘で能力を発動しており、アリスは魔力で作った薄い膜を全身に使用していたためウイルスから回避していた。

　当初は和輝も何とか耐えていたが、来客を知った事で咲夜が時間を止めて何とかしようとした上でパチュリーに対処要請しよう皆が集まっている場所に移送したのだが、そのさいにはもう精神面で耐えるのが限界なほど手遅れな状態で、和輝はそのまま暴走状態に突入し、そのまま近くにいた霊夢を襲ってしまった。

　その後暴走状態で紅魔館にいた全員（妖精メイドは除く）を相手にし、全てが終わった時には現在の種族に変化していた。

ちなみに和輝が正気に戻った時には霊夢を抱いており、部屋にいた全員倒れており、しかも異臭が立ち込めているほどだった。
その後のパチュリーとアリスの魔術などを使って和輝を調査した結果、細胞レベルで変化しており、吸血鬼が原因のものなので『半分鬼になったのかも』と推測されている。
おまけに身体能力の向上と、頭脳方面も向上している上に、人間としては相当長生きできると言われており、同時に性欲の増大がとんでもないと言われた。
序に女性陣に関してはその間の調査の間紅魔館の外から出られなかったが、自分達が持っている性欲方面が増大しており、全員が結構この方面において苦労していた。

ＴーＬＩＮＫフレーム
和輝が『サイコフレーム』のもっている設定を、ＴーＬＩＮＫシステム用に変更しただけの物。
サイコフレームがニュータイプ専用とも言える素材なら、このＴーＬＩＮＫフレームは念動力者専用の素材と言える。
このフレームを採用しているおかげで、和輝の現状の専用機である『スタービルドストライクガンダム』のもっている単一能力である『ＲＧシステム』をフルで使用・活用できる品物になっている。

ただし、現状ではＲＧシステムをフルで使用して長時間使用すると、フレームから全ての部品までオーバーホールをしないといけないほど負担が大きい。
これは和輝がサイコフレームの設定をそのまま流用しているためで、実際はスーパーロボット大戦シリーズで登場していないうえに、データが存在していない為である。

番外世代
和輝達が運用しているＩＳの世代。
正確にはＩＳのもっているシールドエネルギーや攻撃に使用するエネルギー系が無限に近い物をさす。
本来のＩＳならエネルギーの関係上武装等でも使いすぎたりすれば使用できない、もしくはＩＳの機能が停止すると言う風な処置を取られるが、これ等の場合はエネルギー保有量が通常のＩＳよりも大幅に開きがあったり無限に近い為、ＩＳバトル用の専用リミッターが存在しているほどである。
（分かり易くいえば、現在世界に出ているＩＳのエネルギー量が基本『１０００』とすれば、番外は『∞』になっている。そのためＩＳバトル用に基本の『１０００』になるように表示などをしている感じです）
スタービルドストライクに関してはダブルオーのような機関は無いが、相手のエネル

ギー系攻撃を吸収して運用する事でほぼ無限とも言える活動が可能になっている。
またＩＳとしては『男性でも使用できる』と言う事が元々存在している為、外の世界（幻想郷風に言えば）中に存在している『女性のみが使用できる』という前提が最初から存在していないのも特徴である。
（ただし、和輝と刹那に関しては外の世界のＩＳを動かせるが、それ以外の男性は外の方面は動かせないため、別の意味で欠陥品と言える）

ヴェーダ
和輝が造りだした情報収集・調査用のスーパーコンピューターで、超高性能な演算処理システムでもある。
大本は幻想郷に存在し、博麗神社・守矢神社・紅魔館・白玉楼・永遠亭・妹紅の家・地霊殿・八雲紫の家・月に分割して存在しているため、演算処理能力は莫大とも言える存在になっている。
和輝達が使用しているのは子機の一つであるが、それでもＩＳ世界にある施設のＰＣ等のハッキングに関してで言えば最高位に近く、篠ノ之束クラスなら余裕で対処可能だが、それ以外では時間さえあれば攻略が可能なほどの品物である。
ただし、これは大本の一つを使った場合の事例で、全部を使った場合ではＩＳ世界に

存在する全世界の軍や企業、一般家庭のシステムを含めて5分もあれば全てを掌握可能にするほどの処理能力を持つ。

和輝は一夏が可能性に至った場合、最後に機体に導入して使うシステムとも考えており、これだけの演算処理システムにしている。

この事実を知っているのは和輝達だけで、本人達も悪用する気は毛頭ない。

第1章　始まりの学園生活

第1話　ＩＳ学園の入学なんだが、嫌だなあ

「（色々と周りからの視線が嫌なんだけどなぁ～）」

そう思いながら、俺は机に座っていた。刹那に関してはこの周りからの視線で少し嫌な気持ちになっている上に、このＩＳ学園には刹那がこの世で最も嫌悪し、憎悪すら持てるほどの人間がいるこの場所でいるのも嫌であろうが、思い切りいって我慢してもらっている。

というかだ、席に関しては中央で、しかも同じ列の前側３列に男子を集中させている為、俺達を見世物のパンダのような感じの視線が思い切りいって堪らなかった。

実際問題俺もおもいきり言って悪いが、ＩＳ学園で在籍するなんてのはこの世で最も嫌であるのだが、一応テスラ・ライヒのいち平社員の扱いでここに来ている俺に取って、職業上の我慢も必要だと思っている。

というかだ、俺と刹那の二人がこの学園にいたくないと思うのは、二つの理由があるからだ。

一つはこの学園にいる俺と刹那以外の男性操縦者であり、世間では『初めてＩＳを動かした男性』扱いされている『織斑秋斗』がいる事と、ブリュンヒルデと言う世界最強の称号を持っているＩＳ乗り『織斑千冬』がこの学園にいるからだ。

これは調べたら簡単に分かったのだが、俺達としては織斑千冬とは一番関わりあいたくなかった。

彼女がこのＩＳ学園にいる理由に関してはある意味最低で、なんと『家族との時間を今後は大切にしたい』等とほざいていたらしいのだ。

流石のこの言葉には刹那が思いきりキレており、刹那の恋人連中全員がぶちキレていた。

まぁこの結果を知った時には俺もキレていたのだが、刹那の方面が俺よりも滅茶苦茶怖かったうえに、更には元々が祟り神でもある『洩矢諏訪子（もりやすわこ）』様が一番怖く、思いきり黒いオーラを纏って『呪殺してやろうか？』と言っていたほどで、滅茶苦茶怖くて堪らなかった。

（紛争介入している時よりも怖くて恐ろしく、後でパンツを見たらチビっていた）

秋斗に関しては表では好い顔をして『神童』という称号をほしいままにしていると言っても過言ではないのだが、裏では結構薄汚く、自分の元に来ている女子を喰い物に

し、男子はそれなりの部下にしていた。
そして自分にとってその相手が気に入らなければ、自分の手を汚さない・ばれないで男女共に苦しめていたのだ。

立証しようにも証拠が存在しないので仕方ないのだが、それでもこいつのこの思想が原因で刹那の『友人』が幻想郷に幻想入りし、偶然にも永遠亭である意味に恒例になっていた『輝夜ＶＳ妹紅の殺し合い』に巻き込まれたのだが、その時の彼の目には『生きる意志が一切無かった』と永琳先生に言われたほどだ。
その問題の刹那の友人に関しては、今は永琳先生の薬の実験体にされたり、鈴仙と一緒に色々と苦労している苦労人になった上に、少し前に永琳の実験の効能と、鈴仙の目を見てしまって暴走し、永遠亭メンバーと偶然来ていた妹紅と慧音先生と肉体的関係を持ったらしく、それを面白半分で教えた人（紫）によって月の姉妹まで来て大騒動になったのは記憶に新しいと言えた。
というかだ、その二人も師匠である永琳先生に唆されて身体と能力を使えない状態にされ、無理矢理暴走状態になったそいつと関係を持ってしまい、そいつに関しては完全に悶絶していたが、２０歳になった時には輝夜・妹紅・永琳と同じ『蓬莱人』になると宣言しており、永遠亭で一生入るとまで言ったのだ。

それを知った刹那も当初は悲しんだのだが、俺が前に刹那に言った『可能性』の存在でも『死』というものは回避できないので、仕方ないと諦めていたが、同時に友人の幸せに関して祝福していた。

そしてもう一つの嫌な理由と言うのは、この俺達がいる1年1組にいる『イギリスの代表候補生』の『レイナ・バーン』が原因でもあった。

彼女は刹那の恋人でもある『クリスティナ・グレイス』こと旧名『セシリア・オルコット』を破滅に追い込んだ張本人でもあるからだ。

彼女はイギリスが開発した第3世代型ＩＳで、ＢＴ兵器採用機体『ブルー・ティアーズ』を得る為に、当時から貰う可能性が高かったセシリアを『国家反逆者』に仕立て上げ、セシリアの家でもある『オルコット家』を潰しただけに飽き足らず、セシリアと彼女の友人でもある『チェルシー・ブランケット』の両名を二度と表の世界に出られないようにするため、裏の世界に存在する『人身売買組織』に売ろうとしていたのだ。

正式にはその組織は2人を慰み者にした後に、戦争・企業のために利用する『慰安婦』のような存在に人体・精神改造をする組織で、そのためその組織事態が戦争を起こす可能性のある組織でもあったため、俺達がエクシアを纏って組織を潰したのだが、その際に刹那が2人を保護したのが、後数分遅かったら2人は一生元の世界に戻れなくなるよ

うな感じにされかけていた。
俺としてはその際にこの組織の全データを調べた後、この2人の名前と、そして依頼者の名前でレイナの名前を知ったのだ。
容態や精神面でも安定した2人にそのことを話したら、2人もレイナが自分達にこんな事をした主犯と知って驚いていたが、俺も2人から話を聞いてヴェーダを使って調べて見たら、イギリス政府に対して報告された内容は何と偽造で、その報告の証拠等を提出したのは『バーン家』だったとわかったのだ。
これには流石の2人も驚いていたが、俺は彼女達の安全を考えて今までの名前を捨てさせる事にした。
そうでもしなければ2人は死の危険性どころか、表には一切出ることが出来ない存在にされる可能性が高いからだ。
俺はヴェーダの演算処理を使ってセシリア・オルコットとチェルシー・ブランケット両名を死亡した扱いにし、そして同時に二人が死んだと見せかけるため用の事故を起こし、それを利用させてもらったのだ。
セシリアもチェルシーの2人も自分達の帰るべき家を潰した存在を許す事もできず、俺達と一緒に戦う事を決意してくれた。
まぁセシリアに関しては同時に俺がオルコット家の事で知った事実である彼女の父

親のことを言ったら、当初は全否定したのだが、彼女の幼馴染であるチェルシーが俺が言った事が事実であると言うと、彼女は涙を流した。
知らなかったとはいえ彼女は父親を嫌い、そして嫌悪していたのだ。
だがしかし、その事実を知った後大粒の涙を流した後、彼女は自分の意思で変わろうとしていった。
まぁその結果なのかは分からないが、クリス（セシリア）は刹那の恋人になり、フィン（チェルシー）に関しては裏の会長でもある俺の仕事を補佐する存在になってくれた。
まぁ話を元に戻すが、そんな事をしてイギリスの最新ＩＳを手に入れた彼女が一緒にいる教室と言うのは、俺達２人に取って二重の意味でも最凶最悪だとしか言いようが無かったのだ。

そして副担任である山田真耶先生の懇願などで織斑が先に自己紹介をする事になった。
「織斑秋斗です。趣味は料理で、家でも結構作っています。ＩＳを動かした初めての男性ということですが、ＩＳ方面の知識は無いので、皆さんよろしくお願いします（キラッ）」
そう言って笑顔を見せたら、この教室の女子の大半が黄色い歓声を上げた。

というかだ、その歓声が原因で耳がキィーンとなったのだが、最近の女性って超音波系の兵器なのかと思ったくらいだ。

その後織斑千冬が入ってきて、俺達に先に自己紹介をするように言った。

「わかりました。草薙和輝だ。年は１９歳とここにいる皆よりも年上で、テスラ・ライヒのいち平社員でもある。一応会社からは出向扱いでこの学校に来ているので、給料は貰えるが、平社員なので皆に対して大人の対応は出来ないので許してくれ。後、会社からの用事で学校の授業に来れないかもしれないが、これは当初から話し合っているので気にしないでくれ」

「草薙刹那だ。兄である和輝とは血は繋がっていないが、固い絆で結ばれている。ＩＳ適正があると分かってテスラ・ライヒの人間としてここに来ている。俺は兄と違って仕事で来れないと言う事は無いので安心して欲しい」

「ちょっと待て。お前は私の弟である『織斑一夏』だ!!何故他人の名前で言う、一夏?」

織斑千冬が刹那の事を『自分の弟』のような感じで言い寄ってきたが、俺が止めた。その際に織斑千冬から睨まれたが、俺としてはこんな奴の睨みなんぞ、怖いとも思わなかった。

逆に俺を怖がらせるならあの時の諏訪子さんクラスを軽く超えるほどのオーラをもってこいと言える。

「失礼ですが、刹那が言ったように、俺と刹那には血の繋がりはありませんが、固い絆で結ばれている俺の弟です。貴方の弟さんは確か調べましたが『事故で死んだんでしょ』？他人の弟に貴方の弟の面影を重ねないで頂きたい。彼は俺『草薙和輝』の弟、『草薙刹那』です」

「なんだと。そいつは間違いなく私の弟の『織斑一夏』だ。もう一人の弟の顔を私が間違えるはずが無い!!」

「知りませんね。俺は貴方の顔なんてＴＶの特集かＩＳ関係の物でしか見たことがない。それに、同じ顔の人間はこの世には３人ほどいると言われているんですよ？死者と間違われるなんて不愉快です。俺の名前は今兄が言ったように草薙刹那だ。織斑一夏と言う貴方の弟で、しかも事故で死んだ人間でもないし、貴方の弟でも無い。例えそうでも、貴方の栄光と名誉を得る為に死んだと言われている弟さんに同じ口が聞けるか、知りたいものですね。ブリュンヒルデ」

「くっ」

刹那は思い切り織斑千冬の言った発言を否定した。

これに関しては織斑千冬の自業自得とも言える。あの時の誘拐事件のさい、彼女は『自分の大切な家族である弟の命』ではなく、『自分自身の栄光と名誉』をとったのだ。そんな人間に今さら『家族面』されていい顔をするはずが無い。

それにだ、あの事件の後に俺が与えた今の名前で、刹那は自分にとって大切で大事な人達を得ている。

そんな人達と一緒にいる刹那にとって、今の織斑千冬の言葉は『家族を心配していると世間に見せている』偽証でしかないのだ。

それと『織斑一夏』に関しては俺がその時に作っていた最初のヴェーダを利用し、あの誘拐事件後に『死亡した』という嘘の記事を世間に公表しておいたのだ。

ちなみに死亡理由に関しては誘拐事件現場から数キロ離れた所に何かの戦闘跡があり、その場所に『織斑一夏』の学生証があった事で、マフィアか何かの抗争に巻き込まれて死んだ者扱いにされている。

織斑一夏誘拐事件に関しては当初は伏せられていたのだが、この学生証が発見された事で露見し、政府が会見で『目的は不明です』などとほざいたので、俺がツイッター等を使って『織斑千冬の2連覇阻止』を強調し、さらに『2連覇が理由で実の弟を見殺しにしたのでは？』と言う風に書き込みをしてやったら、一部は批難してきたが、一部は賛成の意向を示した結果、政府は真実を報道した。

ただし、織斑千冬本人は一切知らなかったと言う扱いであったが。

まぁそんな理由もあって色々と当時は叩かれていたが、俺も刹那もどうでもいいと思った。

俺としては篠ノ之束と強い関係を持っていた人物で、あの白騎士事件で白騎士であった可能性が一番高い織斑千冬が世間からどう思われようと関係なかったし、刹那も家族の命よりも栄光と名誉をとった人物にはどうでもよかったのだ。

そんなこんなで最初のＨＲは険悪な感じで終ったのだが、俺としては面倒でしかなかった。

その後最初の休み時間に篠ノ之束の妹である篠ノ之箒が刹那に文句を言ってきた上に、殴りかかろうとしたので、俺は彼女を止めるだけにしておいた。

何しろこの娘、自分がどういう状況下にいるのか一切理解もしようとしなければ、逆にそれを他人のせいにして生きているだけの自己中女でしかないと刹那との会話を聞いてそう思ったからだ。

ちなみにその時には織斑も来たのだが、俺達はあまりこいつとは関わりあいたくも無いのでそれなりに話をして無視しておいた。

その次の休み時間に問題のレイナがやって来たのだが、思いきり関わり合いたくないのだが、俺と刹那は織斑千冬の言った事が原因で後の人の自己紹介に関しては知らない

と言う風にしておいた。
当初彼女は激怒したものの、チャイムが鳴って次の授業の時間になったのだが、授業を開始する前にクラス代表を選ぶ状態になった。

まぁ結果で言えば俺・刹那・秋斗の３人だけだったのだが、レイナが思い切り言って俺達を否定した挙句、織斑千冬の前で暴言を吐いたので、秋斗が喧嘩を売り、そして織斑千冬が俺・刹那・秋斗・レイナの４人で代表を決定する戦いをするとなったのだ。
だがしかし、俺は授業を開始する前に少しだが時間を貰った。
当初織斑千冬も副担任の山田先生も不思議そうにしていたが、俺はＩＳレコーダーをクラスの皆に見せるようにして出した。
流石のレイナもそれを見て顔を青くした。
俺がＩＣレコーダーを持っていたのはＩＳ方面ができた事で女尊男卑になり、会社方面では同意の上で書類にサインをしたのに、後でそれを『脅迫されてした』と嘘の証言等をした女性職員が結構多くなってしまい、結果今や営業周りの人間の必須アイテムになっているのだ。
ちなみにそれをした女性達だが、事実がばれた後に会社から懲戒免職処分にされた挙句、警察に留置されて刑務所行きになっている。

本当は刹那も俺と同じ物を持っているが、ここで報告する事はないのでいいだろう。
「レイナ・バーンさん、貴方は国家代表候補生であるならば、これの意味が分かりますよね？」
「そ、それは・・・」
「貴方はこのクラスの担任でもあり、ＩＳの世界大会でもあるモンド・グロッソ２連覇という偉業を成し遂げたブリュンヒルデ『織斑千冬』の前で暴言を吐き、しかも貴方のような女尊男卑の思想をこの世に出させる事になったＩＳの生みの親の故郷はこの『日本』なんですよ？しかも私は自己紹介で言いましたよね？テスラ・ライヒからの出向扱いであると」
流石の彼女も何も言えなくなった。公私をうまく分けない人間など、社会では何の役にも立たないのだ。
幾ら女尊男卑の社会になっているとはいえ、営業周りの多い会社方面では女性だろうが男性だろうが、相手に対して『自分は信用できます』という感じを持たれないと意味が無いため、色々と苦労もあるのだ。
「まぁ今回は故郷であるイギリスから日本に来て色々あったのだろうと思い、不問にします。ですが、代表候補生であるならば、それとバーン家はイギリスの名家と言う事をついさっき思い出しましたので、ノブレス・オブリージュをお忘れなく」

俺はそう言ってＩＳレコーダーに記憶していたこれまでの授業のデータを消し、そして皆に謝ってから授業を行なった。

レイナに関しては俺が座った後にクラスの人間に謝罪したのだが、座る時に見た顔を見た限りでは反省はしていないだろう。

第２話　再会した姉妹なのだが・・・ばれたら俺、死ぬな

その後俺達は今日一日の授業が終わり、一応帰る準備をしていたら山田先生が現れ、そして俺達男子３人はこのＩＳ学園にある寮に入る事になった。

当初俺達は政府からの報告では数日の間だけだが、自宅からの通学になっていたのだが、ＩＳを動かす事のできる男性と言う事で政府が無理矢理ＩＳ学園に要望したらしいのは、俺達に寮の鍵を渡しに来た山田先生の態度で分かった。

おまけにＩＳ学園側も急いでした処置であったのもあり、少しの間だけ３人とも女子との合同部屋になると言われたが、これに関しては仕方ないだろうと思った。

一応であるが、俺と刹那がＩＳを動かせるという事実を世間に公表したさい、正確には（一応外向けでは違う為）自分の会社でもあるテスラ・ライヒからＩＳ学園に対し、『男性専用設備の増築及びリフォーム代』として数千万近い金を国を通して渡している。

元々ＩＳ学園にも男性専用の設備は存在しているのだが、これ等に関しては各国政府の要人が来る時以外不要の産物であったし、清掃員等で入ってくる男性や業者関係者以外、住み込みでここで働いている人間もいないこのＩＳ学園には、年頃の女子と教員である女性が多いので、女性用は多数存在するのだが、男性用のは一部にしかなかったの

だ。

とは言ってもだ、俺達というＩＳを動かした男性が３人も現れたので、急遽政府はＩＳ学園に対して男子専用の特別予算も組み立てられ、テスラ・ライヒからの補助金とも言える金は嬉しかったものでもあるのだ。

というわけで、俺達が入るまでの間に教室近くとアリーナの近く、食堂や寮に男子専用の設備が取り付けられたのだ。

男子用の寮と言うのも考えられているのだが、今のところＩＳを動かせる男性は俺達３人だけなので、今ＩＳ学園で使用している女子寮を増改築し、部屋数を増やす等をして対処する事になっているのだが、こちらの方はまだ完成していないらしい。

そして俺と刹那は山田先生から貰った部屋の鍵を持ち、事前に作っておいた荷物をフィンに持って来て貰った。

俺達は最初からＩＳ学園の寮に入るまでの数日の期間があるとは思っていなかったので、ちゃんと最初から用意していたのだ。

俺は『１０３５』番で、刹那は『１０１５』番で、知りたくなかったのだが、『同じ男性同士だろ？』と言ってきて関わろうとしていた織斑は『１０２５』番であった。

とは言っても、織斑には『俺はお前と違って会社員だし、刹那も俺の手伝いするって

事で同じ会社員扱いにしているから、重要な書類が結構あるから関わるのは基本無理』と言って部屋に来させる気は無いし、部屋の番号も言わないでおいた。

向こうが勝手に自分の部屋番号を言って来ただけなので、俺達はその部屋には行かないようにしようと誓った。

それと荷物に関しては織斑に関しては事前に寮に入る準備はしていたらしいのだが、姉である織斑千冬にちゃんと報告していなかったらしく、姉が用意した充電器と少しの着替えしかないという状況下で寮に入る事になってしまった。

これは荷物関係の話になった時に織斑千冬が現れ、俺達２人の荷物は電話に出た人物が持って来ていると言い、秋斗に関しては自分がしたと言ったのだ。

そのさいに秋斗が織斑千冬に事前に彼が準備した物を言って聞いたさい、織斑千冬本人が知っておらず、そして織斑千冬が『それだけあれば生活できるだろう』と言って終わらせたからだ。

俺達は織斑のこれに関しては『ほう（報告）・れん（連絡）・そう（相談）』をちゃんとしていなかった織斑のバカでしかないと思った。

まぁ実際これは企業とかで使う用語だが、実際の生活でも家族に対して必要なので、仕方ないだろうと思ったが。

俺は刹那と寮に入って行き、そして案内表を見たら玄関から近いのは俺の部屋番号だったので、俺の部屋の前で別れた。

元々ＩＳ学園は今まで女子だけがいられる女学院みたいな場所だったので、無理矢理寮に入れるようにした以上、男子一人だけの部屋なんて事は９９％ありえないからだ。

まぁ俺一人だけの部屋と言う可能性もあるが、それに関しては１％だけその可能性はあるが、俺は一度ドアをノックした。

だがしかし、ドアの先からは返事が無かったので、俺は『中には人がいない』と思ってドアを開けた。

実を言うと周囲方面の気配等の察知関係技能に関しては俺はあまりにも出来ないほうが、霊夢とはベクトルは違うものの、俺の場合は戦場で鍛えた『周囲の感じ』と言うものでおきる勘が強いのだ。

ガチャ

「ご飯にする？それともお風呂？それとも、わ・た・し？」

「うぅ・・・それとも、私？」

バタン

「・・・うん。ある意味夢だな。と言うか、あれが現実なら鬼巫女になった霊夢に確実に殺されそうだな。まったく、俺もこんな時間からこんな夢見てるなんてな」

ガチャ

「ご飯にする？それとも『おい、刀奈。お前は俺を霊夢に殺されて欲しいのか？』ええっと、ゴメンなさい」

夢ではなかった。

俺の部屋扱いとなっている寮の部屋の中には、何と裸エプロン姿でいた刀奈と簪の姿があった。

流石に言って悪いが、２人がこんな姿をしているのが霊夢にばれた場合、俺は鬼巫女状態になった霊夢に１００％殺される。

と言うのもだ、前に風邪をひいて体調が悪い時に、紫がふざけて裸エプロン姿で俺の前に現れ、そして俺を誘惑したりしたのだ。

しかも、一緒に幽々子さんまで看病すると言って便乗して面白おかしく参戦した挙句、更に紫さんは永琳さんから貰った薬（当初風邪に効くと言われて飲んだ）を使い、俺は身体が動けなくされた上、『息子』の方はもうこれでもかと言う位に『ご立派』な状態

になってしまったのだ。
だがしかし、その時は運が悪い事に霊夢が俺の看病に来てくれ、その時の俺の周りの情景を見て鬼巫女状態になった霊夢に襲われた。
俺は永琳さん特製の薬で身体を動かせないのもあり、鬼巫女状態の霊夢に関しての恐怖は未だに残っており、何しろ本気で『死』を意識したほどで、今でも鬼巫女状態の霊夢は恐ろしいのだ。
（以前にも稀にその姿になる時があるので、基本鬼巫女にならないように甘味系を渡したり、食事の材料を持って行ったりしていたが、相手は俺ではなかったので）
その結果紫さんと幽々子さんは鬼巫女霊夢を確認してすぐさま撤退し、俺は看病してくれている間のツンデレ霊夢の可愛さにドキドキしつつ、逆に献身的な状態になっている霊夢と一緒にいたりして楽しませてもらったりもした。
と言うかだ、紫さんならこの情景を見て思いきり言って面白半分で霊夢達に告げるだろう。
もしもそうなったら、俺は自分が生きていられるのか分からない。

何しろどう考えてもばれた場合、映姫さんからのありがたい長時間のお説教の後、鬼巫女状態の霊夢・アリス・レミリア・フラン・パチュリー・こあ・咲夜・美鈴の８人の

持っている最強スペルカードを使われるか、紫さん・幽々子さん・映姫さんが加わった全員にこってりと絞られてミイラになるか、どちらかしか想像が出来ないからだ。

多分気休めかもしれないが、どちらになったとしても、アリスとパチュリーの２人の魔法使い、レミリア・フランの吸血鬼としての能力に、紫さんの境界の弄くりで、一応死なないと思うが、それでもなった場合は流石に俺もやばいかもしれない。

一応２人ともエプロンの下には競泳用の水着を着ていたらしいのだが、それでも俺としては霊夢にばれるのは一番嫌なので、どうしようと思っているほどなのだ。

まぁばれた場合、霊夢達に殺されると思ったほうがいいだろう。

簪は思いきりそんな状態でいても恥ずかしかったらしいが、俺としては出来れば二度としてほしいとは思わない。

霊夢にしてもらうならいいかなとは思ったが、それでも霊夢以外の女の子にもして欲しいとも思うが、出来ればこういったシュチュエーションは霊夢を本妻にして皆と結婚した後にしてほしい。

それでもこういったシュチュエーションをするなら皆と一度話し合ってからにしてほしいと思う。

一応俺としても男なので、こういった衣装で『したい』と思うが、その度に鬼巫女霊

夢に殺される可能性を持つのは嫌だからな。

その後刀奈（学園内であった場合は楯無と呼んで欲しいと言われた）から話を聞いたところ、俺と一緒にいる人間は簪で、これは刀奈がこの学園の最強（生徒間での称号だが）である『生徒会長』らしく、その権限で俺と刹那の部屋の同居人を決めたらしい。

刹那の方の同居人だが、刀奈も俺達がＩＳ学園に来る少し前に、クリスとシャルロットに事前に話をしたら、２人は視線で火花を散らし、さらには本気で弾幕勝負になりかけたらしい。

だがしかし、二人の実力は均衡している部分もあるため、引き分けではいけないだろうと思い、厳正な判断が必要と言う事で紫さん経由で映姫さんに頼んで能力を使用してもらい、専用のくじで選んでもらったらしい。

それと刀奈から聞いたらクリスとシャルロットのいるクラスは３組で、今日は行けなかったが時間が経ったら行こうと思った。

一応３組なのは１組にいるレイナの方面と、織斑先生のクラスには俺達男性操縦者３人がいるため、また何かで転入生が入ったさいには織斑先生のクラスに『俺達の遺伝子目的で』人数が増える可能性があるため、無関係だと思わせるために分けたらしい。

ちなみに簪は４組で、専用機を持っているため４組の代表に選ばれかけたらしいが、辞退したらしい。
「それでクリスとシャルロット、どっちが結局刹那との同室になれる権利に選ばれたんだ？」
「クリスちゃんよ。シャルロットちゃんに関しても『こちら側の事情』を知っている本音に同室を頼んだから、一応シャルロットちゃんが刹那君の部屋に行ってもいいけど、問題にならなければいけるとはいっておいたわ」
「そうか。でも、お前２年生だろ？お前の方はいいのか？」
「大丈夫よ。相手にも事前に話をつけておいてあるし、ここで寝泊りしても『私は』文句を言われないわ」
そう言って扇を開いたら、そこには『準備は完璧』と書かれていた。
一応ＩＳ学園内で最高位にある権力をこうゆう風に使うのはどうかと思うが、まぁいいだろう。
「ただし、分かってるな。一応俺もお前達との『あっちでの関係』は今度霊夢達と話し合ってからにしてくれ。流石にさっきと同じ事されたって霊夢が知ったら・・・（ガクガクブルブル）」
「えぇっと、わかったわ」

「う、うん」

鬼巫女状態の霊夢に会っていない刀奈達姉妹はいいかも知れないが、鬼巫女になった霊夢を知っている幻想郷の面々なら、絶対に刀奈がしたような真似はしないだろう。

何しろ命が幾つあってもあの状態の霊夢と弾幕勝負しろと言われてもだ、霊夢が纏っている気迫に怖気づいて何も出来なくなるし、

おまけにあの状態の霊夢の身体能力は結構高く、一度俺が『とある理由』で鬼巫女霊夢を止める事態になってしまい、そのさいにアメイジングエクシア（リミッターは全解除状態）のトランザムを使用して対処したのだが、トランザム状態の俺が逆に霊夢に一撃で撃墜されたくらいだ。

まぁＩＳの絶対防御が発動し、ＩＳが解除されて堕ちて行く俺を見て霊夢は鬼巫女から解除されたのだが、それほどまでに鬼巫女状態の霊夢は恐ろしいのだ。

まぁその後霊夢と甘～い看病生活ができたのはよかったけれど、俺としても鬼巫女霊夢とは二度と戦いたくも無いのだ。

そんな話をしながら今日一日が終わり、次の日に織斑先生から俺達３人に専用機が授与されると言ったが、俺と刹那は専用機を持っていると話し、思い切り周りの皆から唖然とされたが、一応『ある意味欠陥品とも言えるＩＳ』だと言っておいた。

「欠陥品？どうゆう事だ、それは？」
「あぁ、俺達の専用機の見た目がですね、国際指名手配されている謎のＩＳである『蒼天の騎士』と『黒衣の騎士』に似ている全身装甲型なうえに、技術部が面白半分で色々と改良したようで、その結果普通の女性が乗りこなせないような性能にしたらしいんですよ。一応他のＩＳ操縦者が操縦したら、全員が長時間の運用は無理な上に、発揮した機体性能に関してはコンピューターの予測を遥かに下回るほどの超低性能で、俺達に廃品利用扱いで使用して貰ったら、予測道理の機体性能を出したので、それが原因なんです」
織斑先生に話した説明だが、俺の説明には嘘はない。
実を言うと元々アメイジングエクシアが元になっている俺達の機体性能なのだが、普通の女性では乗りこないほどの『Ｇ』がかかる。
一応それなりに訓練をしている女性なら一応大丈夫であるが、長時間使用しての戦闘行動等は難しい。
また骨格や筋肉の関係上女性では少し難しいと言えるほどの性能に俺達のはなっているのだ。
そのため前にクリス達に頼んで俺達のＩＳを乗ってもらって操縦してもらった所、全員から結構きついと言われたほどだ。
幻想郷の面々には使用してもらわなかったが、基本女性の身体には優しくないと言え

る機体なのだ。

まぁ俺の専用機は完全に『念動力者専用』に造ってあるし、刹那の専用機も『ツインドライブシステム』や『サイコフレーム』等の『刹那の思いに答える』という事が前提の運用目的の機体であるため、性能で言えば現状この世界に存在するＩＳを軽く凌駕する機体になっている。

そのため俺と刹那の機体は第３世代型ＩＳと言うよりも、リミッターを全て解除して運用すれば第４世代型のＩＳすら瞬殺できるほどの超高性能機体になっているため、リミッターを幾つかかけて運用している正しく『番外世代』と言えるほどの品物なのだ。

それを聞いた織斑先生も一応納得した。休み時間に俺と刹那はレイナの嫌味なことを言われたが、無視しておいた。

それと刹那から聞いたがクリスもシャルロットも、当初は３組の代表に選ばれかけたらしいが辞退したらしい。

理由としては『自分達の専用機持ちが出るよりも、それ以外の人間が出て運用をする方が将来的には良いと思う』と言って、辞退したらしいが、訓練等には手伝うと話をつけて置いたらしい。

その後俺達は試合の日を迎えた。

第2．5話　刀奈の思い。和輝との出会い

刀奈　Ｓｉｄ

私は妹の簪ちゃんと一緒に和輝の腕を私達が持ち、そして少し前のことを思い返した。

少し前の私達姉妹なら、こんな風な事もしなかっただろうし、私と簪ちゃんの中は物凄く悪いままだっただろう。

もっと悪ければ簪ちゃんは私の手の届く範囲にはもういなかったかも知れなし、最悪私も含めて姉妹一緒に何処の誰とも知れない男達に陵辱され、薬を大量に使用されて二人とも廃人になってしまうか、そんな奴等の子供を産むだけの肉袋にされるかの違いだろう。

あの時、今私の目の前にいる和輝がいなければ、私達姉妹は両親からも『更識の家として』切り捨てられていただろう。

それほどまでに私達は和輝に恩と感謝をしているし、両親も『更識の人間』としては

別に、『一人の親』として和輝の事を信用してくれ、私は更識家の現当主であるが、和輝のことと簪ちゃんの事件の時のことが原因で、当主の名前でもある『更識楯無』の名前を名乗るのは私と簪ちゃん以外の親戚等が後数年で当主になれるほどの腕前になると言う事で、私はその間の代理にされている。

同時に、私達２人は更識の人間に相応しくないとされ、新たな当主ができた時には国外追放処分を言い渡されているほどだ。

これは仕方ないだろうとも思っている。

何しろあの事件の時、私は『更識楯無』としての行為ではなく、『簪ちゃんの姉』という行為を選んだからだ。

そのため更識の家に帰って来た私達２人は親戚の人間達から色々な嫌味を言われた。

両親も他の人の前では私達を罵倒したが、私達と気の知れている人達の前だけでは心配をしてくれていた。

あの時、和輝が『私達２人を家まで送ると言う名目』でいなければ、私達は心も身体も持たなかっただろう。

同時に和輝が自分の持っている秘密でもある『蒼天の騎士』としての姿を見せなければ、私達は光がある場所でいられなかったと思うほどだ。

だからこそなのかも知れないが、私も簪ちゃんも１年半前のあの時の出来事は決して

忘れなれないのだから。

1年半前。

私と簪ちゃんはその当時、物凄く仲の悪い姉妹であった。

私は更識家の第１６代当主として認められて『更識楯無』の名前を継承し、簪ちゃんは私と顔を合わせることも、話をする事もなかった。

私が話そうとしても簪ちゃんには逃げられ、私は顔には出さなかったが内心途方にくれていた。

私は簪ちゃんが更識家としての当主の仕事をさせたくないという思いと、妹の簪ちゃんの前でぶざまな真似はしたくないと思う気持ちが原因で、簪ちゃんの前でぶざまな真似が出来ないと思う気持ちが原因で、簪ちゃんの前では一度も失敗しなかった。

私がしている事が原因で小さい時にあった簪ちゃんとの絆は今はもう無いと言えてしまうほどのものだった。

そんな時に私達姉妹にとっては忘れなれない『あの事件』は起きた。

この時にはＩＳ学園に入学する予定だった私は、最後の『中学生』として『普通の外

出中』に同じ暗部関係の男が現れ、そして私に携帯と写真を見せたのだ。内容は『妹を預かった』という内容で、そして写真には『縛られている簪ちゃん』が写されていた。

流石の私も唖然としたが、その男に『簪ちゃんを助けたいなら付いて来い』と言われ、私は付いて行く事にしたのだ。

おまけにであるが、この時私は携帯端末を使おうと思ったが、他に連絡をしようとしたり、そんな素振りを見せたら簪ちゃんの命は無いと脅されたのだ。

しかも相手は私よりもこちらの世界でいる時期が長い上に、経験も私よりも多い人物であるため、私も不用意な行為はできなかったのだ。

そして私は簪ちゃんが解禁されている場所に連れてこられた。

この場所に連れて来た暗部の男以外に数人の男達が存在し、そしてここのリーダーである存在は更識家がマークしていた男だったのだが、簪ちゃんが拘束されているため、私は何もできなかったのだ。

その後私は簪ちゃんを人質に捕られている私は、男達の言う事など当初は聞く気は無かったのだが、事情が変わってしまった。

相手は更識家がマークする事になった『麻薬』を簪ちゃんに使おうとしたからだ。

これは本当に『麻薬』ではないのだが、その効能は麻薬以上に危険だったからだ。
この薬を打たれた人間は、皮膚の神経が過敏に反応するようになってしまい、しかも打たれた後に男女の行為をされたら一発でアウトの品物なのだ。
何しろこの薬で打たれた人間は、元に戻る事が不可能なほど身体と精神が狂ってしまい、元に戻そうにも治せないのだ。
私も打たれてしまった人間を見てしまっているため、その恐ろしさを知っており、私は言う事を聞かされた。

私はその場で服を脱ぐように指示され、逆らう事もできない私は簪ちゃんの前で辱めを受け続けた。
私と簪ちゃんを『犯さない』と言う約束だけで、私はファーストキスを奪われ、ただ処女を散らさないだけで、それ以外はずっと辱めを受け続けていたのだが、途中で簪ちゃんも私を守るために簪ちゃんが私を守るために同じように辱められていた。
そして周りの男達やリーダーもとうとう痺れを切らして私達に薬を打って身体を楽しもうかと言う状況下になってきていたのだ。

私達は逃げようと思っても、両手両足は男達に拘束された状態で男達への奉仕をして

きていたため体力は限界に近く、私達は逃げる事すらできない状態であった。
そしてとうとう私達姉妹は身体を重ねれている状態で二人一緒に薬を打たれる瞬間になっていた。

そんな時だった。

突如屋上付近から爆発が起きて周りが慌てふためいている時に銃撃音が聞こえ、私達の周りの人間が全員倒れた。
そして血がついた死体を見て簪ちゃんも危険だと思ったのだが、よくよく考え直すと可笑しいと思ったのだ。
と言うのも、私達の身体や周囲に撃たれた男達の『血が飛び散っていない』からだ。
私は小声で簪ちゃんにそのこと告げると、当初恐怖に怯えていた簪ちゃんもその事に気付いて不思議そうにしていたら、私達の周りを『３体の全身装甲（フルスキン）のＩＳ』が現れ、私達を守るようにしていた。
そしてその二体は私達でも知っているＩＳだったのだ。何しろ国際指名手配されている『蒼天の騎士』と『黒衣の騎士』だったからだ。
もう一つは知らないが、だがしかし国際指名手配されている２体と同じ感じの機体な

ので、あの2体と関わりのある機体なのかも知れないが、現状どうすればいいのか私達はその場で動けないでいた。

だがしかし、この3体の行動は私達2人を驚かせた。

何と騎士の2体は持っているマシンガンで相手を倒していき、もう一体は両腕にあるポットみたいなのからマシンガンみたいなのから無数の弾丸を発射したのだ。

流石に私達も驚いたが、そして数分後にはこの場にいた大半が倒れた。

だがしかし、使用している弾丸が元々血のり付の物なのか、相手には血が付いていた。

そして蒼天の騎士が私達にマントのような物を私達に渡し、そして私達をしっかりと抱えて外に出してくれた。

ちなみに残りの2体はそのままこの場にいる組織の人間と戦っていた。

私達は貰ったマントで身体を隠していたが、外の景色を見てみると夜になっており、綺麗な満月が見えた。

そして捕まっていた場所の近くに大型のワゴン車が存在し、蒼天の騎士はＩＳを解除したのだ。

そして蒼天の騎士の鎧がＩＳのように解除された時にはもっと驚いたほどだ。

何しろ今までＩＳを使えないとされていた『男性』がＩＳを使用し、更に国際指名手

配犯扱いの『蒼天の騎士』の正体なのだから、私達２人の驚きは大きかった。
その後私達はワゴン車に乗ってラブホテルに連れて行かれた時は驚いたが、和輝は私達を如何こうするのではなく、風呂を利用させるのが理由だったらしい。
ちなみにラブホテル関係の人間は金と設備等の破損をあまりしなければ、客に対して何も言わない宿泊施設な面もあるという理由で選ばれたらしいが、私達としてはいきなり入られた時は驚くしかなかった。

その後私達は２人で風呂で身体を洗い、そして風呂に入る前に買って貰っていた下着とシャツなどを着てベットの上で寝かしてもらった。
本人は俺は別でいいと言って私達はベッドの近くで眠っていた。
そしてその後和輝から聞いたのだが、私達で色々としていた組織の人間は全員血のり付の非殺傷の弾丸の攻撃を受け、一部は取り逃がしてしまったらしいのだが、全員警察の御用になったらしい。
私達は今までの疲れでぐっすり眠ってしまっていたが、起きたら和輝から昼まで眠っていると言われた。
流石に私達も驚いていたが、しかたないと思うしかなかった。
その後私は更識の家に連絡を入れたのだが、更識の家からは私達姉妹は家に戻って来

るように言われたのだ。
私達は文句は言えないといえないと思ったが、和輝が一緒に行くと言ったのだ。
流石に私達も驚いたが、理由としてはあの組織の残党方面からの護衛らしい。
彼の持っている情報では報復や私達を狙った理由を知りたいと言われたのだ。
その後私は助けてもらったお礼として、車での移動中に自分の家の事を話した。ただし、ただの独り言の扱いで聞いてもらい、和輝もそれで納得してくれていた。
当初家に着いた私達を送り届けてくれた和輝なのだが、最初は不審者扱いされてしまった。
その後私達が助けてくれた恩人と言って和輝への対処は何とかなったが、そして和輝も話を聞くために私達と一緒にいる事になった。
その後和輝は私の親戚達は和輝をじろじろと見ていたが、和輝は平気な顔をしていた。
そして私が捕まった私と簪ちゃんの事になった時、私は『更識楯無』という当主の名前を持つ存在としていたのだが、簪ちゃんが捕まった後のことで私の今までしてきた事を全て否定された。両親も同じで、親戚同様に私達を罵倒した。
だがしかし、その瞬間和輝があの暗部の男と繋がっている親戚の一人をこの場で暴露

したのだ。
流石のその言われた親戚も当初は否定したのだが、和輝が証拠のデータを皆の前で提示した事で全否定できない状態になり、そして和輝と私達を殺そうとしたのだが、和輝が対処して全てを終らせた。
流石の親戚や両親も驚いていたが、和輝は逆にその元親戚に対して言った事が逆に凄かった。
『弱いな、おい。俺の知り合いの方がまだ強いぞ?それとも、修練とかをあまりしていなかったのかな?金が大事で』
まぁそんなこんなであるものの、この後に私達姉妹と両親の４人と和輝と話し合いになったのが、両親は最初私達に対して謝罪した。
親戚一同がいる場面であったと言う事もあり、そして更識家の人間の一人として私達のことを否定できなかったのだ。
その後和輝は『蒼天の騎士』である事を明かし、そして私達姉妹が捕まっている事を知らなかったらしいが、彼の持っている情報網で『戦争』を起こそうとしていた組織らしく、結構危険な品物の売買もあったらしく、そのため仲間２人と一緒この組織の裏を色々調べた結果殲滅する事にしていたらしい。
ちなみにであるが、調べた情報に関しては警察に届けている上に、逃げられないよう

に色々と策を要していたらしい。

その後私達姉妹は更識家の人間だけの話し合いの結果、私は当主『更識楯無』としての資格剥奪が決定されたのだが、私並の実力がある存在が現状更識家にいないことから新たな候補が生まれるまでの間の当主として扱われ、その後当主としての資格を持つ者が現れたとき、私達姉妹は更識家との関係を剥奪され、その後の生活は自分達でどうにかする事になってしまった。

流石にこの決定には私達は文句は言えなかったものの、両親が和輝に対して私達を『貰ってくれないか?』と言ったので、和輝も当初は唖然としていたが、『本人達の意思を無視するな』と言われたほどだ。

私達としては和輝には恩もあるし、助けてもらった感謝もあるのだが、おまけにまぁ人としても良いかなと言う感じはあったのだが、どうしようか迷っている部分はあった。

おまけにであるが、本人が彼女が複数いると言う事で、そんな人間の女になるのは嫌だろうと言われたのだが、私達姉妹としては色々あったが和輝は信用できる感じなので気にしないと言った。

両親に関しては『出来れば孫の顔を見たいなぁ』と言う始末だったのであれだったが。

その後私達は和輝が彼女の女性達がいる場所『幻想郷』に連れて行ってもらい、そして私達は話し合いの結果、和輝の女性として認められ、まぁそのさいに和輝を騙した感じになったが、私達姉妹の初めてを貰ってもらった。

まぁ本人もこういう関係をもってしまった以上仕方ないと諦め、そして私達は和輝の彼女となったのだ。

そして私達は和輝と一緒にいられることが幸せであると言えたのだから

第3話　和輝ＶＳレイナ　試合よりも、周りの人間がめんどい

俺達はとうとうクラス代表を決める戦いの日になってしまった。
今日までに俺達がやっていた事といえばであるが、刀奈に頼んで生徒会の役員にしてもらった。
ちなみにであるが、俺は会長補佐で、刹那は会計補佐である。

本来ならこの役職と言うのはおかしいと思うのだが、俺と刹那の場合は結構特殊だからだ。
俺の場合はテスラ・ライヒからの出頭という形を取っているため、何か会社から連絡があった場合は会社に行く事になっている、実際会社へ行く場合の８割は蒼天の騎士としての仕事だったり、裏方面での仕事だったりするのだが、これは刀奈が他の生徒会役員にもそれとなく言ってあるので、全員了承済みである。
ちなみに２割は表の方面で、俺でなければダメというほどに信頼関係を築いている会社等もあるからだ。

だがしかし、刹那は本来この分類に当てはならないと言えるのだが、刹那の場合はダークマターを使用してからなのか空間把握能力が異常とも言えるほど急速に発達したりしたため、幻想郷の医者である『永琳』さんも『流石にそれは可笑しい』と言う事で、色々と検査をしなければいけないのだ。

おまけに言えばだ、そういう医療関係ならＩＳ学園でもできるのだが、テスラ・ライヒが出している医療関係の機器は現状の技術の粋を集めて完成させている最先端の設備を保持しており、ＩＳ学園が持っている物よりも性能は約１．５倍ほど高い為、こちらでの検査が必要と言っておいているのだ。

政府に関しては織斑と一緒に俺達２人のデータを取りたいので当初は却下しかけたのだが、俺がおもいきり脅迫と餌による理解をしてもらった。

脅した理由に関しては簡単で、実はテスラ・ライヒが開発したゲーム方面で、体感型のリアルゲーム『ＩＳ／リアルファイター』を開発し、それを俺達男性操縦者が出る半年近く前に世に出したのだ。

このゲームは『これを使えば男でもＩＳ操縦者になれます』をコンセプトに、今やもう懐かしい各国の第１世代のデータを選択し、プレイヤーは自分が持つ最初の専用機に

し、そこから自分だけのＩＳを造ると言うゲームなのだが、操縦方法ややり方に関しては『ＩＳを動かすやり方』と同じようにしているのだ。

またこのゲームでは、他のプレイヤーと複数の対戦が出来るほか、戦いの最中にエネルギーや弾薬の回復ができるアイテムが出たり、倒さなければいけない相手がファンタジー系だったりと、色々な要素が含まれてもいる。

またクエストの中には『施設防衛』や『地点に行け』等と色々なクエストもあり、敵の中には攻撃してはいけない存在などもあり、色々と面白おかしく楽しめるようにしているのだ。

更に、武装なども一部（テスラ・ライヒ限定であるが）最新型のデータを取り込んだりし、各ミッションをクリアすると持っているＩＳを強化したりできるようにし、中には単一能力（ワンオフアビリティー）の発現まで使用と変更ができるというもので、お一人様３機まで持てるというもので、システム関係上ゲームセンターのような場所限定で出しているのだが、大ブレイクしているのだ。

またテスラ・ライヒのゲーム方面とＩＳ開発部門が協力し、一般の人からの『こんな武装が欲しい』や『こんな機体が出て欲しい』等のアンケートをとり、アンケートの内

容次第では実際とゲームの両面での採用が決まっているのも原因で、世界中で超が付くほど有名ゲームになったのだ。

更に、このゲームの操作性があまりにもＩＳと同じということで、軍などでも育成用訓練シュミレーションの一つとして使用しているおり、開発当初日本政府もＩＳ操縦者の一部を貸してもらい、運用データを集めて出来たもので、ＩＳ学園へもＩＳの訓練機の関係上少ないので、採用しようという声も上がっていた商品でもあるのだ。

俺はこのゲームの現在の運用を永久的に凍結し、今後のバージョンアップなども全て中止すると言った上、提出予定のデータを全部破棄すると言ったのだ。

これを聞いた各国政府は待ってくれとなったのだ。

実はこのゲーム、コンセプトの関係上各国政府の人間が男性が『もしもＩＳ操縦者になった』場合のデータが欲しいと言う事と、世界に『４６７機』しかないＩＳコアの関係上各国政府に配備されているＩＳの数は決まっている。

幾ら新型機の開発や研究用に一部を使っていてもであるが、軍にいる全員にいきわたっている訳ではないので、このゲームの登場はうれしいものだったりしたのだ。

そのためこのゲームが出たことでＩＳ運用関係の訓練に使えると採用している政府

にとって、運用の永久凍結なってしまい、その原因が自分達であると知れた場合、自分の国の国民達が暴動やら何やらを起こす可能性は高い上に、最悪の場合は軍が機能しない状態になる可能性があるのだ。

結果で言えば政府は俺達の要望を飲む事になったのだが、俺はＩＳ学園に対してこのゲームの躯体を『無料』で置く事も進言しておいた。

そして織斑を全面的にデータ取とり方面をさせるようにし、俺と刹那に関してはＩＳの使用する新兵器関係のデータをとる事で了承させておいた。

後ついでにであるが、許可をしてくれた政府には次世代型訓練機を、限定ではあるが無料で貸し出すと言ってやったら、我先にと許可したため、俺達２人に関しては手を出さない事になったのだ。

躯体の設置に関してはまだできていないのだが、それでもこのゲームの躯体を『１０機』も取り付ける場所も必要だったのもあり、色々な調整等も必要なので現状では２学期になった時に運用ができるようにしているのだ。

それと同時に刀奈に訓練をつけてもらっているのは、それなりに俺達は手を抜いて戦うつもりであるが、後々何か織斑千冬に言われるのが面倒なので、生徒会長である刀奈

に頼んでＩＳの訓練もしてもらっておき、刀奈の証言をつけてもらう為である。
ただし、基本俺達は幻想郷での『弾幕ごっこ』に、紛争地域での戦闘経験があるので基本は回避方面のみを重視しておいた。
戦闘系の訓練はＩＳを使わないで道場なので行なっておいたりし、射撃関係はＩＳを使っての訓練等を教えてもらう程度にしてもらっている。
例え手を抜いている事がばれたとしても、教官が刀奈であるため大丈夫だと思うし、おまけでＩＳ学園に来るまでに色々としておいたと言っておけばいい。
何しろテスラ・ライヒのゲームもあるので、納得は早いだろう。

そしてとうとう試合当日になり、俺と織斑は一緒の第三アリーナ・Ａピットで待機していたのだが、織斑の専用ＩＳ『白式』が到着したのはいいのだが、来たのは何とあまりにも遅くてついさっきここにやって来たのだ。
ちなみに織斑先生や山田先生も一緒にいたのだが、これに関しては可笑しくないと思うのだが、何故か完全な部外者とも言える篠ノ之箒がいたが、織斑との話を聞いていた限りでは、今まで篠ノ之が織斑を鍛えていたらしい。
そして当初予定していた織斑ＶＳレイナだったのだが、白式の『初期化（フォーマッ

ト)』・『最適化（フィッティング）』両面の時間確保の為、予定を変更して俺ＶＳレイナの勝負になった。織斑も織斑先生の命令で対戦相手がレイナではなく刹那に変更される事になった。

これに関しては篠ノ之が文句を言ったのだが、こいつ本当にＩＳの授業をちゃんと受けているのかと思った。

それにだ、自分でも予習復習をしていれば教科書にも基本的なことが書かれているのだから、勉強していない訳はないだろう。

「おい、篠ノ之。お前ちゃんと授業受けて、そして授業内容を覚えていないのか？おまけにだが、予習復習すれば知っている事実だぞ？」

「なんだと!!貴様ふざけているのか!!!」

「じゃあ聞くが、専用機に対して行なうＩＳの初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）、最低で何分の時間が必要だ？答えてみろ。ちなみにだが、俺は仕事の関係上知っているし、織斑先生達も教師だから知っているぞ？それに前に調べて教科書にもあるから、知っていないと言う事は無いだろう？」

俺がそう言うと篠ノ之は何も言い返すことをしなかったので、完全に知らなかったのだろう。

これで人に物を教えようと思っていたという時点で馬鹿でしかないと思った。
知識や経験の無い人間が他人に教えるのはあまりにも身勝手で危険なのだが、こいつも自分の姉と一緒で『自己中』だと思った。
まぁ多分こいつは全否定するだろうが、こいつの姉の事を少しでも知っている他人からみれば、こいつはそう見えても可笑しくないのだから。
「ちゃんとＩＳ関係の勉強してたのか？一番最初に専用機を受領した時にする初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）の時間は搭乗者と機体の状態などによるが、最低でも『３０分間』は必要だ。おまけにこれをする前に戦闘行為を行なうなんてものは、自殺行為以外何ものでもないぞ？その意味くらいはちゃんと事前に勉強してるだろなぁ、２人とも？」
俺がそう言うと２人は思い切りいって顔を背けたので、俺は簡単なＩＳ方面の勉強すらしていないのかと呆れてしまった。
「それでよくＩＳ関係の勉強してた何て良く言えたな。呆れるしかないぞ。いいか、初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）も何もしていない状態で初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）が完了した場合、後々搭乗者の生命に関わるようなバグが起こる可能性は無いが、このまま戦ったらその点のバグが発生する可能性がある。おまけにだが、最初のこれが出来ていても、その後の訓練等のダメージの受け過ぎ

での危険な状態で運用し続けても、二次移行（セカンド・シフト）するさいにエネルギーバイパス等が異常をきたすなんて事は普通にあるんだ。一応教科書でもいいし、上の先輩から話を聞くとか、先生方に聞くとか、この試合までの間はそれなりにたっぷりあったんだから、話を聞いていれば知っている事だぞ?」

俺がそう言うと何とも言えない顔になったのだが、更に織斑先生達のほうに顔を向けたら何ともいえないような顔をしたので、どうやら予習系の事すらしていないと思い、一体この戦いまでの間の時間を一体どんな事をしていたのか知らないが、戦闘系訓練だけにしていたのかと思ったが、ＩＳで必要な一般系な知識の方面もやれよと思ったほどだ。

その後篠ノ之の方は放っておいて俺はアリーナ内の方に移動しておいた。

何しろピットの中でＩＳを展開しているのもめんどくさいと言うか、篠ノ之のおかげでいるのが面倒なのだから、仕方ないだろう。

おまけにアリーナを使用できる時間も限られている為、これに関しては色々と急いだほうがいいのだ。

そしてアリーナの中では『ブルー・ティアーズ』を纏って空で佇んでいるレイナがいたが、人を舐め腐った顔をしていた。

「あら、貴方が私のお相手ですの？織斑君だと思いましたのに？」
「連絡聞いている上で言ってるか？あいつのＩＳがついさっき来たんでな。そのせいで選手交代だ」
俺は平気な顔をしていたが、俺としては内心あまりにも馬鹿らしいと思うしかなかった。
向こうに刹那が待機しているが、向こうのほうには念の為に簪の専属メイドである『本音』をピット内に入れてもらっていた。
元々向こうも俺達の事をそれなりに情報を教えており、刹那がもしも暴走されたらあれなので、ならないように頼んでおいたのだ。
とは言ってもだ、本音や本音の姉で刀奈の専属メイドである虚さんにもなのだが、幻想郷方面は完全に教えていない上に、俺と刹那が蒼天と黒衣の騎士であることも教えていない。
これは更識家内の俺達関係の情報流出を防ぐ為で、簪は教えられない事に少し不満であったが、我慢してもらったのだ。
そして簪は４組なので、試合の結果は後で教える事になっている。
俺はそう思うと試合終了後にまた篠ノ之と顔を合わせなきゃいけないのかと思いた

め息をつき、そしてこれ以上何もしないでいたら色々と面倒なので気持ちを切り替えた。

「まぁこれ以上はあれだし、さっさとするか」

そう言って俺は自分の専用ＩＳ『スタービルドストライクガンダム』を展開した。

周りの観客席にいた女子達も俺の専用機体の姿を見て驚いていたが、一応俺は教室で言ったのだけどなぁと思った。

俺は展開したものの、空には飛ばないで、上空で俺を見下ろしている相手を見据えておいた。

それとだが、本来なら『アナザースタイル』で戦うくらいが一番良いのだが、なのに何故このスタイルで戦闘するのかと言うと、事前にクリスから相手の機体が『ＢＴ兵器採用機体』と聞いていたので、この機体の持っているシステムの実験台にちょうど良いからだ。

何しろ今までデータを採る為に手伝ってもらった相手といえば、『羽付き』という名称で国際指名手配されている俺達の仲間の専用機体である『アメイジングガンダムキュリオス』といった感じに、俺達側の関係者機体でしかデータを取っていない上に、基本採用しているのが『レーザー兵器』ではなく『ビーム兵器』なので、レーザー兵器方面でのデータも取っておきたかったのだ。

そしてビーム兵器のデータはテスラ・ライヒで専用のＰＣを使って厳重に封印されており、外に漏れないようにしている。

おまけにであるが、俺が装備しているのは専用ビームライフルではなく実弾系の『フォトン・ライフル』にしている。

これはビーム兵器云々がばれたら面倒なので、俺の機体はこういう風に今回はしておいたのだ。

ちなみに刹那の機体はビーム兵器を採用しているが、これのデータが出来たらと言ういい訳付で採用しているのだ。

「そ、蒼天の騎士と黒衣の騎士と似ていると言うのは本当らしいですわね。ですが、それだけでは私には勝てませんわ」

「ま、そりゃそうだわな。だけど、甘く見るなよ?」

そして試合が開始されたのだが、試合開始と同時にレーザーの嵐が待ったのだが、俺はそれを余裕で回避した。

「何でそんなに回避できますの!?」

「教えてくれた先生がいいんでな。とは言っても、回避方面だけの練習が多かったんでな」

と言うかだ、たかが４本程度のレーザー攻撃に当たるほど、やわな訓練はしていない

し、これくらいなら弾幕ごっこで一番下の連中でも余裕で回避できる程のしなものでしかない。

と言うか、クリスに関しては弾幕ごっこと、彼女とよく訓練している永遠亭の『鈴仙（れいせん）・優曇華院（うどんげいん）・イナバ』とよく一緒によく訓練をしているのを知っているため、向こうの方が弾幕と射撃の正確性はあまりにも高い。

こっちは完全に『教科書通り』と言えるような感じな上に、クリスは最近の訓練の結果なのかハロの制御無しでも一つだけだがビットと射撃を同時にやれるのに対し、こっちはビットと射撃の感覚が分かれているため、対処は余裕である。

おまけにさっきから『時間稼ぎ』してやっているのに、気付いていない。

そんなこんなで時間が経過したのだが、俺はレイナからの嵐のような攻撃で一発も当たらないで平気でいた。

逆に相手はぜぇぜぇ息を切らしていたが、俺としてはのほほんとしていた。

まぁ一応シールドで防御したりもしたが、それ以外で『当たった』のは一発も無い。

「くっ、まさか私とブルー・ティアーズの攻撃をこれほどまで耐えるなんて」

「耐える？それは俺に『正式に一発でも攻撃を当てた人間』が言う事だぜ？一発も当たっていない上に、よく言うよ」

レイナは思いきり悔しそうな顔をしていたが、俺としてはもういいだろうと思った。
何しろ試合を開始してから『２５分』も経ったのだから、ここから『反撃』させてもらおう。
「（ボソッ）さっさと終らせるのと、おまけで性能チェックだな。動けない振りでもして遊ぶか」
「何をぶつぶつ言っていますの!?それに、疲れて動けないならこれで終わりですわ!!」
そう言って出ている４つのビットと持っているレーザー銃『スターライトＭｋⅢ』からレーザーで攻撃して来たが、『俺が完全に動けない状態で全部が撃てる』んなら完全にダメだね。
それに、こんな見え見えの『罠』にかかる時点で『馬鹿』でしかない。
俺はシールドを前面に展開し、そしてシールドを介して行う『アブゾーブシステム』を起動させた。
そしてブルー・ティアーズのレーザー攻撃はシールドにある装置が起動して吸収されてしまった。

この光景を見た戦っているレイナは驚愕し、ピット内の織斑先生達と観客席にいた全員が驚いていた。
「な、何ですって!?」
「うん。今度は一本で調べた方がいいかもな?いや～ありがとさん」
そう俺が言ってやるよ思い切り悔しそうな顔をしていたが、そんなものは関係ない。
何しろ俺からすれば思い切りいって楽しめるのだら面白くてたまらない。
おまけにレーザー兵器での吸収データを得れたのでいいのだが、俺が思ったよりも少ないが、シールドエネルギーが回復したのでまぁいいだろうが、これなら基本使用しないほうが機体運営上いいと判断した。
何しろあれだけのレーザー攻撃に対して、これでは変換用のエネルギー消費が多いため、一本程度なら逆に減ってしまう。
「そ、そんな、そんな能力があるなら何故最初から・・・」
「使うわけ無いだろ?結構色々と調整が難しいんでな、これ。それにだ、時間稼ぎはもういらないからな」
そう言って持っていた『フォトン・ライフル』を連射し、更に背部にあるコスモブースターも分離して攻撃に参加させた。
そのおかげもあいまってレイナが出していた四機のビットを破壊してやった。

流石の事態にレイナも驚いていたが、俺からすればこの程度なら余裕である。
「そ、そんな。な、何故・・・」
「馬鹿か？ただ単に『織斑の初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）の為の時間稼ぎ』だったんだよ。本来ならする気は無かったんだが、お前との戦いを速攻で終わらせてしまったら、刹那との戦闘になるが、完全で無い相手に刹那が勝っても面白くも無いからな」
「なっ!!」
そう言って俺はレイナに攻撃を加えていった。
レイナもまさか自分が『次の試合を万全にする』為にされているとは思わなかったらしいが、逆に自分がここまで窮地にたたされるとは思わなかったらしい。
レイナは残っている武装で俺を攻撃をしたのだが、手に持っていた銃は狙撃で銃口を攻撃されて破壊され、最後の手段としてミサイル攻撃をしたのだが、だが武装が残っていると読んでいた俺はコスモブースターとフォトン・ライフルで上手く破壊した。
武装が無くなったレイナは『インターセプター』という近接用のナイフを展開したのだが、初心者が使う武装の名前を言っての展開だったので、内心俺は馬鹿に出来た。
こいつが知っているクリスはどうだったかは知らないが、今のクリスは苦手な近接武装系でもちゃんと展開ができるからだ。

俺はフォトン・ライフルを収容し、近接用のビームサーベルも展開しないで徒手格闘で攻撃した。

すると、近接戦になってすぐの攻防でナイフを落とし、俺は追撃した。

何しろまだレイナのシールドエネルギーは残っている以上、バトルは継続中だからだ。

まぁその後と言えば俺の勝ちである。どうやら相手は自分の武装が全滅しており、唯一使える武装は自分が落としたナイフだけなので、俺が取りに行かないようにしながら牽制攻撃を仕掛け、最終的には向こうが『降伏宣言』をしたため試合は終ったのだ。

俺としては武装を破壊した時に俺の勝ちだと思ったのだが、俺の予想よりもエネルギーが残っていたのが誤算であった。

そして俺は面倒ながらAピットに帰って来たら、織斑と篠ノ之が俺のことを卑怯者呼ばわりしたので、呆れるしかなかった。

一応ISの展開を解除したのだが、面倒な事この上ない。

「馬鹿かお前等？試合終了のブザーがなっていないのに何で攻撃の手を止めなきゃいけないんだ？」

「ふざけるなよ!?どう考えても相手には戦う武器なんて無かったはずだ。それを攻撃したのはお前だろうが!!」
「そうだ!!秋斗の言うとおりだ。お前は卑怯者!!」
俺は流石にこいつらの頭がどんな物か一度みたいと思ったが、馬鹿らしいと思ってやった。
そして俺はここに来ていた織斑先生のほうに顔を向けた。
「織斑先生、こいつ等馬鹿ですか?試合終了のブザーが鳴らないと意味ないし、この戦いって『制限時間有りましたか?』」
俺がそう言うと、ため息をついて織斑と篠ノ之を黙らせた。
それでも文句を言おうとしたのだが、教師として一応黙らせたが、それでも文句を言いそうだったので、声を出した。
「お前等な、基本スポーツは全部試合開始と終了の合図があり、そして違反があれば審判が止めるのが当たり前だろ?それにだ、ＩＳには武器を収納していられる機能があるんだ。ＩＳバトルの場合、相手のシールドエネルギーを『０』にするか、相手が『降参』するまでどんな攻撃が来るのか分からないんだぞ?これで絶対に勝てると思って油断して負けましたなんて普通にあるんだ。お前らに俺は文句を言われる筋合いは無い。何しろ俺はルールに則っているからな」

「草薙の言うとおりだ。ＩＳバトルでは相手のエネルギーを『０』にするか、降参するまでが戦いだ。草薙のやり方が気に喰わないなら、それだけの腕を磨いておけ。それにしても、どこであれだけの技量を手に入れたんだ、草薙？」

「あぁ。ここの上級生で知り合いがいたので、そいつに訓練を頼みました。後、テスラ・ライヒが開発した『リアルファイター』のテストプレイヤーとしてもやりましたし、正式に出てからは休みの日にはプレイしてましたし、そっち方面の友人に頼んで結構遊びましたからね。新武器のテストプレイが原因で５日ほど家にも帰れないでやらされた事もありましたので。それに確かＩＳ学園の教師陣も製作に関与したとも聞いてますよ？」

俺がそう言うと織斑先生や山田先生は納得していた。

何しろ結構リアル思考で造られているこのゲームは、ＩＳ学園でも訓練用に取り入れようかとしている物であり、現状は大型躯体が必要だが、それでもいいと言えるほどの内容だったりもしたのだ。

序にであるが、現状のラストステージのＥＸボスが存在するのだが、実はこのボスは織斑先生のデータを使用したもので、戦いに行くには『ブレード一本でゲームをクリアする』と言うもので、そのステージ自体が結構ハードな上に、織斑先生の技量が問題で

現状クリアしたと言う話は一つも無い。

さらに、このゲームでは蒼天の騎士と黒衣の騎士がランダムで敵キャラで出るのだが、このキャラの場合は現れたら一度攻撃が飛んでくるのだが、それで耐えたり回避したりすれば勝手にステージから撤退するうえに、撤退させればクリア後に貰える強化パーツが多く貰える仕組みになっているため、撃墜を考えている人間はいたのだが、攻撃してからすぐ消えるが、貰える強化パーツが結構多いため誰も倒そう等と思っていないキャラでもある。

次は刹那の試合だが、余裕で勝ちそうだと思った。ちなみにであるが、俺は次の試合に出られないと言っておいた。

理由に関しては簡単で、レイナのレーザー攻撃を吸収した能力発動で調子が可笑しくなっている可能性があると進言し、それで参加を拒否したのだ。

これに関しては織斑先生も機体のトラブル関係なので了承してくれた。

第3．５話　和輝の心情と真耶の思い

俺は織斑先生に言って決勝戦は無理だと話した。

実際はおきていないのだが、レイナとの戦いで使用したエネルギー吸収システムが原因で、機体全体の攻撃・運用系システムが異常をきたしている為、決勝を行なうのは無理だと言っておいたのだ。

流石の織斑先生も使用している機体の異常では仕方ないと言って、俺の辞退を認めてくれた。

まぁ織斑や篠ノ之はぎゃあぎゃあわめいたが、俺としては面倒なのでピットから出て行った。

ちなみにであるが、自分の機体の整備・システム回復方面に関しては会社から教えてもらっていると嘘をつき、俺はピットから出て行く理由を言ったので、出て行っても織斑先生からは文句は言われなかった。

山田真耶　Ｓｉｄ

私は出て行った草薙君は整備室の場所を知らないだろうと思い、教えるために織斑先生に許可を貰って出て行った。
そしてピットから出てすぐに草薙君は見つかった。
何しろ草薙君は更衣室近くにある休憩所で缶コーヒーを飲みながら、壁にもたれかかっていたからだ。
私は整備室の場所を言う為に草薙君の近くに行こうとしたのだが、次の瞬間行くのを躊躇した。
それは草薙君が持っていた缶コーヒーの缶を握りつぶしたからだ。
それも専用の缶潰しを使わなければいけないほどに小さく圧縮していたのだ。
それも草薙君の手によって・・・ただ握り潰されただけでおきたのだから
私はそれを見て恐怖し、近くにある壁に身体を隠し、草薙君を見ていた。
「・・・マジでやばかったなぁ。あれ以上あそこにいたら『全員殺す』ところだったな」
独白なのだろうか、私は草薙君が呟いた言葉に恐怖した。
そして私はその時の草薙君の顔を見て、物凄く恐ろしく、恐怖した。
そのため出て行くのは恐怖で出て行けず、私はその場で動く事ができなかった。

山田真耶　Ｓｉｄ

俺は独り言を言った時に、偶然山田先生が隠れて俺を見ているのを知ったため、途中で演技の方に戻る事にした。
俺としては『演技をしていないこっち』が本当の顔と言えるからだ。
まぁ聞かれたかも知れないが、その時は山田先生の『心と身体を傷物』にして、言わせないようにしておこうかな？

白騎士事件で家族を失った俺は、記憶を催眠療法で消されたとはいえ、俺にとって地獄と言えた。
最初のＩＳである『白騎士』が起こしたＩＳの持っている強さが原因で、女性が有利になるような法律などが整備されている情況で、俺は両親の死んだ悪夢を何百回も見続けた。
記憶を取り戻した後、俺は『後悔』し続けた。
俺はこの世界の原作をまったく知らない。
どんな世界なのかも知らなければ、どんな事件等が起きたのかも知らない。

アメイジングエクシアや色々と能力を貰ったのに、俺は事件の時に自分の両親すら『守る』事も出来なかった。

元々俺は転生した時に金運関係の方面は最初から使えるようにしてくれたのだが、それ以外は原作が開始される時期が来るまで無理だと言われたのだ。

俺自身あの時はそれでもいいかと思っていた。

だが、何度も悪夢を見てしまったことが原因で記憶を取り戻した俺はそうではなかった。

何故あの時両親を助ける力が無かったのかと悔やみきれなかった。

それでも最初は原作が開始される時期が来るまで我慢しようと思っていた。

過去の記憶を持っている俺は、今もだが歴史関係を知る事が好きで、そのせいもあってか科学のよって生み出される『必要悪』とも言える部分を知っていたからだ。

だかこそ、白騎士事件に関しては最初は『あまりにも偶然が重なりすぎた事故』だと思っていた。

何しろ歴史を紐解いても新しい技術が出来たり運用しようとした場合、死者は少なからず出ている。

また歴史上その技術の運用が出来るようになった存在が出た後もだが、後々で発生した事故が原因で修正点等が存在し、そして今後同じような事故が無いように改善したりするため、最初は諦めるしかなかった。

『偶然等が重なった事故』である以上、仕方ないと諦めるしかなかったのだ。

だがしかし、俺はふとＩＳの生みの親である『篠ノ之束』の事を少し調べてみようと思い、彼女が在籍していた学校での態度等を調べると、『違和感』がおきたのだ。

彼女は人との付き合いはほとんどと言っていいほど無く、友人と言えるほどの存在は『たった一人』しかいないと分かったからだ。

これを知った俺は段々と嫌な思いに駆り立てられた。

そして調べていくうちに、俺が思っていた白騎士事件の全容のおおよその予測が出来てしまった。

製作者篠ノ之束による、世界を巻き込んだ自作自演によるＩＳの性能発表会

篠ノ之束が世間一般的な人と同じような交流等があったならば俺もここまで思わなかっただろう。

だがしかし、篠ノ之束の周りを調べたら調べるほど、俺の思っている最悪な事実が真実であるという証拠だけになっていった。

俺自身思っている答えが『違う』と思いたくて何度も何度も調べたのだ。

それもそうだろう。

何処の世界に自分の家族が『偶然による事故ではなく、ただ他者を見返す為だけの悪意に満ちた行為』であると知った瞬間、俺の怒りは爆発し、ＩＳを生み出した篠ノ之束への恨みと憎しみで心は埋め尽くされた。

そして同時に、俺の憎しみや怒りが神が言っていた『時期が来るまで使えないはずの能力』を全て開放させてしまった。

そう、俺が神に頼んだ念動力、そのなかの最高位存在であるサイコドライバーが持つ超絶的な能力である『アカシックレコードへの干渉』が発動し、俺は神がかけた封印を打ち壊したのだ。

まぁその後俺の目の前に神がやって来て俺に色々と文句を言ったが、俺はそれを全て無視した。憎しみと怒りに飲まれた俺の心は神の言葉など何の意味も無かったのだ。

その後神によって俺はちゃんとした時期が来るまでサイコドライバーとしての能力を封印された。

流石の俺も当初はキレたが、神が言うには怒りと憎しみに飲まれた今の俺がまた同じように『アカシックレコード』へと介入した場合、その思いが原因でこの世界で生きている全ての人間に害を及ぼすと言われたのだ。

そういわれた俺は仕方ないと諦め、封印をしてもらった。

何しろ今の俺のままでアカシックレコードへの干渉を何度も行なえば、俺と同じ苦しみを持つ人間を大量に生み出すと言われたのだ。

だからこそ俺は封印をしてもらったのだ。

こんな思いをするのは、もう俺だけで十分だと思っているからだ。

そして神自身からも、俺がちゃんと『正しい心』で念動力を操れるのであるならば、本当の意味でのサイコドライバーになれると言ってくれた。

人を救う事も、未来を守る事もできると教えてくれた。

ただし、俺の今回した無理な封印開放が原因で、この世界に『危険な異物』が混入されたと言われたので、その異物の処理をするようにも言われた。

俺も仕方ないと諦めると同時に、篠ノ之束とその関係者達への復讐を実行する事にした。

関係者の一部は法の名の下に裁くが、篠ノ之束に関しては法の名の下で裁いても絶対に逃げるだろうと思った俺は、彼女だけは『死』よりも残酷で、非道で、永遠の苦しみを与えてやると決めたのだ。

それを与えなければ俺のこの憎しみも怒りも消えはしないのだから。

同時に俺が調べた結果で言えば、篠ノ之束唯一の友人である『織斑千冬』は、あの白騎士の可能性が高いのだ。

何しろ白騎士事件で残っている白騎士の映像と、織斑千冬の今までの戦闘記録を見た限り、白騎士である可能性は９９％で合致するほどの品物なのだ。

そして篠ノ之束の自作自演とも言える白騎士事件に織斑千冬が加担した理由も分かった。

何しろ織斑千冬は白騎士事件前は、今『草薙刹那』となっている彼女の弟『織斑一夏』、そして『織斑秋斗』の２人の弟がいた。

両親もいない織斑千冬はアルバイト等で仕事をして姉妹３人で生活していたらしいが、それでも限度はあるだろう。

そう考えれば、白騎士事件を起こす理由は簡単である。

自分達姉妹３人の生活の安定である。

そう考えれば織斑千冬も俺にとっては罰すべき存在なのだ。

例え白騎士に彼女がならなかったとしても、そのさいは篠ノ之束本人が単独で白騎士事件を起こしたかも知れないのだ。

だがしかし、彼女は篠ノ之束に加担し、そしてあれだけの事件を起こし、今も本当の真実を知らないでのうのうと生きている。

ＩＳが競技として存在するようになり、そしてブリュンヒルデと周りから賞賛されて栄光を得たのだ。

ＩＳが競技として栄光と賞賛の光を受けたその影で、自分が『将来の夢』としていたスポーツ等が廃れてしまい、その結果命を落とし、自暴自棄になった人間を、俺は幻想郷で何人も見た。

テスラ・ライヒで金を儲けている時もだが、そういった悲しい人間を俺は何度見たかは分からない。

そしてあのピットにいた織斑千冬と織斑秋斗、そして最近の学校態度等を見ても何に

も感じないような自己中の篠ノ之箒。

幾ら部外者とも言える山田先生がいるとはいえ、俺も篠ノ之の発言で内心キレており、国際指名手配犯としての蒼天の騎士の時と違い、今の俺はＩＳの国際協定によるルールに則り、俺は違反はしていないのに関わらず、ルールもちゃんと理解していない篠ノ之の相手をしていれば、その点を指摘しようとしない織斑千冬にはキレてもいたのだ。

まぁ俺としてはその前に出られたので何とか大丈夫だろう。

だがしかし、さっきはとんでもない事を山田先生にしようとしたなぁと内心反省している。

それと同時に篠ノ之と織斑の両名に関しては関わりすぎるとこうなりそうだから、今後は気をつけよう。

流石に殺しはしないかもしれないが、半殺しの目にあわせそうなので、気をつけておかないと色々と精神的にヤバイ。

霊夢達と言う存在がいるから俺は今のままでいられる。

前は篠ノ之束と関係者である織斑千冬の二人の命は『殺してやる』と思っていたが、霊

夢達との交流で俺は法の名の下に『罰する』方向にしたのだから。

そして俺は一息ついてから山田先生の元に向かった。

当初山田先生に怖がられたのが仕方ないと思った。

「あぁ～もしかして、聞いてました？」

「・・は、はい」

小動物みたいに縮こまっている山田先生に、物凄く悪い事をしたと思いつつ、山田先生に謝罪しておいた。

「すみません。篠ノ之の言い分が物凄く腹がたっていましたし、そのせいで結構怒っていたもので。ルール違反しているわけでないのにあれですからね。怖がらせてすみません」

俺がそう言うと山田先生も少し怖がりながらも謝罪してくれた。

と言うかだ、山田先生に言われて初めてコーヒーの缶を握り潰している事に気付いたが、キレていた事が原因で気づいていなかったのだ。

山田先生には握力が本気だと強い為、普段はセーブしているのだが、イラついていて気付いていなかったと言っておいたら、一応納得はしてくれたので少し安心した。

まぁその後山田先生に整備室まで案内してもらい、俺はスタービルドストライクの調

整をしておいた。
山田先生は俺を整備室の場所までの案内した後、次の試合時間などの関係もあって途中でピットのほうに帰って行った。

山田真耶　Ｓｉｄ

草薙君が言っていた事が嘘だと知り、内心ホッとすると同時に、草薙君が心配になった。
何しろ自分があの時最初に見た時の草薙君の顔を思い出すと、恐怖と一緒に悲しそうに見えたからだ。
教師として自分がどこまで出来るのかは分からないが、それでも出来る範囲で草薙君の助けになろうと思った。
だがしかし、こんな自分の思いとは裏腹に、ちょっとしたミスが原因で草薙君と色々あるとはこの時は思いもしなかった。

第４話　秋斗のクラス代表決定と新たな波乱

刹那と秋斗との戦いであったが、あまりにも無様と言えるほどくだらない戦いであった。

俺が面倒だが時間稼ぎをし、秋斗の専用機である『白式』の力を１００％発揮できる状態にしたというのに、何とも馬鹿らしい程の戦いになっていた。

戦いに関しては刹那はダブルオーの武装であるＧＮソードⅡ・ソードモードの二本とＧＮシールド、そして近接格闘技術だけで、オーライザーが出来るまでの専用パッケージとしておいた『セブンズソード』のパッケージも使用しないで対処し、最後は近接格闘だけで終らせた。

おまけに刹那は一度もＧＮソードをガンモードにしていないのだが、それで勝ったので俺からすればあまりにも馬鹿らしい程の戦いであった。

刹那は秋斗の攻撃に関しては直撃は一度もしておらず、サイコフレームとの運用のおかげでなのか、機動性と反応速度が何倍も速いためなのか、秋斗の攻撃は一度たりとも

当たらなかった。

まぁ機体の運動性能と言う点ではそこら辺の第3世代シリーズの機体で敵うはずもないし、例え篠ノ之束が介入して現状では架空の空論上の品物である次世代の第４世代型ＩＳであっても、攻撃・運動性能に関しては第４世代でも勝てないほどの品物なうえに、乗っている操縦者である刹那の戦闘経験を考えれば当たり前なのかもしれない。

おまけに言って悪いが、戦いに関してはあまりにもぶざま過ぎる内容だった。

戦闘開始の合図と一緒に戦いが始まったのだが、秋斗は物凄くぶざま過ぎた。

白式の攻撃手段は『雪片弐型』という刀型の近接格闘武器1本らしいが、それ以外の武装を持ってはいなかった。

そして最初から白式は単一能力（ワンオフ・アビリティー）が発動できるタイプらしいのだが、俺は持っている武器の銘が『雪片』の名を関しているので、使用できる単一能力は織斑千冬を世界一にした能力である『零落白夜（れいらくびゃくや）』である可能性が高いと思った。

だがしかし、そんな物は『今』の刹那には無関係な品物であった。

何しろどんなに秋斗が攻撃をしてきても、ＧＮソードの2振りを上手く扱って攻撃を受け流し、同時にＧＮシールドや足などを使って攻撃を防ぎ、隙を見て攻撃して逆に秋斗の雪片を手から落とさせた。

その後はあまりにも簡単であった。

秋斗に落ちた雪片を取りにいかせないようにし、そのまま何度もソードを上手く使って攻撃したり、ある時は蹴りで対処し、最終的には刹那も流石に不憫に思ったのかＧＮソードⅡを収納し、無手の近接格闘で戦っていたのだが、余裕に刹那の方が強かった。

何しろ近接系格闘に関しても刹那は幻想郷の面々のおかげでそれなりに強い。

それもあってか無手で攻撃しているにもワザと雪片を取り戻させて秋斗と戦った刹那であったが、普通に無手の状態で相手をした刹那には意味が無く、最終的には零落白夜の持っているデメリットによって大幅にシールドエネルギーが減っていた為、雪片を叩き落した後に正拳突き一発で秋斗は負けた。

刹那はシールドエネルギーに関しては相手からの直撃されるような攻撃等は一発ももらっていないので、結果で言えば消費したのはスラスター等で使用した分だけである。

その後次の戦い云々になったのだが、刹那は機体のエンジンの調子が悪いと言う事で次の戦いを辞退した。

刹那も俺も機体関係上のトラブルが理由で辞退し、俺達としては最初からこのつもりだったので楽なものである。

その後秋斗はレイナと戦ったのだが、レイナとの戦いに関してはレイナが刹那との戦

いを理由に秋斗を小馬鹿にして戦っていたのだが、その傲慢さが原因でレイナは敗北した。

まぁ俺や刹那に関してはレイナのした所業が原因で、レイナがどうなろうと関係ない。

クラス代表を決める全ての戦いが終わり、そして次の日のホームルームで1組のクラス代表は『織斑秋斗』に決まった。

「俺は負けたんですけど・・・」

「俺と刹那は色々と機体調整等が原因で、しかもおまけにオーバーホールする位整備をしなきゃいけない感じになってんだよ。そんな機体を使ってるんじゃクラス代表として戦いになりました、その後オーバーホールが理由で戦えませんになったら意味が無いだろ?おまけに俺の場合はレーザーを吸収したさいのシステムのバクが原因で使えない状態になったから、システムが使えないだけだがな」

「あぁ。俺の機体もエンジンの調子が悪くなったせいで兄さんと同じくらいの整備が必要なんで、同じ理由で機体が調子が悪くなって優勝できませんでしたじゃクラスの皆に悪いからな」

俺と刹那がそう言うと、クラスの全員は納得してくれた。

序に言ってレイナがクラス代表を辞退したのは、俺が脅迫したからだ。

実はクラス代表決定戦が終わった後、俺はレイナと接触し、レイナにクラス代表を辞退してもらうように脅迫した。

当初レイナは自分がクラス代表になると言ったのだが、俺はレイナがクラスの皆に対して吐いた暴言の入ったレコーダーをイギリス本国に送ると言ったのだ。

流石のレイナもそれが本国にバレたら自分の身が危険になるだけではなく、イギリスに帰っても自分の居場所が無い事に悔しがっていたが、俺は別のことを言っておいた。

「まぁ君は逆に織斑に近づいて彼を攻略したらいいじゃないかな？」

「何ですって？あんな男を攻略して何の価値がありますの？」

「価値ならあるぜ？何しろ世界で始めてＩＳを動かした男性操縦者だ。しかも彼と恋仲関係になり、そして彼と言う存在を得られれば、君はブリュンヒルデと謳われている織斑千冬も手に入れられるし、彼の遺伝子も得られる。そうなればイギリス政府は他の国を差し置いてＩＳでの軍事力は更に高まる可能性はあるし、ＩＳの更なる発展も可能なはずだ。もしそうなれば、君はそれだけの貢献をしたと言う事で、名実共にいい思いをすると思うんだけどね？」

俺がそう言うとレイナは俺が言った事に対しての可能性を考え、少し揺れ動いていた感じだったので、俺は最後の一押しをした。

「で、ですがそれだけでは・・・」

「他にもあるぜ？クラス代表にした彼のＩＳ技術向上の為に近づいて色々とすれば、君は初の男性操縦者のＩＳ運用データが本国に送れる。おまけにそのデータだけでも君は国家に貢献したと言う事で色々と恩情もはかってもらえるだろう。おまけにクラス代表になった彼が凄い成績を出せばどうなるか、君にだって分かるはずだ？序に言えば彼が使用している白式のデータも得られるんだ？これほどお買い得な物はないだろう」

俺がそう言うとレイナは俺の言った案に賛同した。

俺も彼女が賛同したと同時に録音していたデータを消しておいたので、彼女はこれで憂いは無くなったと思っているだろう。

実際は俺のが消えても刹那のが存在していたのだが、そちらも消しておいた。

まぁ実際問題、織斑秋斗という男性操縦者のＩＳの運用データは貴重で、何処の国も喉から手が出るほど欲しがっている品物だ。

例えそれがテスラ・ライヒが開発したゲームのデータでもいいだろうが、所詮ゲームはゲームなのだ。

本物のＩＳを使用してのデータには敵わないし、おまけに織斑千冬を世界最強と謳わしている単一能力のデータを得られ、おまけに秋斗を自分の国の人間として迎え入れられたら、レイナはイギリスでも多大な功績の人間として賞賛されるのだろう。

そう言った事を考えたレイナは俺の案に簡単に乗ってくれたのだ。
実際は彼女に与えるのは人々からの歓喜の声ではなく、罵倒と絶望へと導く俺の策とも知らないで・・・

その後俺達は訓練で織斑千冬の指示に従いつつ、俺と刹那は心にドロドロとした怨みの気持ちを隠しながら、俺達はＩＳ学園にいる恋人達のおかげで怨みと憎しみをださなくてすんだと言えた。
特にクリスは自分の地位と家族との思い出、そして俺が教えた真実を知ったクリスの、いや、セシリアの両親の思いを知った彼女にとって、レイナがこの場所にいると言う事は堪らないものであった。
俺と刹那の二人、そしてクリスを入れた俺達は、ＩＳ学園での生活に関しては嫌な思いも持っているものの、お互いに話し合ったりしながら何とか耐えていた。
だがしかし、新たな問題が発生してしまった。
何と刹那が一夏として生きていた時に出会った女性である『凰鈴音（ファン・リンイン）、通称《鈴（りん）》』が転入して来た事が原因で、俺達は新たな波乱に巻き込まれたのだ。
まぁ実際波乱に巻き込まれたのは俺ではなく、刹那の方であるが、まぁいいだろう。

第５話　セカンド幼馴染の鈴登場。そしてクラス対抗戦へ

それは昨日の事だった。

俺と刹那、そしてクリス・シャルロット・刀奈（周りにバレたら面倒なので楯無と呼んでいるが）・簪の６人でＩＳを使用しての訓練を終えた俺達は、更衣室で着替えを終えて部屋に帰ろうとしていた。

その際俺達は一人の女の子に声をかけられた。

その女の子はこのＩＳ学園に入学できると言う子は高校生なのであろうが、その手の人間ならお持ち帰りしそうな感じの女の子であった。

レミリアやフラン、諏訪子さんと同じくらいの背丈と思う女の子は俺達の、正式には刹那の顔を見て唖然としていた。

俺は刹那の方に顔を向けたが、刹那は『？』と言う感じの顔になっていた。

「刹那、お前のこ『・・・一夏、だよね？』っ」

小さい声であったが、あまり誰も知られていないその名前を吐いた女の子に殺気を出して睨みを利かせ、その子も俺の殺気と睨みに反応して、恐怖で口を閉じた。

まぁ怖がらせた感じになっているが、そんな事は今はどうでもよかった。
流石にやり過ぎと刀奈に叱られたが、この場合は仕方ない。
何しろ刹那の『本当の名前』を知っている人間がこの場にいる以上、俺からすれば後々どうなろうと関係ない。
だがしかし、今『織斑一夏』が世間に生きていると分かると色々と面倒なのだ。
だからこそ、この女の子の口を封じようかと思ったのだ。
「・・・もしかして、鈴か？」
刹那がそう呟くように言ったので、俺達は刹那のほうに顔を向けた。
この女の子もその言葉を聞いて目に涙を浮かべて刹那に抱きついた。
クリスもシャルロットもその姿にムカッとしていたが、何か引き剥がすのが難しいなぁと言う感じであった。
何しろ言っては悪いが小動物が懐いている感じに近いので、引き剥がすのが躊躇されるほどであったからだ。

その後俺達はこの少女『凰鈴音（ファン・リンイン）』、通称鈴（りん）から事情を聞いた。
とは言っても、彼女が編入生であると言う事なのでその手続きが先に必要になったの

だ。

その後刹那の部屋に移動し、鈴の話を聞いた。

鈴は刹那が織斑一夏として生きていた時、篠ノ之箒が政府の重要人物保護プログラムが原因でいなくなった後に鈴は編入してきたらしい。

だがしかし、途中から編入した事もあり、おまけに中国人と言うことで結構周りから虐められていたらしい。

その際に助けていたのが刹那だったのだが、秋斗が結構邪魔して来たらしい。

まるで鈴は『自分の物みたいな感じで扱っていた』らしく、おまけに結構刹那を虐めているらしく、鈴も助けたかったらしいのだが、周りの女子が原因で刹那を助けれなかったらしい。

だがしかし、一番最初に助けてくれて刹那に対して恋をしたらしい。

「なるほどな。だがしかし、あいつその時からだったのか」

「私が知ってる限りでもクラスの女子だけじゃなくて、上級生も巻き込んでたわね。その中でも私が特に気に入っていたのか、色々と周りに便宜させていたのも知ってるわ。おまけにまるで私だけは他の子と違う扱いだったのが分かるわ」

「それは可笑しいのでは?・鈴さんは急に来たのに、何故そのような扱いを?・」

「それに関しては同意するね。でも、何で鈴だけそんな扱いだったのかな？」
クリスもシャルロットも鈴に対しての扱いが不思議であった。
俺はそれを聞いてもしもと思った。
だがしかし、俺と同じ『転生者』という可能性も考えたが、その点を除いた可能性も視野に入れた。
「もしかして秋斗って『世界中の女は自分の物』みたいな感じの奴なのかもしれないな」
「もしそうだと面倒だね」
俺が言った事に刀奈も同意した。
何しろそう言う考えの人間と言うのは女尊男卑思想の女性達に結構多く、そんな考えを持っている男がいる時点であれだが、それでも面倒でしかない。
俺と刀奈、簪の三人は鈴の事情を知った後、俺は鈴に怯えさせた事に謝罪をし、その後刹那と刹那の彼女でもあるクリスとシャルロットを残し、後は刹那と彼女達だけにして話し合いをさせる事にした。

刹那　Ｓｉｄ

俺はクリスとシャルロット、そして鈴の４人で今までの事を話した。
鈴は俺がクリスとシャルロット、そして幻想郷でいる俺の彼女達のことも話した。

鈴も幻想郷の事を聞いて驚いていたが、その中で一番驚いていたのは、中学時代俺と鈴と仲良くなった『五反田弾』の事だった。

「何で弾がそんな所に行ってんのよ!!」

鈴の言う事は最もだった。

俺も弾と一緒にいられた時間は短かったが、それでも弾がどれだけ『良い奴』だったかは知っていた。

だがしかし、そんな弾が幻想郷に来てしまった理由、それは

「弾の妹の蘭って子、知ってるか？」

「蘭の事は知ってるけど、何で蘭が・・・」

鈴は不思議そうにしていたが、事情を知っている俺達のほうは言い難かったが、鈴にはちゃんと言わなければいけなかった。

俺は一つ息をついてから鈴のほうに顔を向けて話す事にした。

「その蘭が原因で、弾は家から叩き出されたんだ。しかも、その大元の原因が秋斗なんだ」

流石に俺が言った事に鈴も驚いていたが、俺が事情を説明すると鈴は悲しい顔になった。

実は弾が幻想郷に来たのはある意味悲惨な理由だった。
とは言っても、これは全て弾本人から聞いた事なのだが、それを聞いた俺達ですら怒りがわいたほどであった。

第2回モンド・グロッソの決勝戦で俺が死亡したという報道がされ、弾や鈴は中学2年生へと進級した。
だが、その時には鈴は俺がいなくなった事で意気消沈しており、更に鈴の家庭も色々と問題が発生し、その結果鈴は中国に帰った後で、残された弾は、周りが原因で悲惨とも言える状況になってしまったらしい。
それまで勝手に弾の親友を名乗っていた秋斗が、弾の妹の蘭に色々とちょっかいをかけていたらしく、その当時の蘭は秋斗のことが好きな状態であったらしい。
だがしかし、弾は妹の蘭が秋斗のような存在と一緒になろうとする事を何度も止めさせようとしたらしいのだが、蘭は兄である弾の言う事を聞き入れず、最終的には祖父を使って自分の好きなようにしたらしい。
流石の弾も祖父には逆らえず、これ以上は仕方ないと諦めたが、それでも色々と気をつけていたらしい。

だがしかし、これが弾におきる悲劇の始まりでもあった。

それから弾は家族の中でも異端のような扱いになってきたらしい。

まるで病気が蔓延するように、厳しい祖父も、そして父親も母親も弾の言う事を信じず、稀に来て蘭と一緒に話をする秋斗の話を信用し、弾はどんな事になっても、最終的には自分だけが悲惨な目にだけしか会わなくなったらしい。

ここまで来ると流石の弾も原因が秋斗であると思っても、証拠があるわけでもなく、それでもそうだと信じて秋斗に詰め寄ったのだが、その時には秋斗はクラスの全員と言うよりも、学校の生徒全員を味方につけ、最終的には弾は学校の教師からも弾の言い分は通らない状況下に陥り、そして家族から勘当されたのだ。

当初は弾も言うだけで大丈夫だと思っていたのだが、弾は家にも入れてもらえなかった。

「そんな・・・」

「それだけじゃないらしい。そんな状態になった弾が何度も何度も家に入れるように戸を叩いていたら、警察がやって来たらしんだ。けど、その時対応したのは弾の父親だったらしいんだけど・・・」

「・・・まさか」

「あぁ。弾は父親に見捨てられたんだ。正式には『この子は家の子供じゃありません』って言って、弾を・・・見捨てたんだ」

鈴も俺のその言葉を聞いて唖然としていた。俺自身も当時は色々とあって弾の家族には会った事は無かった。

当時の俺は周りから『織斑千冬の弟』・『織斑秋斗の兄』と言う面でしか周りから見てもらえず、そのせいでテストの成績は絶対に満点で無ければいけなく、全ての物で最高のものでなければ周りは認めてくれなかった。

『千冬様の面汚し』・『秋斗君の愚兄』・『出来損ない』と、当時の俺に対しての誹謗中傷は酷かった。

俺自身色々と努力して頑張ったのだが、誰もそれを認めてはくれなかった。

どんなに俺も血反吐を吐くほど努力して頑張っても、周りの人達は『全て当たり前』と言う感じの評価だけで、誰もちゃんとした評価をしてはくれなかった。

それは家族でもある千冬姉すら、俺がしていた努力を認めてはくれなかったほどであった。

おまけに秋斗が周りを使って自分を虐めていることも、うすうすは気付いてはいた。

だがしかし、あの当時の俺は『家族である秋斗がそんな事をする訳無い』と、信じていたかったのかも知れない。

千冬姉に関しても『大切な家族を護る』と言ってくれた言葉を信じていたかったのだ。
だがしかし、俺は千冬姉にとっての『大切な家族』で無い事が、あの時に証明された。
その事実を知った時、俺の心は粉々に砕けた。
今までしてきた血反吐を吐くほどしてきた努力も、大切な家族であると信じてきた思いも、他人からすれば下らないと思うかもしれない行為が原因で、俺は絶望の淵に叩き込まれたのだ。

そして今。

俺は幸せであると言えた。俺の事を引き取ってくれた和輝、そして幻想郷でいる人々。
そして同時に今の俺に取って大切な人達である早苗・諏訪子さん・加奈子さん・文さん・椛さん、そしてクリスとシャルロット。
俺は鈴の体を抱きしめ、そして俺と一緒に生きないかと言った。
鈴も当初はどうしようかと迷っていたが、俺はすぐに答えを出さなくてもいいと言って、答えを保留にしてもらった。
鈴にとってこの世界には『大切な家族』がいるのだ。

その家族を捨てると言うのは、物凄く難しいと俺でも分かっているからだ。
鈴も俺の言った事を理解してくれ、時間をかけて答えを出すと言ってくれた。

そして鈴は2組への編入になって日数が経ち、クラス対抗戦の日が近づいた。
俺達は鈴のほうの協力をするわけにはいかないので、たまに秋斗のほうの協力をする程度にし、秋斗に関しては等とレイナの二人に任せた。
そしてクラス対抗戦の初日。
第一回戦は鈴と秋斗の戦いであったが、事態は大きく変化した。
この世界にいる超が付くはた迷惑ウサギの介入によって・・・

第５．５話　秋斗の思いと能力（ちから）、蘭の思いと迷い

秋斗　Ｓｉｄ

俺としては今の状況は微妙に腹のたつ状況である。

俺の知っている原作と違い、ブルー・ティアーズの操縦者が『セシリア・オルコット』ではなく、『レイナ・バーン』と言うのに変わっていたのに驚いたし、原作では男性操縦者は一夏だけだったのだが、この世界では俺も入れて３人いた。

だがしかし、一夏に関しては死亡したはずなので、現状は俺以外はＩＳを操縦できないと思っていた。

それでも現状俺のムカついているのはそこではない。

俺がムカついているのは原作での一夏の専用機である白式を得たと言うのに、結果としては俺にとっては『最悪』である。

レイナに関しては最初の俺を戦いが原因もあってか、舐めてくれていたのもあって俺は勝てた。

だがしかし、それ以外を除けば俺は勝ったとは言えない。

刹那とか言う野郎に関しては完全に俺を圧倒し、止めに関しては空手なのの格闘武術において基本中の基本でもある『正拳突き』であったし、もう一人の男である和輝とか言う奴に関しては『機体の不具合』による不戦勝である。

だがしかし、実際戦った場合今の俺の戦闘形態を考えれば難しいと言えるほどだ。

今の現状の白式では近接戦闘以外は不可能だし、おまけに武装に関しては『雪片弐型』以外の武装は存在しない。

二次移行したら中・遠距離の攻撃も出来るのだが、現状ではそういった事は出来ない。

俺は中・遠距離の攻撃をしたくても、白式の持つ単一能力である『零落白夜』の理由で空きが無く、他の武装は一切入れる事ができない。

中・遠距離戦闘をしたいなら最初から銃火器を持って行動する以外方法が無い。

まぁタッグ戦なら相棒となる存在に頼んで銃火器を持って渡して貰うしかないが、今まで銃火器系列を一度も扱った事の無い俺にとっては難しいと言える。

これに関しては周りがやっていたテスラ・ライヒのゲームをしておけばと思ってしまったほどだ。

今思えば俺自身周りが色々と言っていたが、たかがＩＳの運用ができるだけのゲームでしかないそんな物に興味を持たなかったのは痛かったと言えた。

とは言っても、ゲームの躯体の関係上中・大型ゲーム店しかなかったし、１ゲーム３００円と高めだったのもあり、俺自身の小遣いの関係上難しかったので仕方ないだろう。

俺からすればゲームなんてする時間があるのなら、原作で一夏に恋をしていた女共を喰らって遊ぶ方が面白いからだ。

実際、中学時代には寝取りもいれれば結構な数の女を喰らってやった。

それこそ教師も入るが、見た目が綺麗で可愛いのばかりを選んでやったが、中年の婆なんぞ論外である。

まぁ稀に男性教師でも可愛い妹がいたりしたので、それを理由にして近づいたのもいたがな。

俺が神から貰った特典の一つとして『催眠眼（さいみんがん）』。

これは俺が対象とした存在に対して催眠術にかけられると言うものである。

とは言っても、使用ができるようになったのは小学校を卒業してからだったのがあれだが。

この特典を使用する際も俺自身が催眠眼のＯＮとＯＦＦが出来、そして今まで俺は対象を催眠状態にして来た。

とは言っても、神から言われたのだが『催眠眼の効果を受けない人間もいる』と言われているが、それでもいいかと思っている。
対象者にした中には俺の催眠眼に効かなかった奴もいたが、それが神が言っていたタイプの人間なのだろう。
だがしかし、小学校では千冬姉の弟と言う事で色々と便宜を図ってくれた人間が多かったので良かったが、中学校ではあまりいなかったので少し腹がたったが。

だがしかし、大半は俺の催眠眼での使用で色々と楽しめているのでいいだろう。
レイナは俺に訓練をする理由で一緒に行動するので、そのうちに俺に肉体を捧げるようにしてくる存在になるようにしてやる。
いきなりからやり過ぎると後々面倒なことに成り下がるのを、弾の家族が原因で知ってしまったからだ。
箒に関しては開眼しなかった事が原因で今までしていなかったのであれであったが、だがしかし、そんな心配も必要なかった。
何しろ箒の奴は簡単に俺の暗示にかかるほど精神面が簡単であった。
流石の俺も久々に箒と再会し、そして原作の一夏と同じように寮の部屋でバスタオル一枚の状況であった時には驚いたが、原作の一夏のように木刀でボコボコにされるのも

嫌だったので、催眠眼で操ったのだ。
だがしかし、俺が呆気にとられるほど簡単に催眠にかかり、俺がシャレで箒にバスタオルを取って裸を見せろと言ったら、顔を赤くしながらも平気でバスタオルを取って裸を見せたほどだ。
これには流石の俺も驚いたが、同時にあまりにも馬鹿だと思うほど簡単な女と思った。
俺自身ここまで簡単な女だとは思わなかったが、それでも楽でもいいかと思ったのも事実であった。
そして俺は箒の身体をたっぷりと楽しませてもらい、箒に関しては今や俺の思い道理になる人形に近いと言える。
そして弾の家族であるが、俺が原因で家族関係が壊れたと言えた。
だがしかし、それも俺も好きでした訳ではないのだが、それでもまぁいいだろうと思った。
何しろ俺が欲しかったのは弾の妹である『五反田弾の妹』である『五反田蘭』が欲しかっただけで、弾の家族がどうなろうと最初からどうでもよかったので、弾の家族が壊れてしまった上に、弾がいなくなってしまったが、それでもいいだろうと思った。
何しろ俺は最初から原作で一夏に恋をしていた五反田蘭を手に入れたかっただけで、

おまけに蘭のいる学校は中高一貫の『有名私立女子校《聖マリアンヌ女学院》』で、可愛い女も大量にいるだろう。

蘭を得ておけば、俺はＩＳ学園にいる女子と蘭の学校の女子も手に入るので、結構楽しめるのだ。

俺からすれば姉である織斑千冬のような熟女に近いような女は欲しがりたくはないが、姉の千冬には俺が何をしていても『知らないようにしておいたので』、俺としては結構色々出来るのだ。

現状俺が欲しいのはＩＳの生みの親である『篠ノ之束』である。

まぁ臨海学校の時に来る予定なので、そのときに俺に会いに来るように暗示をかけておいて、そしてその身体を楽しませてもらおう。

しかも今は鈴も来る時期に入っているし、もう少ししたらシャルロットとラウラもやって来る。

その前に４組にいる簪と会うのもいいが、彼女が利用しているのは整備室であろうが、念のために情報を仕入れておいた方がいいだろう。

俺はそう思いながらＩＳ学園で箒と一緒といる部屋の中で考えていた。

箒に関しては俺が色々と他の女の事を考えている間も、俺がかけた暗示で色々と尽くしていたので、いい物であるが・・・

秋斗　Ｓｉｄ

蘭　Ｓｉｄ

家の中がおかしくなって来た。

そう感じてきたのは何時からだったのだろうか？と考えると、お兄が出て行ってからだと思ってきた。

お兄を勘当して、お父さんが警察に知らない人扱いして数日がたったある日、何時も来ている常連のお客さんに言われたのだ。

『味が落ちている』

最初はただの間違いであろうと思った言葉であったが、それは段々と大きくなってきていた。

常連であった人達は少しずつだが店には入って来なくなって行き、新規のお客さんもあまり来なくなっていた。

そして同時にお父さんとお爺ちゃんの口喧嘩は凄まじい物に成り下がっていた。

お爺ちゃんもお兄の勘当に関しても言い過ぎた感じがあったらしいのだが、お父さん

はそれを勝手に警察まで巻き込んでしまった際に赤の他人扱いした事が原因で、家族の間の軋みは大きくなっていっていた。

私は学校がある日は生徒会長としての仕事もあるので結構遅くなってしまう日が多いのだが、帰ってきた時には口喧嘩は恐ろしく、お母さんも最初は止めようとしたが、今では放置している程の状況に成り下がっていた。

お兄はあの日以来、学校どころか警察の人に捜索願を出してもらったものの見つからなかった。

そして先日、警察に捜索願を出して1年半の期間であったが、捜索が打ち切りになったと家でよくご飯を食べてくれる警察関係の人が教えてくれた。

流石に私達も驚いて引き続いて捜索をしてもらうように頼んだのだが、彼の上の人間が捜索の打ち切りを決定したうえに、これ以上の捜索をした人間は誰であろうと懲戒免職処分になると言う事で、捜索はしないと教えられた。

その人から言われた事に私達家族は唖然としたものの、訳を聞いたら最悪であった。

『ＩＳが出来て、女尊男卑の時代になったから』

これまで私はＩＳが出来たことは素晴らしいと思っていた。

同時に憧れの秋斗さんがＩＳを動かした事で、私も無料の適性検査で調べたら『Ａ』と高ランクであったので喜んだ。

そして私も秋斗さんの後輩になってＩＳを教えてもらおうとも思った。

だがしかし、現実はそんなに甘くは無かった。

今まで確かに自分の周りで女尊男卑の思考に染まった人間は見ては来ていた。

だがしかし、それは学校の中だけのものだと思っていた私にとって、言われた事は最悪の一言であった。

彼の上司はＩＳが出来た事で一気に昇進したエリートらしいのだが、事件関係者の中に男性がいれば平気でその人を逮捕するように命令し、そして尋問と言う名の脅迫して事件を早期解決へと導いて来たらしいのだが、その全てが冤罪であると言えるらしい。

何しろ証拠等を調べて見ても、どう考えても別の人間が犯人の可能性が濃厚な事件でも、関係者の中に男性がいて、その中で一番可能性の高そうな男を使っていると言われたのだ。

流石の私達一般人が聞いてもおかしいと言えるほどの事案なので上に文句を言えばいいと言ったら、彼女の親は政界の大物で、しかも警察官僚にまで顔の効く人間であるらしく、その彼女に対して何かをしようとした瞬間、自分の首どころか家族全体に迷惑がかかると言われたのだ。

私達は何も言えないまま、その人を見送った。
後日お兄の遺体も何も無いのに『死亡した事にしろ』という命令文が私達の家に届き、当初は私達もしたくなくて無視したのだが、その警察の人が来て私達を脅迫し、私達は泣く泣くお兄の『葬儀』をする羽目になったのだ。
実際はしたくも無かったのに、私達家族はしなければいけないようになってしまったのだ。

そして私はこれから先どうしようと思ってしまった。
秋斗さんの元に言ってＩＳの勉強を教えてもらおうかと思っているのと同時に、今のこの家の状況では、どうなるのかわからない。
一体どうすればいいのかと、毎日自問自答する日々を送っているのだ。
そしてもう一つ、お兄が生きているのかどうか、それだけが心配であった。

第６話　弾の決意と、謎の予感

鈴が編入してきて数日が経ち、クラス対抗戦の日になった。

クラス代表でもある秋斗に関しては、篠ノ之とレイナの二人がみっちりと特訓し、それなりに使える程度には仕上がっているが、それでも代表候補生と戦うのであれば、全然といっていいほどできてはいなかった。

俺や刹那もたまにアリーナの使用許可申請が原因で秋斗等と一緒に模擬戦をする時があるのだが、俺は完全に言って悪いが元々の性能に大幅なリミッターをかけてやっているのだが、秋斗の武装が近距離用の『雪片弐型』以外の武装が無いので、こっちは結構楽に倒せている。

刹那に関しても同様で、リミッターをかけている状態で戦っているのだが、近接格闘戦闘においては俺や刹那のほうに部があるので、全然といっていいほど俺達の敵ではなかったりする。

ちなみにであるが、篠ノ之に至ってはある意味イノシシ武者に近いので秋斗よりも数段楽な上に、レイナに関しては秋斗よりか少し面倒な感じであるが、それを除けば楽に倒せるクラスの腕前でしかない。

何しろ俺達の戦闘経験に関しては幻想郷での弾幕ごっこの経験や、戦場での交戦経験、そして幻想郷に来てしまった元軍人などの人間達が原因なのだ。
実は最後の方が俺や刹那にとってはいい経験になっている部分があるのだ。
何しろ男尊女卑が原因で軍や警察を辞めさせられたが、それ以外では結構なくらい前線でいた人間が多いのだ。
そのため俺や刹那も訓練をつけてもらったりしたのだが、未だに模擬戦では勝利を取れないのだ。
模擬戦とはいえ勝つ事が出来ないのは悔しいが、向こうは俺達よりも戦闘経験等が豊富なので仕方ないだろう。
ちなみにであるが、刀奈や簪も一緒に訓練をしたりしているのだが、刀奈も簪も勝てないほどなのだ。
クリスやシャルロットも同じようにしているが、誰も勝っていないのであれであるが・・・
そしてクラス対抗戦の日が近づいてきたのだが、俺と刹那は基本鈴と話をする程度でいた。
何しろ鈴には最初からあの秋斗をボコボコにして貰おうと思っており、そのため秋斗

が使用している『白式』の弱点でもある近接格闘武装である『雪片弐型』以外の武装が無い事を教えておいた。

同時に秋斗が現状織斑千冬から学んでいるであろう技『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』を教えておいた。

鈴も俺達から掲示された情報だけで対処可能だとなり、俺はそれで話はあまりせず、後は刹那に任せておいた。

まぁ刹那に関してはクリスやシャルロットは鈴も新たに入ったことが原因で、３人から結構何か言われているらしいが、俺には関係ないので放置しておいた。

俺自身ただでさえ自分のでさえ手一杯な修羅場関係に関わりあいたくないのだ。

クラス対抗戦の日程も決まり、俺達は秋斗が誰と戦うのかと思ってトーナメントの日程表をみて見ると、そこには驚きの答えが掲載されていた。

『第一試合　１年１組　織斑秋斗　ＶＳ　１年２組　鳳鈴音』

となっていたのだ。

流石のこれに俺達も驚いたが、秋斗はまるで当たり前と言う風な感じで見ていた。

そう感じたのは俺と刹那だけで、後で聞いたら他の面々はそういう風な感じは受けなかったらしい。

俺としては最近の刹那の感じが俺としてはヤバイ感じになってきたと言えた。
刹那に関しては勘というか、そういった部分のがあまりにもすごい事になっている。
更には空間把握能力もだんだんと高くなっている為、前に永琳先生や刹那にも言ったのだが、刹那は『ニュータイプ』への進化もしていたのだ。
俺自身当初は分からなかったのだが、永琳先生の診察結果を考えた結果であったのだが、俺もこれには驚かされた。
流石の俺もこの事実を知った時には、ニュータイプ能力持ちのイノベイターって、ドンだけだよと思いつつも、これではあと少ししたら『ダブルオーが使い物にならない』クラスになるまでの時間が思ったよりも短いと思ってきた。
一応であるが、クラス対抗戦の前にダブルオーを最強の存在へ変貌させる『オーライザー』が完成したので、今刹那の機体は『ダブルオーライザー』に変化しているが、それでも結構短い間かもしれないと思ってきた。
まぁダブルオーライザーの運用データをとるさい、ダブルオーライザーの最強の技でもある『ライザーソード』に関しては、俺がＩＳ学園に入学する２年ほど前に能力を使って開発した最強にして最低の次元転移システム『システムＸＡＮ（ザン）』、通称『ＸＡＮディメンジョン』や『次元斬』という名前をもつ空間を移動できるシステムを使用し

てアステロイドベルトで色々と運用データをとっておいた。

何故俺が『システムＸＡＮ』を作ったのかと言うと、元々俺自身刹那と出会い、そして刹那の思いに応える為の機体として『ダブルオー』を選んだのだが、同時に俺が憎しみの心で能力を開放したことが原因で『危険な存在』がこの世界に来ていると聞いたので、そのための対処として何処にでも移動できるようにするために『システムＸＡＮ』を作ったのだ。

序に運用実験によっては地球ですると後々面倒な物もあったのも原因で、広大な宇宙空間で運用データをとろうとも思っていたからだ。

同時に刹那の機体は『刹那の思いに答える機体』であるのに対し、俺のは最終的には『対無次元侵入路用超広域殲滅型』と、スーパーロボット大戦ＯＧ等で登場したＳＲＸ計画の最終目的の機体でもあった『バンプレイオス』のような機体を目指しているのだ。

とはいっても、使用する機体がＩＳサイズな上に、機体にシステムＸＡＮを搭載し、そのうえに攻撃や移動等のエネルギー関係もあるので結構難しいと言えるのだ。

何しろ俺はＯＧシリーズで存在した『トロニウムエンジン』や『ブラックホールエンジン』といった存在は製造不可能だし、それ以外でとなると現状できるのは『オリジナルのＧＮドライブ』だけであるが、これも一定以上消耗すれば回復に時間がかかってし

まう。
ツインドライブにするのはもっと面倒だし、複数個装備してとなると武装等の方面が難しくなるのだ。
そんな理由もあって俺の方面の機体作成は物凄いくらい難しいのだ。

ちなみにであるが、ダブルオーライザーの運用データをとるさいヴェーダを使って地球からは機動実験中の異常を観測できないように細工しておいたので、正式にみる為に開放したＧＮドライブの粒子や、ライザーソードの実験のさいには大型で地球に当たるコースを取っていた隕石を一つ破壊したのだが、隕石の破壊に関する調査を調べるのはあと少し科学技術が進歩しないと無理であると言えた。
それともう一つ、何しろ運用実験をするのが宇宙空間での活動であるため、システムＸＡＮの運用がちゃんと出来るようになってからアステロイドベルトにある小惑星を利用し、その中で結構大きめの石を改造し、一種の宇宙ステーションのような感じにしているのだ。
何しろ人間である俺達であっても行き来に関してはシステムＸＡＮのおかげで結構楽なもので、おまけにステーションへの開発に必要な機材や資材はハロを使って石内部を改造等をしてもらい、資材はシステムで送るなどしてハロを交替させながら製造させ

ていたのだ。
　そのおかげもあってアステロイドベルト内の大きめの石を改造して出来た宇宙ステーションは複数存在し、現状人間はいないものの運用データ等をとるためだけの資材だけが置かれている状況にしておいてあるのだ。
　一応能力で造った反重力装置搭載を基地内部では運用しているので、地球と同じような感じでいられるようにしている。
　ちなみにこの場所に来られるのは幻想郷でも一部の人間だけにしているが、結構人気だったりする。

　そして技術の進歩が無いと言うのは、女尊男卑主義の女性が原因で凄腕の職人と言われるほどの人材は大幅に激減しており、テスラ・ライヒや幻想郷の人間を除けば外には片手で足りるほどのしか凄腕の職人は存在しておらず、前に政府から職人研修させてくれと言われたが、担当したのが女尊男卑主義の女だったので却下してやった。
　何しろずっと上から目線で俺達に命令してきたので、俺達は『そんな命令は聞けません』と言って却下してやったのだ。
　後でぎゃあぎゃあ喚いていたのだが、この時の会話を録音したのを提出し、最終的には担当した女性は解雇され、別の担当がやって来てできるようになったのだが、研修に

来るのが大半女性な上に、自身の技術の向上だとかそんなものは一切無いような人間ばかりで、おまけに職人の言う事を聞かない人間が多数いたため、最終的には研修制度は終わりになってしまったのだ。

そのためテスラ・ライヒは業界でもっともよい成績を残せるのだが、他の企業や団体に関しては女尊男卑の影響が強いのが原因で、自分達が作った製品が全て数年前クラスの製品レベルで、おまけに0．1ミリ単位の修正も出来ない品物が多数出ているため、不良品が大量に出る始末で、結果倒産する会社も多数存在するため、テスラ・ライヒでタダ同然のように施設ごと買い取り、そのままテスラ・ライヒの子会社工場にするか、敷地面積を利用して別の物にするなど色々と行っているのだ。

おかげで工場跡地を利用して娯楽施設やマンション等の居住物、時には大型の野菜等の畑にしたりしている。

何しろ野菜・肉類・漁業等の生産系の関係も結構人数が減っており、テスラ・ライヒはある意味慈善事業を行っていると言えるのだ。

その分ちゃんと給料等をちゃんと出して運営しており、同時に建設業に関しても色々とやっているためテスラ・ライヒは色々な方面で賞賛もあるのだ。

話をクラス対抗戦のに戻すが、秋斗と鈴の戦いはある意味一方的であった。

秋斗ではなく、戦況は誰が見ても鈴の圧倒的優位で戦いは行なわれていた。
鈴の専用機である『甲龍』のもつ第三世代兵装である『衝撃砲・龍砲』を上手く使い、近距離格闘戦武装である『雪片弐型』の攻撃を双天牙月と言う大型の青龍刀をバトンのように使って防ぎ、時に連結して投擲武器にして扱った。
何しろ白式は織斑千冬を世界最強へと導いた『暮桜（くれざくら）』にあった単一能力『零落白夜』を持っているだけなのだ。
言い方を変えれば、白式をもつ秋斗が鈴に勝つには零落白夜を使って勝つ以外方法は無いのだが、元々白式の情報を持っている鈴に対しては完全な悪手であり、雪片弐型の零落白夜の攻撃が当たらなければ何の効果も無いのだ。
しかし、零落白夜は自分のシールドエネルギーを消費して行なうためある意味最後の切り札的なものである上に、おまけに能力の効果が発現するのが近接格闘である以上、近づかなければ意味が無いのでその点さえ気をつければどうとでもなるのだ。
おまけに相手が中・遠距離系攻撃を主体としてきた場合、相手に近づけなければ意味が無いので仕方ないだろう。
そのための手段となれば『瞬時加速（イグニッション・バースト）』以外の方法が無いのだが、一回限りの隠し技でしかない。
つまり、攻撃手段の乏しい白式を使っている秋斗は、どう考えてものちの敗北する

しかないのだ。

このまま何事も無く終わればいいとそう思っていたのだが、俺と刹那は嫌な気配を感じた。

俺は念動力者としての勘が、そして刹那は覚醒していくニュータイプとしての勘が、同じように発動したのだ。

俺は念のために今日幻想郷から出て、自分の家族が今どうなっているのか知りたかった弾に緊急連絡をした。

内容に関してはＩＳ学園に向かって『謎の存在』が向かっていると言うもので、俺はすぐさま刀奈に連絡し、ＩＳ学園側での謎の存在に関する緊急事態に対処させると共に、クリス・シャルロット・簪・弾に緊急出動による謎の存在への迎撃に出た。

とは言っても、これは俺と刹那の勘でしかないので、対処云々に関してはあれだが、最悪の事態を想定して行動した。

弾に関しては一応テロリストの扱いなのでそれなりの対処はするものの、それを除けば共闘したと言う扱いでその謎の存在を対処する事にした。

弾　Ｓｉｄ

俺は自分の実家でもあった『五反田食堂』の近くまで来ていた。

とは言っても、俺がここの息子である『五反田弾』だとは、家族は誰も気付かないだろうと俺は思った。

幻想郷に幻想入りした時にはもう肉体も精神もボロボロだった俺の身体は、運悪く輝夜と妹紅の喧嘩に巻き込まれて、そして永琳さんの治療のおかげで肉体のほうは何とかなった。

だがしかし、その治療のさいに使用された薬と俺の精神状態が原因で、俺は変化していた。

何しろ髪の毛が背中にまで届くほど伸びており、おまけに赤かった髪の毛は蒼い色へと変化していたのだ。

当初は俺もこれには驚いたのだが、治療した永琳さんが言うには『一種の精神的な理由も含めた副作用』と言われた。

その後俺はほんの少しだけしかいなかった友人の織斑一夏改め、草薙刹那とその兄の和輝さん、そして幻想郷の面々のおかげで俺は元気を取り戻すことが出来た。

その後の生活で俺は永遠亭でいる事にしたのだが、永琳さんに色々と薬の実験台にさせられたり、輝夜と一緒にゲームで遊んだり、鈴仙と一緒にてゐの悪戯が原因で落とし

穴に落ちたりしたりもした。

そして鈴仙の目を見てしまった上に服薬していた薬の影響で暴走し、そのせいで永遠亭の皆に妹紅、そして慧音さんと関係をもったのはあれだったのだが、そのうえ永琳さんや紫さんが原因で騙され、月の綿月姉妹とも関係をもってしまった。

そんなこんなで色々あったが、今の生活は俺にとって結構いい生活なのだ。

そして俺は幻想郷に来て少し経った後、刹那達と同じ道を歩むと決めた時にＩＳに触れたら起動したのだ。

流石の俺も当時は驚いたのだが、これには和輝さんも驚いていたが、後々で和輝さん達が色々と調べたらこの幻想郷に存在する『番外世代』と言われているＩＳに関しては、この世界に存在するＩＳのように『女性にしか反応しない』のではなく、『男性でも使用できる』事が分かったのだ。

逆に俺は和輝さんの実験でこの世界のＩＳコアを使用したＩＳに触れてもＩＳは起動しなかった。

そして俺は刹那や和輝さんと同じようにＩＳを使って世界を変えようと言う思いもでき、そして俺は和輝さんからＩＳで初めて変形機構を採用した『アメイジングガンダムキュリオス』を受領し、刹那達と一緒に世界と立ち向かうことにした。

無論刹那達がやっていることがテロリストと同じである事も教えられたが、それでも俺は刹那達と同じように世界を変えたいと思ったのだ。

ＩＳが存在している世界で良い事なんて無いと言えるし、女尊男卑の影響で男性は良い思いは一切してはいないのだ。

俺と同じように男性であると言うだけで、家族にいる中には自分と言う存在を否定される人も存在している。

そして俺も刹那達と同じように人を殺したりもしたが、刹那達や周りの人達から『人を殺す事をなれるな』と言われ、俺も刹那達と同じにようにして世界を変えようとしている。

そして俺としてはもう心の中で整理をつけた元実家に入った。

店の雰囲気が自分が知っているのと違う気配がしたのには驚いたが、一番驚いたのは料理の味であった。

祖父が得意とする『業火野菜炒め』を注文したのだが、味が思い切りといっていいほど落ちていた。

そしてその理由もすぐに気付いた。

『火力』

この料理の決め手は野菜の食感とタレの旨みなのだが、野菜の食感が全然出来ていないのだ。

祖父の料理の味が落ちたことに驚いた俺であったが、同時にもしかしてとも思った。

自分がいなくなった事で、祖父が心を痛め、その結果料理の味が落ちてしまったのでは思うと、何と言っていいのかと思ってしまった。

その後店を出た俺は、すぐに幻想郷に帰る気になれず、外で少しブラブラとして幻想郷に帰る事にして空を見上げていたら、和輝さんからの緊急コールがなった。

俺はすぐさま内容を確認し、そして人に見られないような場所に移動し、キュリオスを展開してＩＳ学園へと飛んで行った。

第７話　新たな敵の予感と、闇の策略

クラス対抗戦が謎のアンノウンが襲撃して急遽取りやめになった数時間後、俺の部屋で皆と話し合いをしていた。

序にであるが、この話し合いに鈴が参加していたが、鈴が一番今回アリーナに突っ込んできた敵存在に関して分かっている為、俺達はこれからの対処の話をするのに、鈴も参加して欲しかったからである。

と言うのも、鈴が今回アリーナに襲撃をかけたアンノウンと戦った人物であり、俺達側サイドに近いのもあったからだ。

織斑達に関してだが、俺達は完全にいって知らん。

特に放送室に侵入した篠ノ之に関しては、余りにも馬鹿な事をしたと思っているが、今の世界でＩＳが使えなくなったら困る各国政府の要望ともあり、罪には問われていないが、本来なら懲罰ものである。

あと、アリーナに侵入したアンノウンは織斑曰く無人機らしく、織斑の零落白夜とレイナのブルー・ティアーズの支援があって倒せたらしい。

だがしかし、俺達が戦った相手のほうが、数倍は性質が悪いと言えたし、その事を報告しあう為に、俺の部屋で話し合いが行なわれているのだ。

ちなみにであるが、俺と刹那の機体に使われているトップシークレットクラスである『Ｔ―ＬＩＮＫフレーム』や『オリジナルのＧＮドライブ』の事案も教えている。

鈴に関してだが、卒業したら俺達と一緒に幻想郷に来ると宣言した為、専用機や家族を捨てる覚悟も有ると言う事で、俺達はそれを了承し、鈴がこの場にいることを了承したのだ。

鈴自身、両親が離婚して母親の方に引き取られ、今の世界を生き抜くために軍にいるだけで、専用機に関しては得たのはいいが、刹那と一緒にいられるなら、捨てる覚悟もあると言う事である。

「で、あの敵は一体なんだったの、和輝君？何かあの敵の事を知っている感じだったけど？」

「そうだよね？しかも、敵って変な感じで出てきたのに。まるでテレポートして来た感じだったよ？」

「おまけに赤い粒子だったけど、あれって・・・」

そう、テレポートしたかのようにして現れた敵は、この中で一番俺が知っている敵だったのだ。

だがしかし、俺があれ等を造らなかったのには意味があったのだ。
「あれは擬似ＧＮドライブ、又はＧＮドライヴ［Ｔ］（ジーエヌドライヴ　タウ）と呼ばれている品物を搭載した『機体』だ。おまけに言えば、あれは刹那のオリジナルと違って時間制限付きのタイプだが、戦った俺達の映像を再確認してみたところ、あいつ等の性能に関しては、現状の世界で対抗できるのは、俺達の機体だけだ。鈴には悪いが、お前の機体じゃあを倒す事は不可能だ。何しろ、同じ第３世代であり、搭乗者が国家代表である楯無が全然歯が立たなかったくらいだからな」
流石の事態に鈴も唖然としたが、それも事実であった。
実は鈴には俺達が戦った映像を見ているのもあり、自分達のＩＳがまったくと言っていいほど刃がたたない状態で、もしもこいつ等がアリーナ内に侵入したと考えると、ある意味ゾッとする感じの敵だからだ。
しかも、性質が悪い事に写されている存在は全て無人機で、俺達が擬似とは言え、ＧＮドライブのデータをＩＳ学園、ひいては篠ノ之束に見られるのはいけないと思ったので、ドライブごと破壊したので、危険性の高いＩＳとしか見られていないと思いたい。
同時にであるが、使われていた擬似ＧＮドライブも、
そして同時にであるが、俺達と戦った相手がある意味最悪だったのだ。
「それと、俺達が戦ったあいつ等だが、名称は『ガンダムスローネ』の１号機から３号機、

アイン・ツヴァイ・ドライだ。だがしかし、あれを造れる存在は、俺以外に存在しないはずなんだ。何しろ主エンジンが刹那のダブルオー並に特殊だからな。おまけに、使われているＡＩに関してもやばい品物だったぽいからな」

「??どう言う事、それ?」

このスローネと中で戦っていない鈴が首をかしげた。それに関しては仕方ないとしか俺も思わなかった。

「鈴が戦った映像の無人機と、俺達が戦ったスローネじゃＡＩに差があり過ぎる。鈴のは『一定距離若しくは、攻撃しに来た個体を攻撃する』みたいなのだが、俺達のは『まるで人間みたいな考え方をする』扱いの存在だったんだ。と言うか、ＡＩの成長レベルで言えば圧倒的過ぎる程の違いがあり過ぎる」

流石の鈴も俺が言った事に唖然としたが、だが俺自身不思議に思っている部分もあるのだ。

何しろガンダムスローネシリーズに関しては、俺自身パーツの製造から大本である擬似ＧＮドライブの開発もしていない。

オリジナルＧＮドライブを開発し、スローネシリーズ自身俺が原作でスローネシリーズを使っていた奴等の悪行もあり、造る気が最初から無かったからだ。

それともう一つ、スローネに使われていた擬似ＧＮドライブはセカンドステージで登

場した改良型であったのも原因である。
スローネに使われている擬似ＧＮドライブは、人体に影響を与える毒素を持っており、原作でもイノベイターに覚醒しなければ刹那が死んでいた可能性があった上に、スローネドライのパイロットであるネーナの身勝手な考えの犠牲になったルイス・ハレヴィも、この毒素が原因で組織を修復する為の再生治療が出来なくなっていたほどだ。
ちなみに、劇中でも擬似ＧＮドライブの毒素が消えたのか消えていないのかは語られていない為、俺自身が製造した場合は毒素が有るか無いか分からないのも理由であった。

だがしかし、相手は今の世界で存在しない擬似ＧＮドライブを開発し、おまけにＡＩの学習能力も高い品を作っていることから、相当高度な技術を保持している事と、相当量の資金を保持している事が窺える。
同時に、テレポートのような感じで現れたのを考えると、ステルスシステムと思ったのだが、俺達のＩＳにもステルスシステムを看破するシステムが搭載されているが、それでも分からなかったのもあり、俺自身どうなっているのかと思ってしまった。
何しろ、現状持っている情報で考えてみれば、篠ノ之束がこの世界で造り上げたであろうと考え付くのだが、システム云々で考えると一番有力な候補と言えないのだ。

だからこそなのだ。一体誰が、何の目的でスローネシリーズを造り上げたのか、そして同時に、何故俺達の持っているアンチステルスシステムが対応しなかったのか、問題は多数存在しているのだが、俺達はこれで話を止め、各人部屋に帰って行った。

とは言っても、刹那の部屋にはクリス・シャル・鈴の三人が残り、俺の部屋には刀奈と簪の二人が来たので、あまり変わっていないと思うのだった。

・・・Ｓｉｄｓ

この世界に有る場所にとあるラボで、一人の女性が頭を抱えていた。

「あぁ～～～もう。一体何なんだよ!!あれは～～～」

自分の想定であったのなら、友人の弟が自分が送り込んだゴーレムに勝ち、それで一気に自分の思っている計画は更に進むはずであった。

自分が作り出したＩＳが、あの『ガンダム』と言う自分の知らないＩＳをコテンパンにすると言う計画である。

そのために白式に第４世代で運用される『展開装甲』を使っているのに、実際はそう

ならなかった。
　自分と同じようにＩＳ学園を狙っていた『赤い粒子を出す３機のガンダム』が原因で、自分が思っている展開にならなかった。
　おまけに、その３機も同じガンダムとそれに協力した存在の手によって破壊され、ちょっと前にＩＳ学園にハッキングして情報を調べたが、あの赤い粒子を発生させていた機関のデータは、発声機関そのものが完全に破壊されてしまい、こちらもデータをとれない状況下で、おまけに性能は私が作ったゴーレムよりも上の性能であったのだ。
　この世界をもっと楽しくする為に、そして妹の箒ちゃんがいつか自分に力を望んだ時に、ガンダムすらあの弟と一緒にやれば倒せる第４世代にしてやろうと思っていたのに、なのに自分の邪魔をする存在が増えたのだ。
　だからこそ、今まで以上に性能を高めて作製する事にしたのだ。
　妹である箒ちゃんに渡すべき赤、『紅椿』を・・・

・・・Ｓｉｄｓ　ｏｕｔ

　とある場所で、暗い部屋の中ではガンダムスローネとガンダムがＩＳ学園で戦っていた映像が流れていた。

その映像を見ていた存在達は、そのガンダムの姿を見て笑みを浮かべていた。
「よもや、別世界とはいえ宿敵の機体に出会えるとはね」
「あぁ、私も同じ気持ちだよ。とは言っても、私のは宿敵ではなく、そのカスタム機と言えるがね」
戦っている映像を見ていた二人は、まるで旧知の間柄のように話をしていた。
だがもしも、この二人を見ている人物たちがいれば、あまりにも不気味だと言える二人であったのだが
「しかし、これで彼女が何をしてくるのか、見物だね。この世界で彼女はもう『いらない』からね」
「あぁ、それもそうだね。ほんの少しだけ我々が協力してやったら、簡単に騙されているのにも気付かない、子供の思考の持ち主で、あまりにも役に立ったが、今ではもういらない存在だからね」
「あぁ。僕の世界にあった技術と、君の世界にあった技術。異なる世界に存在したと言うのに、『ガンダム』と言う名前と、機体の形だけが似ているのだと言うのは、ある意味皮肉と言えるけどね」
「確かに。私の世界と君の世界では『ガンダム』と言う存在の違いはあるが、名前と形が変わらないと言うのは、ある意味面白いものだが、そのおかげで我々の機体も更なる進

化を遂げているではないか？」
　一人がそういうと、もう一人もその言葉に笑みを浮かべ、映像を肴に優雅にワインを飲んでいた。
「トリニティの３人の思考データ等を利用したＡＩ制御のスローネがやられてしまったが、もう一機いいのがあるからね。だが、それは彼に任せよう」
「くくく、確かにな。あの戦争屋の彼なら、この戦いを快く参戦してくれるだろうね。私の世界にいた住人に出会えていないが、彼のような存在がいない以上、私の世界で期待するよりも、君のいた世界の彼に期待する方が面白そうだ。私も、あの世界の『未来データ』があったから、あんな玩具が作れる羽目になったからね」
「あぁ。そして、あのガンダム達を排除し、この世界を僕達が支配する。僕等の持っているガンダムと言う圧倒的な力の名の下に、下等な人類を導いてやろう」
　そう言って二人は嗤いながら話をしていった。
　ただ、その部屋の窓からは、無数のＩＳと、擬似ＧＮドライブ、そして、通常のＩＳの何倍も巨大なＩＳのような存在が生まれようとしていた。

第８話　金と銀の転校生　新たなる面倒事の始まり

俺達は鈴と言う新しい仲間と共に、ＩＳ学園の少しだけ長い休みを利用し、少しだけだが幻想郷に帰って来た。

正確には俺と刹那が、来るべき日に持つべき真の機体を完成させる為に、俺・刹那・弾の三人で戦闘行動や、完成させた新型武装の威力検証等で、俺達と関わりを持っているＩＳサイドの人間と一緒に訓練を行なっていたのだ。

ちなみにであるが、俺が造り出したが、置く所が無くてコンテナ内に封印していたＧＮドライブや試作Ｔ―ＬＩＮＫフレームがあったコンテナ置き場に、女尊男卑の思考でテロ行為をしようとした馬鹿の一部がこのコンテナ内に武装を所持して隠していた事が分かった為、そのデータを警察に通報する前に、物騒な事案がこのコンテナ置き場近くで起きていたので、念のために中身を確認した後、コンテナを幻想郷に移動させようと思っていたのだ。

だがしかし、そうなる前に何故か別の平行世界で、おまけに目の前に篠ノ之束がいた

ので、クラス対抗戦での事案もあって殺そうとしたが、その世界にいるガンダムパイロットに止められ、その世界の刹那（一夏）の言葉も聞き、その世界の篠ノ之束を殺す事はやめた。

だがしかし、この世界の篠ノ之束に関しては、色々と事情などを聞いた後、映姫さんの判決によっては殺す事にしておいた。

それが俺が新たに決めた俺自身のルールでもあるからだ。

コンテナ内にあった物品は元々廃棄しようかと思っていた物品を迷惑料として渡したので、向こうで有効活用してくれるだろう。

そのせいでどんなにとんでもない事態になろうと、俺達の世界に関わらないのであるなら、気にしないほうがいいからだ。

後はあの世界に住む住人が答えを出す事案であって、その結果であの世界が消えようと俺の知ったことではないからだ。

同時にであるが、現在テスラ・ライヒで開発中のある存在に関しての調査も行なっていた。

開発しているのは新型のＩＳのような機能を持つスーツ開発と、無人機ＩＳの製造・開発である。

実を言うと、ＩＳに必要なＩＳコアに関しては、最近になって俺が能力で造った男女平等のコアをにとり達河童の面々が複製と量産化できるのに成功した為、俺の能力による製造をしなくても大丈夫なようになったのだ。

おまけにこっちのコアは普通に現在の世界に存在するＩＳコア数を超える数の製造もできており、にとり達からすれば自分達が使う分以上の確保も出来ていらない存在になったので買い取り、宇宙空間においている基地内部でもっと製造している最中なのだ。

目標としての数云々は材料の面もあってまだであるが、まずは先に俺達の真の専用機開発用のためだけに新造のＩＳコアを開発している。

今の女尊男卑を終らせる為の手段を得るのはもう少し先送りにする事にしておいた。

無人機ＩＳの開発も出来てしまえば、オリジナルとも言える篠ノ之束作のＩＳコアにはこの世界からご退場願うつもりだ。

そして休みが終って学校に帰ってきたのだが、速攻で面倒事に巻き込まれた。

と言うのも、ＩＳ学園に帰ったら速攻で、転校生が２人やって来た。だがしかし、一人は金髪で、もう一人は銀髪だった。

だがだ、後で分かったのだが、金髪のはフランスのデュノア社の関係者で、もう一人

はドイツ軍の軍人なのがわかった。
名前は金髪のが《シャルロッテ・デュノア》で、銀髪のが《ラウラ・ボーデヴィッヒ》と言う名前だった。
と言うかだ、ドイツの方はいきなり俺を織斑と間違えて叩いたので、それなりに謝罪を強要させてやった。
何しろテスラ・ライヒの作っている製品の中には、ＩＳや他の電化製品等を作るのに必要な部品関係のもあり、テスラ・ライヒ製の製品品質はこの世界でもトップクラスの品物で、女尊男卑の現在の世界では品質の劣化も起きている部品関係の方面で脅して謝罪させたのだ。
まぁ流石に今回は相手の顔を知らなかったと言う事で強要させた事で手打ちにしたが、これ以上の面倒ごとを起こすようなら、それ相応の対応をしようと思った。

だがこのラウラ・ボーデヴィッヒは、こちらが思っていた以上のダメな存在であった。
と言うよりも、軍の人間であるのにも拘らず、今まで普通の人間だった存在に対しての教えが完全にできておらず、その結果周りが迷惑する事ばかりであった。
一応俺や刹那もラウラの対応が原因で山田先生が色々と苦労していたので、山田先生の苦労を少しでも減らす為に色々と補助をしたのだが、本人は完全に言って我関せずの

状態だったのでもう呆れるしかなかった。

そしてもう一人のシャルロッテ・デュノアだったのだが、俺としてはデュノア社がと言うよりも、馬鹿なデュノア婦人が送り込んで来た産業スパイだろうと確信していた。

容姿に関しては金髪の綺麗なご令嬢と言う感じだが、俺達からすれば紫さんやアリス、セシリアにシャルロットと、綺麗な金髪の女性は見飽きており、おまけにご令嬢のようにして猫を被っているのが丸分かりである。

何しろデュノア社は今や第2世代のラファールを開発したと言うだけで何とか運営できているだけの弱小企業にまで落ちぶれており、前にテスラ・ライヒとの業務提携もあったのだが、経営等も何もわかっていない馬鹿なデュノア婦人が原因で、テスラ・ライヒとの業務提携の話も完全消滅し、おまけに非公式であったが、デュノア社のＩＳ操縦者であったシャルロットをテスラ・ライヒに渡す羽目になってしまったのだ。

更に、業務提携の話が完全消滅したと言う部分をインターネット等で理由付きで全世界に流出させたので、デュノア社の信用と信頼は地に堕ちているばかりで、現社長や役員が何とかして運営をしている状態になってしまったのだ。

その後も俺は将来的な事を考えて、色々とデュノア社に関しては調べていたのだが、経営を何もわかっていないデュノア婦人が女尊男卑を理由に色々と非人道的な行為を行なっているような組織や団体との癒着も確認されている為、その証拠も掴んでおいたので、いつでもデュノア社を事実上の倒産に追い込むことは出来るようにしておいたのだ。

だがしかし、その証拠を出さないのは、現在のデュノア社の社長で、シャルロットの父親が関係している。

実はシャルロットをこちら側が引き取ったさい、不審に思っていた部分があって調べたら、シャルロットの父親がシャルロットと母親を愛していたのが分かったのだが、分かったのがシャルロットを引き取って業務提携消滅を報告した後だったので、シャルロットの父親を助け出そうと思ったのだが、タイミングを失敗してしまったのだ。

そのため、何とかデュノア社長を助ける為に現在はタイミング等を見計らっている状態なのだ。

そしてシャルロットと父親の仲を修復させたいと思っているのだ。

俺のように、理不尽な理由で両親を失うような事態は絶対にシャルロットにはあわせ

たくないのだ。

そしてシャルロッテであるが、デュノア婦人の姪っ子に当たる存在だと言うのがデュノア社調査の結果で分かっており、おまけに彼女も専用機を所持しているのだが、デュノア婦人の姪っ子と言う立場と金の力によるもので、自身の実力ではないのだ。

持っている専用機もラファール・リヴァイブのカスタム機だが、後付装備の部分を従来機よりも１０倍に近い感じに、高火力重視の機体にしているだけの機体であった。その分鈍足だが、火力でカバーしているだけの機体だった。

簡単に言えば歩く火薬庫だが、本人の腕が低いのもあって、そこまで危険性が高い存在ではなく、少し技量のある存在なら軽く倒せるほどの腕前でしかなったのだ。

まぁこんな感じの子で、おまけにシャルロットも知っている子で、デュノア社でいた時には結構虐めていたらしいのだが、昔は色々とあってわざと負けていたらしい。流石の俺達もそれに関しては同意した。

何しろシャルロットの持っている技術は最早ＩＳの単一能力なのではと言えるほどの技量を持っており、ガンダムを使用している俺達でも敗北する回数が多いくらいなの

だ。

シャルロット用に改修した専用機のゲシュペンストＭＫ―Ⅱ・改の性能と、本人の弛まぬ努力による格闘戦能力の向上も相まって、ある意味ＩＳを操縦する学生と言う分類では、国家代表に匹敵するほどの全距離対応型の強者として存在している。

まぁこんな時期に転校して来た時点で、他国の製造した第３世代型ＩＳの運用データ等と、序に言えば織斑の持っている白式のデータを盗み、おまけに織斑を篭絡したりしてデュノア社の復活を望んでいるのであろうが、最早全部が真っ黒と言えるほどの会社の完全復活は無いだろうと思った。

ちなみにシャルロット曰く、彼女の性格は婦人同様に女尊男卑思考で、欲しいものはどんな手段を使っても手に入れるようにしているらしく、シャルロットもデュノア社でいた時には影で虐めるだけは飽き足らず、その当時彼女が使っていた機体に不具合を起こさせるようなプログラムを作り出すほどの最悪なプログラマーでもあるらしい。

その点もこちらで調べたのだが、腕前に関してはそこそこ強いだけで、何かあったらすぐに分かるような部分が残っており、腕前としては超１流の存在と比べるまでも無いほどの存在であった。ただ、悪知恵だけが働く腹黒い小娘程度でしかなったのだ。

テスラ・ライヒ製で、俺達が利用している専用機には対サイバー用のシステムも存在

しているので、例え俺達の機体に悪性プログラムを流しても、大抵の悪性プログラムは効果を発揮できずに消滅するように仕向けている。

もしも対サイバー用のプログラムを突破しても、結構何十にもプロテクト関係をしているうえに、最悪の場合はヴェーダとリンクする事で消去できるようにしているので、並大抵のプログラムでは太刀打ちは出来ないと自負している。

何しろプログラムの大本はにとり達河童が作り出したプログラムなので、篠ノ之束が介入しても多分大丈夫だろう。

とは言っても、これ以上シャルロッテがこちらに勝手な理由で介入をしてくるのであれば、それなりの対応が必要だとも思っている。

第９話　シャルロットと簪からの苦情・特製ブラックリスト

シャルロッテとラウラが転入して数日立ったのだが、運が悪いのかは分からないが、シャルロットの存在がばれた。

まぁこれに関しては偶然みたいなものであったが、機体の練習で借りたアリーナにシャルロッテが別のクラスにいたシャルロットを見つけ、デュノア社時代の思い込みで接触し、おまけに色々とシャルロットの悪口を言っていたのだ。

このことを後から来てクリスから聞いた俺と刹那もこれ以上は我慢が出来ない状態だったが、俺が刹那を止めた後、シャルロッテの前に立ちはだかった。

「いい加減にしてくれないか?その子はテスラ・ライヒのテストパイロットの一人だ。彼女が元デュノア社の人間であることは知っているが、これ以上の侮辱は許す事は出来ない」

「ふざけるんじゃないわよ!そいつは泥棒猫なのよ!それがこの学園で良い子ぶっているんじゃないわよ!!」

「それ以上我が社の社員を悪く言うなら、テスラ・ライヒのＩＳ学園内の事案限定だが、特別幹部としての権利を行使させてもらう」

流石の俺の言葉に周りのアリーナにいた人間も不思議そうにしていた。シャルロッテも同じように不思議そうにしていた。

「内容は簡単だよ。ＩＳ学園内の授業や行事、休み時間やこういった訓練中等で発生した我が社に対してと、社員に対してのクレームや、何かしろの要望、君のように権力を使うような相手限定で使えるテスラ・ライヒから貰っている俺だけの権利だ。これ以上君が我が社の社員であるシャルロット・プレスティに対して暴言や暴行行為を行なうならば、君の祖国フランスに今回の件を報告し、フランス政府からの正式な処分を下してもらう。後幹部連中が決めるが、フランス政府とデュノア社に対してそれ相応の対応をさせてもらう」

流石の俺の言い分にアリーナにいた全員が唖然としたが、これに関しては俺がＩＳ学園内で使える権力を保持する事が理由である。

何しろいきなりレイナが原因で発生したクラス代表の選抜試合のように、これから先、自身の権力を利用してこちらの不利益になるような事案があっては堪らないということで、急遽ＩＳ学園内限定での特別幹部のような扱いを作ったのだ。

とは言っても、基本的にはＩＳ学園で使用する物品等の要望を聞いたりするだけの連絡係のようなものだが、今回のような事案に関しては制裁目的でも利用できるのだ。

シャルロッテは俺が言った言葉に腹立ちそうな顔をしてアリーナから消えたが、シャルロットを理解しているクリスや他のクラスメイトが慰めていたりした。

刹那も慰めに行くような感じであったが、クラスメイトとの仲を見て俺と一緒に安心していた。

ちなみに、アリーナ内にいた人間には俺の持っている権利云々を説明したら、シャルロッテの横暴を止める為と言う事で納得してくれた。

事情を知らない他のクラスの面々はシャルロットを悪く言いそうだったのだが、そこは俺達が止めておいた。

後日、シャルロットのデュノア社からテスラ・ライヒの人間になった経緯と、理由を説明する事でシャルロットは皆から信用と信頼を得られるようになった。

逆にシャルロッテはシャルロットにした行為がクラス全員にバレ、おまけにテスラ・ライヒの人間になった経緯や理由を知ったクラスメイトからは信用を失ったものの、織斑に接近して色々と何かをしているような感じになっていった。

織斑に関してだが、この事件の後にもシャルロットに近づいて来たのだが、今度はシャルロッテの事を吹っ切ったシャルロットが思い切り袖にした挙句、何時も一緒にいる篠ノ之やレイナ、シャルロッテもいたのだが、俺達と一緒に行動すると、俺が持った権限で黙らせた。

ちなみに篠ノ之は理解していなかったのか、俺達に色々と暴行未遂や暴言の数々をして来た挙句、こちらの最終警告を無視したので、テスラ・ライヒ特製のブラックリストに登録させてもらった。

ちなみにこのブラックリストは、テスラ・ライヒ系列が運営するレストランやホテルに娯楽施設等に行った際、来店禁止を言い渡され、同時にテスラ・ライヒ関係の仕事場への斡旋等も全てが消えるものなのだ。

仕事場への斡旋等が消えるのはテスラ・ライヒ関係だけでなく、テスラ・ライヒと提携している会社や組織、団体もこのブラックリストは採用しているので、大半の仕事関係に就職できないのは本人の自業自得であるが、俺も関わるつもりは無い。

他にも、ブラックリスト登録された時点で系列のスーパーやデパートも存在するのだが、一部の場所での来店禁止の分類なっており、特に女尊男卑の影響で女性用製品が多

く扱っている店が多くなった昨今において、その手の品物の購入が出来ないのは女性に取っては結構な痛手であろう。

他にもネットショッピングの方面もあるのだが、こちらは商品の売買禁止になっているため、登録された女性は哀れになるのだ。

このブラックリスト登録には既に何人かの女性も登録されており、中には元テスラ・ライヒの系列社員もいたのだが、女尊男卑の影響で平気で刑事事件に発展するほどのひどい事をしていたので、懲戒免職処分になったほどだ。

ちなみに、特製ブラックリスト登録者の再雇用と言うのは無く、他の会社等にもこの情報提供はしているので、登録された人間がどうなったかは知らないが、まともな人生はおくれていない事は確かだろうと認識している。

篠ノ之にはそう言った事は言わなかったが、本人の自業自得な面もあるし、これから先の人生をどうしようとあいつの勝手だろうと思った。

無論篠ノ之と一緒にいた織斑やレイナ、シャルロッテも登録予備軍の扱いで処置しているので、これから先のあいつ等の行動次第だと思った。

シャルロッテが原因でシャルロットの事情を話した夜、刹那達が部屋にやって来て、シャルロットがとんでもない台詞を言われた。

おまけに簪も同様な事態になっているため、二人から言われたその内容に俺も驚いてしまったのだ。

「機体の反応速度が鈍い、か」

「う、うん。前はそうでもなかったんだけど、最近は何か私の反応について来れない感じになってて・・・」

「私も、かな？模擬戦中に何度か反応速度が遅いことが多くなってきたから」

流石の俺も驚いたのだが、この中で一番メカニックに詳しい簪に調べてもらったら、確かにシャルロットと簪の反応速度に、二人の専用機が、二人の反応速度についていけていないという事が判明した。

流石にシャルロットに関しては最近になって反応速度が上昇したのは気になったので、今度紫さんに能力が発現したのか見てもらう事にし、機体に関してはどうするのか考える事にした。

簪に関しては簪の念動力の能力が上昇した事で、機体のほうが簪の成長に耐えられなくなっていたのが原因であったのだが、ＴＬＩＮＫシステム搭載機に対応できるのは俺と簪の二人しかいないが、俺自身も簪の成長の早さにビックリしていた。

刹那達が部屋に帰った後、俺は色々と考えていた。

何しろ簪とシャルロットの二人に関しては、テスラ・ライヒの次世代型訓練機として開発した機体を運用してもらい、その実戦データ等を採って貰っている実験機でもあるのだが、最初から量産化や整備性を重視した設計を前提にしている機体なため、俺や刹那の機体のような運用実験機と違い、量産期による反応速度云々は後々で問題になってくる設計なのだ。

今の二人の状況を使用しているＩＳの運用データで見ても、完全に機体が反応できないような反射速度を得てしまう可能性が高いのだ。

そうなると色々と面倒なので、二人には別に新たな機体を渡す事になるのだが、その機体の完成がまだできていないのだ。

二人に渡す予定の機体の武装等はそれなりに完成しているのだが、新たに俺が創造して造りだした《ＶＰＳ（ヴァリアブル・フェイズ・シフト）装甲》がまだなのだ。

何しろ俺と刹那が能力を十全に使えるようになった際、機体自身も俺達の全てに耐え

れるような機体性能を持たなければいけない。
何しろ俺達が十全になった際の反応速度を考えれば、機体の間接部に多大な被害が出る可能性が高いので、機体のフレームに採用するシステムとしてＶＰＳ装甲が必要だと思っていたのだ。
だがしかし、今のこの世界でＶＰＳ装甲を世に出す訳には行かないので、宇宙で開発・運営・量産化をしている最中なのだ。

一応シャルロットにはＩＳ学園を卒業か、２・３年生になった際に、機体フレームにＰＳ装甲を採用したガンダムに乗ってもらう予定であったが、色々と前倒しになってしまったのだ。
簪も同様だが、こちらはガンダムタイプではないがＰＳ装甲採用機体にする予定だったのだ。

そして俺は二人に渡す新たな機体を見ていた。シャルロットへの機体名は《自由の剣》、簪への機体名である《凶鳥の前身》
俺が知っている限りで、シャルロットのは最強の存在とも言えるガンダムの一体で、全領域での殲滅用超高機動型のガンダムである。

まぁ俺の完全なる趣味の機体であるが、シャルロットの今の現状の状態なら何とか使えるかもしれない機体である。

最悪の場合、この機体の上位存在の開発も考えなければいけないと思うと、色々と頭の痛い話になってくるのだが・・・

簪のは念動力者でもあるため、もしも用に開発していた機体であるが、俺の趣味で作り出した機体である。

まぁ一応簪の専用機として色々と回収する部分もあるのだがＰＳ装甲採用機体として考えていたので、それなりに使える機体になっている。

元々の機体性能を考えれば現在の簪でも耐えられる機体になるだろうと思う。

これでもしも耐えられないような状態になったら、その時に考えるしかないと思う事にした。

それともう一つ、シャルロットに言われたのだが、織斑の目が合ったさい、『自分が好きになる』と言う風な暗示のようなものを受けたらしい。

本人もそれを気持ち悪く思っていた上に、それを知った刹那の眼が恐ろしい事になっ

ていたが、俺としてはそれが調査報告の原因だと確信した。
まぁ幻想郷と言う色々と常識が通用しない場所を知っている俺達からすると、ある意味そう言った魔眼のような物を持っている存在とは日常的に話をしているので、そこら辺の人間よりも耐性が強いのもあって、ほぼ無効化か弱体化ぐらいでなるだろうが、これから先の未来が少し大変かもしれないなぁとしか思う程度であった。

後日シャルロットと簪には臨海学校までに新機体の調整等をして手渡す事にし、二人には騙し騙し今の機体を使ってもらう事にした。
二人が使っていた機体のデータはこれから先は仕方ないが、元々の目的である次世代型訓練機としてのデータ採集にはほぼ採れるようにするしかないと思っていたので、それなりに大変な状況になったと思うしかなかった。

第１０話　ラウラの断罪・救いの無い意思

流石の俺も今回ばかりは流石に切れかけていた。
俺は問題を起こした問題児と相対していたのだが、流石の俺も金と銀の転校生が来てから面倒事による我慢の限界だったのだ。
「そこまでにして貰うぞ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」
「ほう、今度はお前が相手をしてくれるのか、ガンダム」
アリーナで滅茶苦茶な事をした馬鹿を相手に、俺は少しだけ本気を出す事にしていた。

何故こんな事になったのかと言うと、事件の発端は数分前に遡る。
近々行なわれる学年別トーナメントに向けて練習しようかと思い、予約していたアリーナに向かったら、そこに合いたくない人物であるレイナがいる事が分かったので、後で練習しようかと思っていたら、鈴がやって来たので、一緒に練習しようかと言う話になったのだ。
ちなみに刹那はシャルロットと簪の機体の不調があるので、クリスと一緒に機体調整

を手伝う為に整備室に行っている。
同時にトーナメントに向けて全員の機体調整をしようと言う話になっているので、今日一日は別行動になっているのだ。
俺の機体は自分で調整等もできるので、後日調整する予定になっているのだ。
鈴も俺の言った話に納得し、一緒にアリーナに向かって入たら、ラウラとレイナの二人が戦っていたのだ。当初は俺達は模擬戦かと思っていた事もあり、戦いの邪魔にならないようにと思ってアリーナの入り口付近で待機していたのだが、二人の戦い方を見ていて段々と違うと思えてきたのだ。
戦いに関してはレイナのほうが部が悪い感じで、段々とブルー・ティアーズのＩＳアーマーが破損して行き、おまけにラウラは相手を殺すような感じになっていったのだ。
「っ鈴！レイナを頼む。あんな奴でも死なれたら目覚めが悪い」
「分かったわ。あんたも気をつけなさいよ」
そう言ってお互いに二人の戦いに介入し、ラウラのワイヤーブレードで首を絞められていたレイナを俺が銃撃で助け、鈴は衝撃砲でラウラを俺やレイナのいる位置から引き剥がそうとしていた。
レイナはワイヤーブレードが外れた事で荒い息を立てていたが、俺は鈴にレイナを預

け、下がってもらうように頼んだ。
何しろこんな状況下であるが、さっきまで見ていたラウラの戦い方を見ていて、対処ができそうなのは俺だけだったかだ。

そして始まりの部分に戻り、ラウラとの戦いになったのだが、ラウラのＩＳが持っているＡＩＣが色々と面倒であったのだが、実は俺はさまざまな手を使ってラウラとの戦いによる時間稼ぎだけをすればいいのだ。
幾らなんでも学年別トーナメント開催前に、俺の持っている手札を色々と見せるのも面倒だと思っている部分もあるのも原因の一つだが。

実は鈴と一緒にアリーナに入る前に、鈴にレイナを助けた後、教師にラウラのした事を報告して来てもらう為に行動しているのだ。
無論レイナの救助も兼任しており、レイナのＩＳの破損具合等は後で知ればいい事である。
俺は戦いで時間稼ぎをしつつ、対応していたら、今度は織斑がアリーナのシールドバリアを壊して侵入して来たので、俺から織斑に標的を変更したラウラには目もくれず、俺は織斑が壊した事が原因で、観客席にいる周り生徒達が被害を受けないように対処す

る事にした。

その後織斑先生がＩＳ用の刀を持って現れて、トーナメントまで私闘を禁止されたのだが、おれはそれで良いかと思う事にした。

ラウラには悪いが、もうラウラをこの学園に置いておくような理由はもう無いだろうと思ったからだ。

実はラウラのした行為はＩＳ学園内での模擬戦闘とはいえ、他国のＩＳ操縦者を殺害しようとしていたのは事実であり、しかも偶然だとかの産物ではなく、故意による殺害に近いものであったのが原因なのだ。

いくらＩＳ学園が国家・組織等の権力が届かないとはいえ、完全にその権力が及ばない訳ではない。

ラウラには後で俺達が持っているデータと証言をドイツ本国に報告し、国家よりしかるべき処罰が下されるだろうが、同時にラウラは元教官である織斑先生の顔に泥を塗ったのだ。

ラウラの事を調べたら、織斑先生が１年間だけだが、ドイツでＩＳの教鞭をとっていた事が判明した。

ラウラはその時の教え子なのであろうが、ラウラのした行為は軍人としてはあるまじき行為ばかりしていたのだから、国家反逆者として処罰されても仕方ないだろうと思っている。

序に言っておくが、ラウラを俺達は助けるつもりは一切無い。

軍人としての義務を放棄したラウラを助けるつもりは無いし、ＩＳを学び教える事もできない存在を救うだけの価値は無い。

例え彼女が特殊な生まれであろうと、こればかりは帰られない事実であるのだ。

あの事件の後、俺は偶然であったがラウラが一人でいるのに出くわしてしまい、俺と戦いができないのを憤慨していたが、俺はそれを哀れに思いながらラウラを見ていた。

「お前は本気でバカか？お前が何をいようと、これから先のお前の一生なんて何にも得られるわけ無いだろう」

「何だと、貴様！」

「人に怒る前に、お前はこの学園に来て今まで一体何をしてきた、ラウラ・ボーデヴィッヒ？軍人として守るべき市民への配慮等も無く、訓練生に対してとか色々とあるが、軍人としての最低限度の部分も自ら放棄し、おまけに他国のＩＳの批判に使用者の殺害未遂、ドイツ本国には悪いが、お前の今日までこのＩＳ学園内でして来た事を全て報告し

てある。学園内での事案としてお前にどういった教育を施したのか気になって報告はしていたが、お前にいられる居場所なんてもう何処にも無いぞ」

流石に俺の言った事に驚いて反論しようとしたが、俺が軍人としての最低限の部分も守っていない事を指摘されると、何も言えなくなった。

「お前の処分に関してはこれから先ドイツが決めるだけだ。お前は俺が見ても、市民を守る軍人じゃないお前は、テロリストのような人を殺す事しか考えていない最低な存在でしかない。人としての最低限の道徳がない存在であるお前が何を思っても、お前をテスラ・ライヒの社員としても、一人の人間としても助けるつもりはない。助けて欲しいなら、お前の尊敬する織斑先生に頼むんだな」

そう言って俺はラウラから離れて行った。

俺が言ったことはラウラには悪いが、全て事実であるからだ。

ラウラの事をドイツ本国に報告した際に調べたら、彼女が特殊な生まれであることはすぐに分かった。そしてＩＳが出たことで、色々と問題になった存在であることも分かった。

そしてラウラ・ボーデヴィッヒと言う存在をドイツ軍やドイツ国家が必要な存在であるかといえば、答えは『Ｎｏ』なのだ。

彼女は特殊な生まれの成功例であるのだが、それを除けば失敗作とも言える存在だったのだ。

実は少し前にドイツ国内で災害が有り、その災害対策でＩＳ部隊が出動したのだが、彼女は災害救助での成果を上げなかった。

他の隊員達が色々とやっているのに対し、災害には適さない武装等を使用したりした等と、隊員達との不和をうんだのだ。

無論他のドイツ軍人達も同じであるが、現在最強のＩＳを使える戦士と言う事で全員がそれなりに不平をいようと我慢していたのだ。

だがしかし、もう彼女には守るべき国家もなければ、仲間と言える存在も入ない。

自分だけの力を過信し、それに酔いしれた彼女に対して、俺達は助けの手を差し伸べるつもりはないのだから・・・・・

そして学年別トーナメントの日がやって来たのだ。

第１１話　全てが終わった後

トーナメントが終わり、俺達は少しだが楽な日々を送っていた。
生徒会室で手伝いをしながら、俺達は話をしていた。
「あの疫病神も消えて少しだがせいせいしたな」
「まぁ、あいつも織斑千冬の強さにしか目にいってなかったからな。自業自得だよ」
「アレに関しては、いくら織斑先生でも手は出せないからね」
問題児とも言えたラウラ・ボーデヴィッヒに関してだが、実は数日前にドイツ政府からの要望で、このＩＳ学園から【退学】させられた。

事の起こりは数日前に行われたクラス対抗戦のトーナメントで、ラウラは抽選で選ばれた相棒の箒と共に、刹那とシャルロットのペアに一番最初に始めた初戦で激突したのだ。
だがしかし、個人での戦いしかしないラウラは、刹那とシャルロットのコンビネーションにより、邪魔者に近い箒をあっさりと倒された後はあっさりとヤラれそうになったのだ。

そして本来ならそのまま彼女の敗北で終わる筈であったのだが、ヤラれそうになった彼女のＩＳには国際的に禁止されていた【ＶＴシステム】が搭載されており、ラウラは戦いの中でシステムを発動させたのだ。

その結果トーナメントは中止となり、ＶＴシステムによって現役時代の織斑千冬のような姿が現れたのだが、刹那とシャルロットの前では実力差がありすぎた。

刹那とシャルロットは幻想郷での実力が数段上の存在達との弾幕ごっこや実践経験も有り、オマケに決められた動作しかしないお人形のような過去の織斑千冬レベル以下の存在では相手にならず、あっさりとラウラを救助して倒したのだ。

そしてその翌日、ドイツ政府はテスラ・ライヒから提供したラウラの学園での問題となる態度を重視し、ラウラは朝のＨＲに参加したのだが、俺はラウラより少し遅れて教室に入ったのだ。

その際にラウラから専用機の状態を聞いたら、予備パーツで修復したと聞いた後、俺はラウラに専用機を提出するように命令した。

流石の事態に教室は騒然とし、ラウラ自身も怒った。

「な、何故お前に私の『これ。テスラ・ライヒ宛にお前への通達書類だ』えっ？」

ドイツ語で書かれていた書類にラウラは目を通すと、ラウラの顔は一気に真っ青に染

まり、ガクガクと全身が震えていた。
「そ、そんな、馬鹿、な」
流石のラウラの状態に皆が不思議そうにしているので、俺が代わりに見せた書類の内容を読んだ。
まぁ色々と形式的な部分もあるので、皆に分かりやすく書かれた内容を要約して説明した。
「ラウラ・ボーデヴィッヒに関しては、学園でのクラス対抗戦の戦績に関わらず、クラス対抗戦が終わり次第、当人の我がドイツでの軍人としての資格並びに国民としての資格を永久剥奪し、本国への来訪はどんな理由があろうとしてはならないするものとする。当人の専用機は即時返却を要望し、学園から退学させるものとする」
ラウラ・ボーデヴィッヒはドイツ本国から切り捨てられたのだ。
流石の内容に周りも何も言えない様子であったが、俺は助ける気すら無かった。
織斑の馬鹿はラウラを助けようとしたが、この書類はドイツ本国から正式な書類で、日本政府と学園にも同様の書類が出ていること、オマケにラウラを引き取るにも、ラウラ自身はどんなに頑張っても国家代表候補生の座には戻れないことを伝えた。
「全てこいつが今までやってきた事のツケの結果だ。寮の部屋のお前の荷物の荷造りは手伝ってやるが、それからは俺も知らん。今日の昼までに学園から出て行けとの通達だ

からな」

そしてラウラを連れて寮の部屋に行き、少なかったが彼女の荷造りをした後、ラウラは学園から去って行ったのだ。

同時にこんな風になってしまった時点で、彼女に生きる道は何処にも無いのだ。

何しろ国籍無しの上に身元を保証するものすら無く、軍人としての力量があると言っても、彼女に一般的な知識がほぼ無いのを知っている。

オマケに本国であったドイツの土を二度と踏むことすら許されなくなったのだ。

この時点でラウラ・ボーデヴィッヒと言う存在はこの日本から出ることすら許されないが、帰る場所すら無いのだが、俺は彼女のこれまでの行動を考えれば助ける気すら全く無いのだ。

後はどんな人生になろうと、彼女次第だろうとして、見送りを終えて帰るのであった。

そして冒頭に戻るのだが、次の臨海学校に関しての準備に忙しかった。

と言うのも、実は旅館やホテル等からはＩＳ関係者は良い目で見られていないのだ。

何故かと言うと、大半の関係者が【自分は選ばれた人間】みたいな感じで色んな所で問題行為を起こし、そのためＩＳ関係者はこの手の人間達からは白い目で見られているのだ。

そのため一部は金払いが良いがとし、関係者が泊まる場合は他の客を入れないようにして対応し、極力男性従業員が被害を受けないようにしているのだ。
「全く、たったの１０年くらいでここまで酷いとな」
「そうなのよね。私達の年齢ですら嫌われてるから、事前に引き締めも大事だもんね」
そして何とか臨海学校を行う旅館の予約等もでき、俺達は臨海学校への準備をしつつ、シャルロットと簪の二人には新規開発した専用機を持たせるようにした。
問題だった装甲も完成し、試作品だが完成したのだ。

同時にこの装甲の完成により、俺と刹那が運用するつもりでもある【真の専用機】開発も始まった。
これが完成した時、世界は新しい道へと進むことになると信じて